

---

my moon

白亜迦舞

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

my moon

### 【Nコード】

N5019D

### 【作者名】

白亜迦舞

### 【あらすじ】

「夢」、それは世界の嬰兒、欠片にして影。「現」に吞まれぬために夢世界は互いに争い、喰らい合っていた。ある時、「現」の世界から一人の少年が夢同士の戦場に迷い込む。夢同士が争うという儚い戦場で彼は何を思うのか。少年の葛藤と、共に暮らす女性たちとの交流を描く和風トーキングベットの語られはじめ。

## 0・1 「夢の欠片」

そこに炎があつた。灼熱が肉を焼いていた。  
そこに風があつた。風は刃となり舞う。  
そこに水があつた。傷を浄め屍を押し流す。  
そこに光があつた。幻が未来を見せていた。  
そこに闇があつた。深いところで何もしていない。

「助けて」

呆然と呟く女の声。

「　　！　こなくていい。私達は、私達の手で何とかできるんだから」

弱気から強気。意志を取り戻した声が聞く者の同情をはねのけた。

「戦うのが怖い。傷つくことが怖い。傷つけることが怖い」

映像<sup>イメージ</sup>が伝わってきた。それは屍の転がる田畑。実りを得る場所を、死が汚していた。

「私の恐怖を消して。私達の家を守るように。そのためなら、なにをしてもいいから。………私を好きにしても良いから。このカラダもココロも好きにして良いから！」

少女の声が聞こえなくなった。

今いるのは闇の中。黒い風、黒い虚空。何も見えない。

何も二見えない。しかし、存在を感じる。

下 重力を感じる方向 に大地がある。この身からずいぶん離れている。

この身は花びら。もしくは一枚の地図。ひらりひらりと空に舞いながら、少しずつ大地に引き寄せられていく。

この身のような花びらは周囲にもあった。

向こうで、二枚の花びらがぶつかった。

すべては闇の中。見えない中で、一方の花びらの消失を感じた。

私達は、夢。

夢はいつか覚める。現実という大地に落ちて解ける雪の一片のよう  
うに。

私達は、世界。

現ではない、夢の世界は互いに喰らいあっていた。少しでも己と  
いう夢が長引くように。

どうして生きている？  
どうしてここにある？

ここにいていいですか？  
無が怖いから。  
理由はないけれど。

## 0・2 「夜のとびら」

見上げる夜空は死のようだと思う。

都会の星の見えない夜空はただ真っ黒に塗りつぶされていて、その深さはわからない。

星の輝きのない夜は、虚ろ。こんな果てない虚空を、人は「死」と呼ぶのではないのだろうか。

前にも後ろにも進めないような虚ろ。絶望、そして死。

僕が死のことを考えているのに意味はない。

意味がないので、僕は就寝の前に散歩に出ることにした。

家を出る時、父が気のない声で、気をつけるよ、と言った。母の言葉は無い。なぜなら僕の家には母親はいないから。

外履きを履いたところで飼い猫の千代は僕を追って出てきた。彼女は散歩のできる猫だ。それも綱なしで。主観的な言い方をするならば、彼女は僕の良く懐いている。散歩をする時はだいたいついてくるし、そこでは一定の距離を保ち僕から離れない。

外に出る。初夏の夜は涼しい。頭上には、星の見えない炭のドームみたいな夜空がある。炭と言えば焼死体か。……また、死について考えてしまった。他に考えることはないのだろうか。

あ、「ずれ」なんてどうだろう。

自己採点にして四点くらい明るい議題を思考の中心に据えて、僕は進む方向を街灯のなさそうな方向に決めて歩き出した。

そう、僕はずれていた。世間とか社会とかそういうものから。まあ、それは若者らしい自然な悩みなのだろう。世の中は、僕がずれていようとずれてなかりうと構わず進むし。

でも、例えば僕が周りに人とは違う特異な力を持っていたとしたら、どうだろう。僕には物に「動いてもらう」「ことができる」「動かす」のではなく「動いてもらう」のだ。つまり、いいかえれば、僕は物にお願いを聞いてもらうことができるのだ。

が、それはずれとはちよつと違う。僕の小学校の頃のクラスメイトには心で話せる女子がいた。彼女は周囲によくなじんでいた。今はどうしていることだろう。

中二病。

ちなみに僕は現在高校二年生だ。中学校時代、対して問題を起こすこともなく、成績は高いところで安定し、推薦入学によってつつがなく僕は高校に上がった。

僕は社会的には今のところ問題ない人間だと思う。

母親がいない。

母は中学一年の頃に車に轢かれて死んだ。父は悲しんでいるそぶりを表に出さなかった。僕はそれから間もなくしてチヨに出会った。あの年は、悲しくて嬉しかった。

これも、ずれていることには関係ない。

しかし、こうなると僕がずれているという理由がない。理由が。

理由がない。

そう、理由がない。

僕が世界とずれているのには理由がない。ただ、何となくずれているのだった。

ずれているのが普通だ、僕は。

そして異常だ

僕はこの世界で生まれた。だから、この世界で生きていることには何も問題はない。不満もない。

もし、何処か違う世界から招かれることがあるとしたら、僕

はどうしよう。

新しい議題を見付けた。

しかし、ふと現実に戻って周りを見ると、そこが僕の目指していた場所、街灯のない星の見える場所であることに僕は気付いた。いや。

ここは街灯がないのではなくて、周りの電灯がすべて故障しているのだ。

この場所に立ち籠める闇は、僕の知る「闇」よりも少し深い。

闇の中心には小さな公園があった。頭上には星空、僕の望んだ。

そして、花びら。花びらが舞っていた。ずっと高く、遠い天空に、いくつも。

飛んでいる鳥を見るようなものだ。

しかし、視界の中で十ミリほどの大きさがあると言うことは、実際は旅客機ほどの大きさがあるのではないのだろうか、あの花びらは。

地上に目を戻す。

目の前の公園は柵に囲まれていて、門が設けられていた。アーチ型の門は夜闇の中ではつくりと口を開けていた。門自体はたいしたものではない。横から入れる。ペンキがはげている。ただ地面に突き刺さったアーチの、向こう側とこちら側の闇に違いなどありはない。

でも、それは門だった。二つの界を分けてつなぐ門。僕がここをくぐれば、違う世界へと僕は運ばれるだろう。確信する。

さて、どうしようか。

この門をくぐるのに理由があるだろうか。

僕のしてきたことすべてに理由があったわけではない。でも、どちらかといえば、理由のある行為が多かった気がする。

考えながら、少し待ってみる。何か起きないだろうか。すると、花びらが、例の大きな花びらが一枚空から降りてきた。

本当に大きな。



だから、僕は門をくぐることにした。あれを確かめるために、この世界を旅立つことにした。

ちよつと待て。

この世界を去るとして、それなら僕は何のためにいままでこの世界で生きてきたんだ？

少し考えて結論する。ああなんだ、僕は理由もなく生きてたんだ。でも、戻ってくるかも知れない。そうしたら、僕のこの世界での生活にも理由があったことになる、違っただろうか。

確かめに行こう、色んな事を。それが、いま僕が歩き出す理由。

十六年生きた世界から出た時、僕がまず入った世界は眠りの世界だった。

## 0・2 「夜のとびら」（後書き）

というわけではじまりました、白亜迦舞初の長編小説。はつきり言  
って最後まで書ききれぬか不安です。努力はしますけど。

十五禁ですが、ベクトルシーンを細々と書くつもりは一切ありません。  
「そういうことがあった」という表現だけに留まります。

「残酷な描写が」というのも、まあ、私程度の表現能力じゃ大し  
たことないと思います。

ただし、この物語はダークファンタジーのようなので、明るくて清  
らかな物語をお求めの方には、希望に添えないと思います。

感想をお待ちしております。

では、最後までお付き合い願います。

## 1・1「大根畑と戦場」

目が覚めた時僕の寢床となっていたのは大根畑だった。

からだに、力強い土のにおいと青々とした大根のにおいがしみついていた。

目の上にかかっていた葉をどけ身を起こす。突き抜けるように青い空。

真夏には、まだ遠いはずなんだけど。

奇妙に思いつつ、立ち上がりそして足元を見た。

僕は、中学一年の時以来目にしていないものを見た。

人の死体。

のどとそこから下に、鋭利な何かで斬られた傷がいくつも付いていた。四年前、棺に入っていた母の亡骸にはなかったものだ。

僕は死体の横で寝ていたんだ。

胃にむかつきを感じた。

このまま大根の間に吐こうかどうか考えた。だが、その思考は三秒ほどで打ち切られた。

ぐしゃり、と背後で大根が踏みつけられる音がして、振り返るとそこには二本足で歩く毛むくじゃらの化け物がいた。

歪いびつな三ツ目が僕を憎しみを込めて見ていた。

とっさに走り出した。駆け引きも何もなく。

三ツ目の化け物が追ってくる。全力で走る僕に少しずつ間を詰めてきた。四歩前に僕がいた場所に、いま奴がいる。……ああ、いつのまにか、三步前の場所にいるよ。

背中越しに息吹を感じた。血のにおいに満ちた、必殺の息吹。さ

して鋭くなさそうなあの口蓋で、僕の肉を咀嚼したいのだろうか、奴は。

痛いだろうな。

僕は想像する。自分の肉体が少しずつ噛み千切られる痛みの中で、自分という意識が、死という名の無の海に沈んで消えていくことを。そして僕は戦慄した。僕は恐怖した。気が狂いそうな程強い恐怖が僕を駆り立てる。

苦し紛れに見上げた空。あの空はあんなにも汚れないのに。

そう、この空は未だ見たことがないほど清浄で澄み渡っていた。都会の、ビル侵された空とは異とされる、何一つ邪魔物のない自由な空<sup>ひやう</sup>澱みのない空がここにはある！

つまづいた。

死は獲物の動きが止まったことを知り、その足をゆるめる。少しでも狩の時間を長引かせるために。

化け物の足が、僕の足を踏みつけた。

痛い

コワイ。

＊

「炎よ！」

＊

恐怖ではち切れそうになった頭蓋骨の上を熱がなめていった。

化け物の足がから僕の足が自由になった。動物的な単純思考で草むらを這いずり、化け物から距離を取る。それから、身を転がして化け物を見た。化け物は。

そこには、炎に包まれた‘人間’がいた。

「ぐああああああああああああああ！」

頭を抱え、地面を転げ回り悶える一人の人間。その光景はまるで映画のように、僕は現実味を感じられなかった。

だが、肉の焼けるにおいを鼻にした時、僕は反射的に嘔吐してい

た。

ひとしきり吐いて、それでもまだ胃が痙攣しているのを感じた。吐き気はおさまらない。だが、僕は一度目を反らした光景に、再び目を向けてしまう。

しかし、そこにはもう生きて悶え苦しむ人間はいなかった。そこには、バーベキューの燃えかすのような残骸と焦げた大根の葉しかなかった。

立ち上がろうと思った。

その時、初めて僕の側に誰かが立っていることに気付いた。

気付いて、身がすくんだ。

けれど、その「誰か」はただ静かに傍に立っているだけだった。

もし、「誰か」が僕を狩るためにここにいるのならば、僕はとつくに死んでいるだろう。

だから、僕はおそろおそろだが傍に立つ者を見上げた。

そこにいたのは赫い髪の女性。

珊瑚色の双眸が僕を見下ろしていた。

## 1・2「赫い少女との出会い」

僕を見下ろす珊瑚色の双眸。そこに込められるのは、警戒。先程のような殺気は感じないが、敵意があるのは否めないことだった。

僕と目を合わせ続けていても、そのままでは彼女が結んだ口を開く様子はなかった。こちらの出方を最大の警戒で窺っている。だから、僕の方から思い切って話しかけてみるしかない。

「あ、あの……、もしかして、さっき助けてくれました」

あの人間をあなたが焼いたんですか？　どうやってやったのですか？

そんなことまでできない、当たり前のことだが。

「何処から来たの？」

尋問がはじまった。高圧的な彼女の態度に、僕は大人しく服従し彼女が問うままに答える。

「から」僕の住所だ。

「……名前は？」

名前？

何故だろう。思い出せない。

答えられない。黙していると身に危険が及ぶと判断したので、あ、とか、えっと、とか適当に呟いて間をつなぎながら、僕は自分の名前を必死に思い出そうとした。しかし、だめだ、思い出せない。

『ツミ』？

あれ、僕ってそんな名前だったっけ？

時間切れになってしまった。ふん、と頭上から鼻で嗤う声が聞こえた。

「どうやら、『新入り』のようね。……こんな時に」

新入り？　彼女は何を言っているんだ。

彼女の腰に当てられていた右手が持ち上げられた。

次の瞬間、僕の目と鼻の先には火があった。

「ひっ！」

反射的に火から身を退き、そのために両手を後ろについた。火から距離を置いて気付いたことがあった。火は女性のまっすぐ伸ばして揃えられた人差し指と中指の先で燃えていた。彼女の指を焦がすことなく。

「質問に答えなさい」

従順に、はい、と答える。

「私と戦うつもり、ある？」

「い、いいえ！」

「嘘、ね」

火が眼球をなめるくらいに近づく。

「う、嘘じゃありません！」

「証拠は？」

「あ、ありませんけど……」

火が消えた。

ほっとしたのも束の間、目の前から消えた彼女の右手の代わりに、左足が僕の方に出されていた。

「もし、私と対立する気がないのなら、靴を舐めて証し立てなさい」

抵抗感でとつさに返答できなかった。そんな僕に、彼女はおそれていた通りの残酷な宣告を下す。

「さもなければ、焼き殺すわ」

選択の余地はない。僕は彼女の足の上に身体を傾けた。

スニーカーを履いた彼女の足。少し泥に汚れている。それを両手で包み、顔を寄せ、なめる。

土の味がした。



顔を離してみると、スニーカーには僕の唾液がべっとりと付いていた。

頭上から女性の満足そうな声が降りてきた。

「いいでしょう。立ちなさい」

立ち上がると、彼女の背丈が僕とだいたい同じ物であることがわかった。同じ高さで見る彼女の顔は、すっと通る整った鼻梁につややかな唇、白い肌、そして何より印象的なのは虹彩が珊瑚のように朱いつり上がった目。

「どこかで休みたいでしょ？」

彼女の問う口調は、僕を完全に見下したそれだった。

「い、いいえ。お気遣いなく。あなたのご自由になさって下さい。わたしはあなたの後ろについていきますから」

僕は彼女に服従することを拒絶はしない。さきほどの炎から推測するに、彼女は僕の命の恩人であろうし、逆らっても得るところは何もなさそうだからである。それに、僕は彼女を美しいと感じた。美しい女性の下なら僕は嫌わない。

が、彼女はそれも一笑に付した。

「別にへりくだらなくて結構よ。敬語も必要なし。それと、私は疲れたからどのみち家に帰る。言っておくけど、ここいらに『私達』の家以外に住める場所はないわよ」

「そうですか、なら」

「敬語はいらない！」

「ご、ごめん。君についていくよ」

彼女は不愉快そうに顔をしかめる。また火を突きつけられるかとひやりとしたが

「私の名前は アカ。これからはそう呼びなさい」

火はなかった。

「赤？」

「意味はないわ。あるいは、いくつも意味がある、と言うこともね」

アカが僕の方へ軽く手を差し出す。天に向けられた掌に火が起る。

「例えば、炎の『赫』。あんたにむかついたら、これで燃やしてあげる」

「け、結構です」

彼女との微笑ましい関係を結ぶ第一歩として、僕はここで苦笑をしてみた。我ながら引きつった笑いだった。

「あんたのことはなんて呼んだらいいかしら？」

冷たい視線で僕の苦笑を見やった後、こう尋ねてきた。

僕は少し考えて、答える。

「ツミ と呼んで」

これは先程、脈絡もなく頭に沸いた音。結局、これが本当に自分の名前のような気がしてならなかった。

アカはわずかにひるんだような表情を見せた。次の刹那には元の不機嫌な表情に戻ったが。

それ以上彼女は何も言わず、僕に背中を見せ歩き始めた。

背後から彼女の全身を見た。長襦袢の上に梅紫の着物、更にその上に狩衣という古めかしい服装。そのわりに、足にはスニーカーを履いているのだから妙なものだ。

だが、僕はアカの言ったことからすると、これから一生、少なくともしばらくの間だけでも、彼女のほめかした同居人たちと寝起きを共にすることになるのだろっ。

### 1・3「天戸の宅」

大根畑が芋畑になったところで、僕とア力は再び化け物に遭遇した。

今度の奴は毛むくじらではなく、紅い毛のない肌、頭部に二本の角、鬼の姿そのものだった。

鬼は僕たちを見付けて猛然と走り寄ってきた。

僕は怯えてア力の背後に隠れてしまう。

ア力は僕を見てはいない。まっすぐに鬼を凝視し、やおら右手を高く掲げる。人差し指と中指を揃えて伸ばした手の形、剣印と呼ばれるらしいその手で自分の目の前の地面を斬るように横に振る。

「……退け」

小規模な炎の壁がア力の目の前に立つ。そこには燃える物などない、あるのは芋の花だけである。

炎の壁に阻まれた鬼が立ち往生する。その間に、彼女は肩に持つて行った右手に炎の玉を創り出す。

「焼き尽くせ！」

紅い鬼の身体が赫い炎に包まれる。そして悲鳴が上がる。

「きゃあああああああ！」

甲高い女の悲鳴だった。絹を裂くような声に炎は揺らぐが消えはしない。

それはまさしく『地獄変』のよう。

においと光景に吐き気を催したが、僕は吐かなかった。我慢したからだ、我慢できる自分の冷静さはいったい何なのだろうと不思議に思った。しかし、その理由を考えるほどには冷静ではなかった。ア力は自分の焚き火を無感動に眺めているだけだった。

悲鳴が途絶え、人間の炭ができあがった後は、ア力はそれをまたいでさつさと歩き出した。僕は焼死体を迂回しつつ彼女の後を追う。

「質問しても良いかな？」

「歩きながらで良いなら、どうぞ」彼女は振り返らずに答えた。

「どうやって火を熾しているの？」

「それが私の能力だからよ。私が望めば、そこに燃えるものがないくても火は熾る」

足を速めて彼女の横に並ぶ。僕を見もしない彼女の横顔は、血の気を少し欠いて少し青ざめていた。

「顔青いよ。大丈夫？」

「大したことじゃないわ」素っ気なく答えられた。

「私の呼ぶ火は、燃やすものがない時私の『気』を燃やして存在し続ける。だから、少し疲れただけよ」

僕はもう一つ質問することにした。

「さつきのやつ、最初は鬼だったのに、ア力が燃やしたら人になったよね？ あれはどういうことなの？」

「あいつらは違う『夢』から来ているからよ。夢に住む者は、違う夢に移動すると変質してしまう。もし、自分たちの存在で侵入した世界を塗り替えることができたなら、あいつら侵入者は元に戻る。ア力は当たり前のようにこんなことを言うが、僕にはさっぱり何のことだかわからない。」

「まぼろし？」

「夢は世界の欠片、現の夢。有限の小世界。……ああ、めんどくさい。あとはササヤキにでも聞きなさい」

「彼らは人間なの？ 君は人間と戦っているの？」

「そうよ。あいつらは人間。そして、私はその人間を燐寸棒にする人殺し。 私達は、生き残るための戦争をしているのよ」

いったい何ための戦争なのか、僕はわからなかった。しかし、血と鉄のにおいをするその言葉に僕は身震いした。

いままでこちらを見向きもしなかった彼女が、卒然と赫い瞳でこ

ちらを見た。その口は底意地の悪そうな嘲笑を浮かべて。  
「ツミ、あんたにもきつと私の火のような力があるわ。そして、あんたは私達と同じ世界の住人。この意味がわかる？ あんたも、これからその身が果てるまで私のような人殺しとして生きていくのよ。この世界の、屍で築かれた土台を崩さないためにね」

\*

それからしばらく無言の時が過ぎ、そうしている内に僕らの前に一軒の日本家屋が見えてきた。

塀はないが、黒い整った萱葺き屋根に、崩れたところのない土壁。貫禄のある立派な家だった。

堅い木の戸がからからと小気味よい音を立てて開かれた。よく手入れされているようだ。僕はこの敷居をまたいだものかと考えたが、「入りなさいよ。ようこそ私達の家『天戸の宅』<sup>あまこのやね</sup>へ。あんたはこれから死ぬまでここで住むのよ」

やはり、僕はここで一生住むようだ。

そう言うわけで、僕は気兼ねなく戸をくぐり、三和土で運動靴を脱いで家に上がる。薄暗い家の、木の床は少しひんやりして足の裏に心地よい。少し、疲弊していた気分が和らぐのを感じた。

火のない囲炉裏の前に座るように促される。僕が座ると、ア力は九十度ずれた場所に胡座をかいて座った。

そして、彼女はそれ以上喋ることも動くことも止めてしまった。

静寂。かすかに虫の音が、ちりちりと聞こえる。

心休まる時ではある。日本人の心というか、こういう家にいると

とても心和むものを感じる。しかし、さすがにここまで来る道すら似合ったことを考えれば、このまま空気に流されてのほほんで  
きるほど僕は図太くない。アカは仏頂面で座っているし。

「あの……」控えめに呼びかけてみた。

「黙って座ってなさい。直にササヤキとキズオトが帰ってくるから」  
「またしても、彼女はこちらを向かず言うことだけ言ってくる。」

僕は食い下がってみる。

「えつと……」

「お茶？ 家事一般は、竈の火付けと風呂焚き以外はササヤキの  
領分なの。私が台所に行っても散らかしてしまうだけ。だから、我  
慢しなさい」

何か、違う。

そんな僕の苦笑を余所に、彼女は囲炉裏の顔を近づけ、ふ、と息  
を吹きかけた。すると、そこに小さな火が熾きた。

為す術を失った僕は、それを見ながら名前しか知らぬ誰かを待つ  
ことにした。

## カラカラカラ

涼しげな戸の開く音が、待ち人の間に虫に食われたようにぼやけ  
た僕の意識に響き、覚醒させる。七割方眠っていた心が、四割ほど  
覚醒に近づく。

そして、残りの四割は

「はじめまして、ツミ！ あたし、キズオトだよ      よろしくね」  
突然の衝撃に一撃にして覚醒させられた。

衝撃の実体は一人の少女だった。まだ幼い。

少女に飛び込みの抱擁を受けて、僕は支えきれずに後ろに転倒した。蜂蜜色の長い髪が僕の顔を覆う。

「いたい」

「あ、ごめんツミ。大丈夫？」

なんとか、と答えつつ少女を身体の上から降ろし起き上がる。

首を回して周囲の状況を確認める、目の前に囲炉裏、僕のすぐ左に先程の空色の瞳の少女（キズオトと言っていた）。そして、前方左にやつくアカ。そして、囲炉裏を挟んだ戸口側に青い短い髪の背が高い女性が立っていた。

女性は僕の視線に気付き、にこと微笑んだ。

「キズオトが粗相をしてごめんなさいね？ 私はササヤキ。よろしくね」

「あ、はい。こちらこそ」

ササヤキ（囁き？）と名乗る女性は僕やアカより一回りほど年上のようで、落着いた空気が彼女の周りにはあった。月白の生地、魚の文様が入った留袖を身に纏っている。その上から、透ける生地の打掛を着ている。

キズオトの方は、僕より一回り幼い、多分十歳行くか行かないかぐらいの歳だと思われる。やたらぶかぶかの唐草模様の袴を着ている。開いた襟口から、茶色の小袖が見えていた。

「アカ、お茶……そのまえに、お湯くらい沸かしておいてくれなかったの？」

ササヤキさんがアカを嗜めるように言う。

「台所に行きたくなかったから……」

「もう、しょうがない子ね。お手伝いなさい」

妙に歯切れの悪いアカだった。さすがの彼女も、ササヤキさんには逆らえないようだった。母親というか姉というか、ササヤキさんは本当に大人の女性らしい雰囲気を持っている。

僕はキズオトと二人になった。彼女が空色の目をくりくりさせな

から話しかけてきた。

「ねえ、ツミはやっぱ『現』から来たの？」

「『現』……」

良い機会なので、僕は彼女に気になっていた幾つかのことを教えてもらうことにした。

「キズオト。僕には君たちの言う『現』や『夢』というのがわからない。一体それは何なの？ ア力は戦争をしていると言っていたけど、もしかして君やササヤキさんも戦っているの？」

そうだよと彼女は無邪気に答える。

「えっとね、まず『現』と『夢』の違うところを教えるね。ツミのいた世界ってとっても広がったでしょ？ それはね、『現』神様がちゃんと創った世界だからだよ。『夢』はね、『現』の欠片みたいな世界。『夢』の世界は狭いの。歩いて半日くらいで端まで行ける」

「世界に端があるの？」

「うん、崖がすとーんとあって、そこから先は何もないの。」

「それでね、『夢』はいくつもあって、それが時々ぶつかり合うの。ぶつかった『夢』同士は戦争をしなくちゃいけない。勝ったほうは存在し続け、負けたほうは消滅する」

そんな……信じられない。

「僕は……、こんな世界で暮らさないといけないのか」

「うん。……それでね、もし、ツミが戦う力を持っていたら、私たちと一緒に戦争してもらうの」

なんてことだ。

キズオトが、こんな幼い少女もまた平気で『戦争』と口にする。

あまりの事実に、無意識に笑い出してさえしまう。

「……そうか、わかったよキズオト。ありがとう、教えてくれて  
ところで、君はどうして初め会ったときから僕の名前を知っていたんだ？」

問われた彼女は何故か誇らしそうに胸を張って、笑った。



「それはね、あたしに風を使う力があるからだよ。この世界の中で起きていることは、風が全部教えてくれるの」

「それはすごいな」

便利そうな力だが、いくら狭い世界とはいえ、あちこちで起きていることが全部わかるのは、ただうるさいだけのような気もする。

僕の思考とは別に、キズオトがいたずらっぽく笑いながら身を寄せてきた。なかなか、表情豊かな子だ。

「ねえねえ、ツミ。アカのこと、どう思う？」

「へ？」

ちよつと予想外の質問だった。

「わからないよ、まだ会ったばかりだし。……ちよつと気難しいというか強気な人だとは思ってたけど」

うんうん、と何故か然り顔でうなずく彼女。

「アカはね、恥ずかしがり屋さんだから。ツミがこの世界の事を聞いても詳しく教えてくれなかったのも、そういうことだから、許してあげてね？」

「えつと……、恥ずかしがり屋？ 何で僕の前でそんな……」

「もう、ツミは鈍いの？ アカはね、ツミの事を……」

「キズオト」

まるで氷のような声だった。もしかして、彼女は炎だけではなく氷も操るのではないのだろうか？

「余計なこと新入りに吹き込んだら、もろとも焼くわよ」

「あ、はは。わかったよ、アカ。今日はこれくらいにしておくね」  
「今日は？」

「アカ、キズオト、ご飯ですよ」

ササヤキさんが湯気の立つ四つのお椀を、大きなお盆に載せて持ってきた。が、渡された中身を見て一言。

少ない。

「食べて、休んだらすぐ戦いに出るからね。あんまり沢山は食べちゃ駄目なの」

「……僕も行くんですね」

「当たり前じゃない。男でしょ。せいぜい頑張りなさいよ」

僕にとって酷なことを、アカはさらりと言ってくれる。あんまり素っ気なく言ってくれたせいか、拒絶する気も起きなかった。

というより、何故だろう。先程キズオトに戦への参加を告げられた時は嫌だと思ったが、こうしてみんなと座っているとあまり抵抗感が沸いてこない。

手にしたお椀の中身。蕎麦と高野豆腐が醤油スープで煮られたあつさりした汁物。あたたかい。

ここにいてこと自体は嫌じゃない。むしろ、嬉しい。強気なアカ、優しいササヤキさん、無邪気なキズオト。まだ合ったばかりなのに、三人を家族のように親しく感じる。<sup>ちか</sup>ここにいたい、ここにいたい。なら多少の代償だって惜しくはない、そんなふうにさえ思える。

僕には父親がいた。母が死んでから、彼は人との接し方を忘れ、ひたすら無関心に僕と会話するだけだった。僕は家の外でも中でも人に心を許すことはできなくなった。僕の心に通じる唯一の生きた事物は、飼い猫だけだった。

そういえば、僕の飼ってた猫の名前は何と言ったっけ。

また、思い出せない。

大切だったはずなのに。自分の名前よりも。

大切だったはずなのに。

「ツミ？　ぼんやりして、どうかしたの？」

ササヤキさんが気遣わしげに僕を見ていた。

「具合が悪いなら、来なくても良いわよ？」

「あ、いいえ。心配いりません。……ちょっと、眠っても良いですか？」

「ええ、お休みなさい」

空にしたお椀を返し、出してもらった座布団に頭を載せて僕は瞼を降ろす。

未知の世界での初めての眠りは、ありふれた浅いものだった。畳みがやわらかかった。

### 1・3「天戸の宅」(後書き)

書くのが追いつきません。なかなかほかどらない……。

ところで、ここで先に宣言しておきます。

『ツミはへたれではありません』

美少女ゲームのとかの男主人公ってへたれで何でこんな奴が……、  
て言うのがありますよね。私はああいうのが嫌いなので、ツミ君に  
はこれから頑張ってもらうつもりです。こうご期待、です。

## 1・4「初陣」

敵は九割方倒され、残存戦力は天戸あまこのやねの宅の北に集まっているらしい。ただし、敵の侵攻は、ササヤキさんが張ったという『流水の結界』に阻止されている。後は四人で（実戦力は三人だが）一網打尽にして終わりらしい。

家を出る前に、僕はササヤキさんから和服を一式もらった。一張羅だと言う。

「どうして、こんなものが？」

「なんとなく、日頃手が空いた時に服を作り溜めているのよ。誰のためというわけではなく、ね。ほら、大きさも良いでしょ。お呪いまじなをかけてあるから、今のあなたの服よりも戦いの上で安全なのよ」

と言われるままに、なんと僕は下着まで一気に脱がされ、ふんどし、亀甲模様のシャツ、一番上に青い牡丹模様の描かれた着物を着せられた。

「どう？……動きづらいかしら？」

十七年間着てきた洋服と違い、和服はだふだふして、足はすうすうしている。しかし、

「いいえ。なんだか、うまく言葉にできませんけど、良い感じですよ。身体になじみます」

この服を着ているとわかる、これが布を織るところからして人の手で作られたということが。それ故の不思議な安心感があり、僕はこれにくれたササヤキさんへの感謝で胸が一杯になった。

「ふん、良い仕立てじゃない」とア力。

「ありがとう」

「勘違いするんじゃないわよ！ 私は、ササヤキの作った着物をほめているのよ！」

顔を真っ赤にしてアカが叫ぶ。その横では、キズオトが妙に楽しそうにやけていた。

件の『戦場』は天戸の宅から北へ三十分ほど歩いたところにあつた。

そこは何の変哲もない平原。ただ一つ、幅の広い川が土手を作らずに不自然に流れていることを除いては。

時は宵の入り。月の昇りはじめた空。異形の者達が川を渡ろうと手を前に伸ばしながら水をかき分けていた。

「あれが私の『流水の結界』。この『鹿屋の原』の神と、近くに流れている『八衢川』の神にお願いして、普段川じゃないところを川にしているの。この世界に属さない者達 この世界にとって

邪 と見なされるの者は あれを渡ることができないの」

以上、ササヤキさんの説明だった。僕にはちよつとわかりづらいところがあつたが、逐一質問しようとはしなかった。

ばさり、と横でキズオトが唐草模様の袷を脱いだ。その下に、燕の描かれた着物を身に着けていた。

キズオトは一人僕たちの前を歩き出す。その後にアカが続ぎ、僕は彼女らに駆け寄ろうとするとササヤキさんに服の裾を掴まれてそれを止められた。

「二人に任せないさい。あつという間に片付けてくれるから」キズオトとアカが敵軍の三十メートル手前で立ち止まった。僕はそれより更に二十メートル離れている。

風が背後から吹いてきた。暖かくも、涼しくもない風。

キズオトの蜂蜜色の長い髪がふわふわと風に舞い始めた。

川の上に、赤い華が咲いた。

断続的に微かな切断音が聞こえ、その度に化け物の身体から血しぶきが上がっていく。

風がだんだん強くなる。それに比例して、化け物が死んでいく間隔が短くなる。

死んだ化け物　人間の姿に戻った者達　は、屍も生き血も、すべて川に流されていく。

「な、何が起きているんですか？」

ふきすさむ風の中、少しずつ前進をはじめたササヤキさんに問う。  
「風の刃よ。キズオトは、風を操り、知覚できる範囲すべての敵と同時に戦うことができるの」

知覚できる範囲。それがどの程度広いのかはわからないが、見ている限り半径五十メートルはある。

「キズオトは私達三人の中で一番強い。だから、私達は彼女のことを『風神楽の巫女』と呼んでいるのよ」

やがて、渡河していた敵が一掃された。血も屍も、すべて水に流れていった。

終わったのかとササヤキさんに問おうと彼女の横顔を見上げた。

彼女は、口を動かし何かを呟いていた。目線は前方、川面にあるのか。まるで川に　囁き　かけているようだった。

そして、川の流れが途絶えた。

どうしたことが尋ねようと思ったが、アカとキズオトが前進をはじめたので、何も言わずササヤキさんと共に彼女らの後を追うことにする。

新たな敵が姿を現した。脇の下から翼を生やし、逆さに飛ぶ人型だった。それは五人いた。

豪と風が吹きキズオトの髪が翻る。

五体の化け物がそれぞれ何かを避ける動作を見せた。キズオトの風の刃が飛んだのだろうか。

化け物たちがキズオトに襲いかかる。その間にア力が割り込んだ。

「緋燕翔！」  
ひえんしょう

彼女がぱつと右腕を振り上げると、それに答えるように足下から天に向かって火花が吹き上がる。

化け物たちはそれを避けて彼女たちに近づこうとする。だが、数え切れない火の粉は避けきれるものではなく、化け物の身体の上でくすぶりはじめる。

化け物が更に彼女らに接近する。引きつけているのか？ 彼女らに焦る様子はない。

「風の龍。あたしと共に！」

キズオトの澄んだ高い声が響き渡った。

彼女らを包んでつむじ風が立ち上る。

風に煽られて化け物たちは後退を止む無しとされる。だが、その彼らをさらなる攻めの一手が襲う。

火だ。化け物たちの身体の上でくすぶっていた火種が、キズオトの風を受けて急速に勢いを増しはじめる。彼女の呼んだ風は乾燥した暖かい風だった。

間もなくして、けたたましい断末魔と共に化け物の一人が逆さのまま落ちていった。

何とか火を払おうと、盲鳥めくらどりのように無茶苦茶に飛び回る化け物たち。二人目が火だるまになって流星の如く草原に落ちた時、一人が僕らの方へ飛んできた。

「う、うわ、こっちに来ますよ」



「大丈夫。少し、私の活躍させてもらおうかしら」  
余裕の微笑みを浮かべたササヤキさんが一歩踏み出す。頭上の化け物に目を据え、また、囁くように口を動かしはじめた。  
僕らを狙う化け物の周りにキラキラと光る粒が現れ始めた。  
にこりとササヤキさんが嗤った時、幾つもあった光の粒が水の槍となつて、化け物の身体をあらゆる方向から貫いた。

「ね、どうだったかしら？」

こちらを向いた彼女の背後で、ずしやりと音を立て、三人目の化け物が落ちた。

気が付けば、身体に火を付けられ人魂のように飛び回っていた化け物たちはすべて空から落ちていた。

夜は更け、星が輝きはじめていた。月は戦いの始まった刻より少し高くなっていた。

「終わっただんですか……？」

僕はササヤキさんに尋ねた。しかし、彼女はわからないといった面持ちで首を振っただけだった。

「まだだよ」

乳色の長い髪を乱したままのキズオトが隣に立っていた。

「くるよ……」

僕の後ろで何か弾けた。

なんだ……？

振り返ろうとした時、アカからの一喝が飛んだ。

「ふせなさい！ あんたじゃ何もできないでしょ！」

肩にササヤキさんの手がかかけられ、僕は引き倒されるようにしゃ

がみ込んだ。

その時僕は見た、背に大きな鳥の羽を生やした、天狗を。  
かまいたち

「鎌鼬！ 絆により、あたしの元に来て刃となりなさい」

風が唸る。

僕とササヤキさんはただ頭を低くして身を守るしかない。

アカは両手に火を灯し空を飛ぶ敵を待ち受けていた。

「一の飯綱いすな、行け！」

頑がんと夜空の中弾ける音がする。

天狗は杖を持っていた。生半可な攻撃は防がれてしまうようだ。

「斬れ、二の飯綱！」

斬ざんという音と共に悲鳴が上がる。だが俊敏に飛び回る天狗の動きは止まらない。

少しずつ、旋回しながらキズオトに近づく。

「討て、終ついの飯綱！」

鎗矢のような高い音が夜を切り裂く。

放たれる光る風。

天狗はそれをかわした。

反撃の一刀が幼い少女を襲う！

「キズオトお！」

「ツミ、伏せてて！」

「火雷撃！」

アカの放った炎の稲妻にひるんでせいで、天狗の斬撃は浅く留まる。

天狗は上空に退避する。

ササヤキさんが膝を折って座り込んだキズオトに駆け寄る。僕もその後を追った。

ササヤキさんの肩越しに覗き込んだキズオトは、左肩から着物を赤く染めていた。目を閉じて、浅い呼吸をしている。

「ササヤキさん、キズオトはどうなんです？」

彼女は冷静な声で答える。

「すぐ手当てすれば問題ないわ。それは私に任せて。でも、これ以上キズオトを戦わせるのは無理。私も退かないと行けないの。」

アカ、どうしたらいいかしら？」

アカは僕らの頭上に炎を舞わせ、上空からの攻撃を牽制している。自分の炎から目を反らさず、感情のこもらない声でササヤキさんの問いに答える。

「帰りなさいよ。後は任せて頂戴」

「ツミ、アカをお願いしても良いかしら」

ササヤキさんの目にこもるのは、憂い。僕は幾ばくかの恐怖を抱えながらも、できるだけ彼女を安心させられるように自信いっぱい装って答えた。

「任せて下さい。できる限りのことをしますから、ササヤキさんはキズオトを治してやって下さい」

弱々しく微笑む彼女。

首を落として何ごとか囁くと、彼女の姿はキズオトごと水に包まれた。

そして、水の塊が崩れた後には誰の姿もなかった。

「水遁よ。水に隠れて遁げる術よ」

そう説明してくれたアカの横顔は、心なしか怖れの色をおびていた。

## 1・4「初陣」(後書き)

なんだか、だんだん文が雑になってきているような気がします。

今回はちよつと、使ったネタについて解説します。

まず「流水の結界」。流れる水が魔物を祓うというのはガス・ニクスの『古王国記シリーズ』からアイディアをもらいました。このファンタジー小説は、私の中ではトップクラスの面白さでした。

「脇の下から翼」は中国の古い物語でたまに出てくる超人の形です。『封神演義』の雷震子もこんな感じでした。

## 1・5「炎の目覚め」

火炎の繭の中で、僕はアカの謝辞を聞いた。

「わるかったわね、つきあわせてしまつて。ササヤキに早く帰つてもらうためには、私が大人しく話を聞くしかなかったから……」

彼女の言わんとするところがわからない。僕がその真意を尋ねると、今まで強気な顔しか見せなかった彼女からは予想だにできない、自分の耳を疑いたくなるような告白を彼女はした。

「私は、本当はあまり強くない。キズオトに比べれば、私は彼女の足元にも及ばない。私では、あいつを倒せないわ」

「嘘」

「本当よ。残念なことだね。ただ一つ方法があるとすれば、この身を焚き代にして、あいつと差し違えることね。……だから、逃げなさい」

僕を見た珊瑚色の双眸は、弱気な光しか宿していない。

何故、僕は問う。

「どうしてそんなに弱気なの？ らしくない。もつと自分の力を信じなよ。アカにだって、キズオトくらいの力、あるはずだよ」

「それが怖いだよ！」突然、彼女が叫んだ。

僕らを包む炎の繭が揺らめいた。その隙間から、天狗が諦めることなく僕らを攻撃しようとしているのが見えた。

「私には炎を自在に操る自信がないの。もし、私がキズオトくらいの戦果をだそうすれば、何もかもまとめて焼き尽くしてしまいうで……、それが怖いだよ」

だいたい、と彼女は口を嗤いの形に歪めて言う。

「あんた、半日の内にすっかり頭がいかれたんじゃないの？ キズオトがあんなに殺しまくっているのを見て、あんたは何も思わな

かったの？ 私はいやよ、キズオトみたいな殺人機械に 火炎放  
射器に成り下がるのはごめんよ！」

うせなさいよ。

僕の三方に炎の壁が立ち上る。開いている一方は、すなわちア力  
から遠ざかる方向。

何も、僕にはできないのか。僕にも、彼女らみたいな力はないの  
か！

炎を避け、描けだした夜の原野。そこに 。

月。

\*

少年が走り去ってから五分が経った。天狗は未だにア力を攻撃で  
きないでいた。

理由は簡単。赫い髪の女性を囲むように、炎の柱が高くそびえ立  
っているからだ。

ア力は炎の柱の間で、恐怖と戦うように唇を噛みしめていた。寒  
くはない、むしろ暑いくらいの炎の狭間で、彼女はひたすら身を震  
わせていた。

突如、炎の柱が消えた。

アカは驚愕した。身体を振るわせていたことも忘れ、空を仰ぎ見る彼女。

天狗もまた吃驚した。だが、すぐさま自制を取り戻し、アカへ襲いかかる。

しかし、彼の翼を貫くものがあつた。

光の矢。夜空に溶け入る黒い翼を、真っ白な光り輝く矢が射抜いていた。

天狗が絶叫した。

ようやく我に返ることのできたアカは、天狗には目をやらず、矢の飛んできた方向に目をみやる。

そこに立つのは、月光を背にする一人の少年。

ツミ。

そう、僕だ。

僕ではない、僕。現<sup>うつ</sup>から来た無知で無力な少年ではない、新しい僕。

ツミは力に目覚めた。それは月光を自在に操り形となす力。例えば左手<sup>ゆんで</sup>に持つ弓のように。右手<sup>めて</sup>を構えれば現れる矢のように。

満月のように弓弦を引き絞る。狙うは天狗の無傷な方の翼。必死に狙いをかわそうとする浅はかな鳥に、ツミは矢を放つ。

月光の矢はあやまたず天狗の羽を射抜いた。

断末魔のような痛々しい叫びを上げながら、天狗は地に落ちた。

「ツミ……、あんたその髪……」

啞然と僕を見つめるアカ。

彼女の言う通り、僕の髪の色は元の黒から月白に色を変えていた。力に目覚めたからだ。

ツミはゆつくりとした歩調でアカに近寄っていく。

そして彼女の唇に自分の唇を重ねた。

唇を奪われたことに目をむく彼女。だが、その間にも、ツミの舌はアカの滑らかな前歯をすり抜け、彼女の舌を絡め取っている。

「何するのよ！」

アカは僕を突き飛ばし、校内の液体を吐き捨てる。草むらに落ちるのは、彼女の唾液。そして僕の唾液。

「君を助けてあげる。君の恐怖を消してあげる」

静かな声で、ツミが言う。アカの甘い唾液の残る口で。

「悦楽を。快楽を。君の心を酔わせ、君の恐怖を消し、封じられた炎を解き放つてあげる」

はつと息を呑み、身を強ばらせる彼女。だが、やがて彼女はおずおずと尋ねる。

「本当に、炎を使えるようにしてくれるの？ 本当に、私を……解放してくれるの？」

「解放しよう。ランプを割るように。君の心のガラスを打ち毀し、その中に閉じこめられた火を、炎へ！」

そして間を置かず口づけ。今度は拒絶はされないが、彼女の瞳にはいまだ戸惑いと怖れが残る。

「怖いのか？」

ツミが囁くようにたずねる。アカはびくりと肩を震わす。

大丈夫、ツミはアカの言葉を待たずに話しかける。

「僕はここにいるよ。君を傷つけるものすべてからまもってあげる。君が壊れそうなら抱きしめていてあげる。だから、もう何もこわがらないで」

のぞきこんだアカの瞳に宿るのは、僕の顔、そして月。



月光に煌めいた彼女の目からとまどいが消えた。

「ん……、ツミ………」

二人はむさぼり合うように接吻する。繋がった口内で舌が絡まり合い、唾液が混じり合う。

握り合う両手。その一方をツミがそつとほどく。そして、その手はゆるやかに彼女の下腹部へと降りていく。狩衣の前垂れをめくり、赤い着物の裾をくぐり、長襦袢の上から彼女の恥部に触れる。

襦袢の下は汗にしめっていた。

触られたことを感じてか、彼女が口づけをしたまま呻く。

天狗が彼女の背後から忍び寄っていた。翼を使えなくなった天狗は、忍び足でこちらに寄ってくる。

ツミが空いているもう片方の手を天狗にかざす。手のひらから衝撃が放たれる。

天狗は両足を折られた。だが、命を落とすことはなかった。

ツミは故意に天狗の命を奪わなかったのだ。冷静な瞳のまま、アカとの口づけを続ける。

しばらくして、ツミの方から唇を放した。二人の唾つばきが口と口の間系のように引かれて月光に煌めいた。

「さあ、君の秘めた激情を見せて。赫然と燃える、君の真実の炎を僕に見せて」

火照りはじめている彼女の耳に囁く。

「大丈夫。君の炎は僕らをまもるための炎。愛するものを暖め、敵を灰燼とかす守護の炎。決して僕らを傷つけることはない。だから、さあ！」

そう言うや、ツミは赫の恥部に当てていた指を一息に中へと突き入れた。

あ、とアカのからだだが反応する。半開きになった唇から、一つの

言葉が引き出されるように紡がれた。

「紅帝炎舞！」

真紅の火炎が僕らを中心に立ち上る。巨大な蓮花のように燃え上がった紅炎は太陽の如く光を放つ。

眩い光と灼熱の中で、天狗は自分の身体が末端から溶けていくのを感じていた。熱せられたバターのように身体が崩れていく。それは痛みも恐怖も伴わない、緩やかな死だった。

そして、彼の消滅と共に、一つの夢が覚めた。せかい きえた

天狗を倒した後、僕らはまっすぐ家に帰った。

家ではササヤキさんが、ご飯を作りお風呂も沸かして待っていた。だが、疲れていたので、申し訳ないことにそれを辞退し、軽く食事を口にしてから眠りたいと彼女に伝えた。

案内された部屋は四畳半の畳み部屋。真ん中に布団だけが敷かれた他には何もなく、塵一つすらない殺風景な部屋だった。

障子越しに月光が差し込んでいた。

僕の力の源。

やわらかい布団に頭から潜り込み、僕は目を閉じた。  
静かな夜。聞こえるのは、草木が夜風にさざめく音。それと、僕の鼓動。

今日は色んな事があつたな。

身体は疲れていて、石のように重く感じられる。

けれど、頭と心は言いようのない高まりを覚え続けていた。

眠れない。

高ぶり続ける精神を鎮めるために、僕は縁側からそつと夜の散歩に出た。

家を東に、沈み行く月を背にして歩く。

控えめな月光の下、星達は空を埋めつくして輝いている。これまで、街の中でよんだ夜空を見続けた僕にとって、この空は眩しいほどだった。

川に行き着いた。水辺には水芭蕉が真珠のように月光に照らセレストされている。川面もまた、天青石のように燦めいている。

水音が聞こえる。

下流に少し歩くと、そこに赫い髪を背中に垂らした裸身の女性がいた。

アカだ。

腰までを水にひたし、彼女は丹念に身体を洗っている。水に濡れた肌が、蒼く清廉な輝きを放っている。

僕はその姿の美しさに一瞬の間意識を奪われた。そして、我に返ると、すぐにその場を立ち去ろうと思った。

だが、踵を返したその時、僕は下半身の硬直と共に一つの感情を覚えた。

欲しい。

無言のまま彼女の方へと近よる。

がさりと踏んだ草が音を立てた。アカがこちらを向く。

彼女はこちらに背を向け身を隠そうとする。しかし、無駄だ。十分な近さまで距離を詰めていた僕は、一足飛びに彼女に肉薄しその手首を取った。

「放しなさいよ！」

ややうわずった彼女の声が水面を打つ。

彼女は明らかに僕を拒んでいた。だから、僕は『力』を使うことにした。

月光を操る力。光を物質化するという面とは異なる、違う一面。

『魅了』。夜空に浮かぶ月が人目を惹かずには入られないように、僕もまた人の心を惹きつけることができる。

彼女の心の殻をイメージし、頭の中でそれを剥がす。そして、彼女の中にもある僕が持つ欲望と同じ物、肉欲を呼び起こす。

「やめて」 彼女がか細く言った。

「あんたの力はわかったから。これ以上私をかき回さないで。私を、ほっておいて」

それが彼女の精一杯の抵抗。

素直じゃないなあ。

このまま魅了の力だけで彼女をものにするのも良いけれど、僕はそれよりある一つの言葉を使うことにした。

「アカ、約束だよ」

びくりと彼女が震える。そらしていた目を僕に向ける。

「ねえ、どうして？ あれは夢<sup>ゆめ</sup>だったのよ。私は誰にも聞かせてない。あんたにも聞かせてない。なのに、どうして……」

熱っぽく訴える彼女は一層僕の欲望を高める。

だが、僕は極力泰然を装って彼女に囁きかける。

「そう、君は誰にも言えなかった。でも、君は確かに誰かを求めているんだよ」

手首を握るのを止め、細い腰に手を回した。

「アカ、僕は君を助けてあげたよね。だから、次は君の番。僕のお願いを聞いてくれるかな……？」

抗うことを止めた彼女の背中を撫でていく。くびれた腰の上あたりを触った時、う、と彼女が呻いた。

「ここ、どうかしたの？」

「……さっきの炎で、火傷っぽくなったの」

そうか、それで風呂に入らず水浴びをしていたのか。

僕はその部分を更に撫でた。その度に、彼女は反応した。

アカが僕の名を呼んだ。

「……優しくして。……私、処女じゃないけど、男の人としたこと……あまり、ないから……」

男の人と。では、女の人とはあるのか？

確かめてみたかったが、とりあえずそれは放置し、僕は彼女の真紅の唇に自分の唇を重ねた。

月が沈むまで僕らは交わり続けた。

## 1・5「炎の目覚め」（後書き）

二つに分けようかな、と思ったのですが、結局まとめて出しました。

炎使いというと『ファイアスターター』のシャーリーンを思い出します。あれを読んでいた時はかなりシャーリーンに萌えました。「チャーリー」という呼び方はあまり好きじゃないです。

とりあえず第一幕が終わり、間幕 第二幕に移りたいと思います。しかしテストが前にあるので少しペースが落ちると予想されます。見守って下さい。

そう言えば、このレイアウトって見づらいですか？ 感想お待ちしております。

## 間幕 「猫人」

ボクは猫。

名前はまだない

わけではない。

ボクの名前はチヨ。

今はもう猫じゃない。

ボクにはご主人様がいた。

迷子の子猫だったボクを拾って、四年間ずっと一緒にいてくれたご主人様。

月の夜に、琥珀色の瞳に哀しみを湛えていたご主人様。  
今はもうボクの傍にはいない。

闇の中にご主人様は歩いていつてしまった。

いつも、ご主人様が夜の散歩に出る時、ご主人様はここを空ろにして世界のこともボクのことも忘れてしまったみたいに行く。だからこそ、ボクはご主人様の側を離れないようにしていた。本当にご主人様がどこかに行ってしまうないように。ボクはいつもここに  
いるよ、て心で話しかけながら。

でも、実際その時が来ると、ボクは何もできなかった。

ボクは何もできなかった。



絶望したボクの視界を闇の帳とまりが覆った。  
そして、ボクは意識を失った。

\*

目が覚めた時、ボクは身体は人間のものになってしまっていた。  
ご主人様みたいな「人間」の身体。でも、頭の上には猫の耳があり、お尻にしっぽがある。背骨の上にだけ毛皮が残っていた。

けど、それ以外には毛がない。人間の着るような服もなく、無毛の肌を風に当てているのは寒かった。

座っていてもしょうがないので、ボクは新しい二本の足で立ち上がって歩き出すことにした。肉球のない足で土を踏んだ。

小さくなった鼻は余り使えない。それでも、微かな人のおいをかぎつけそちらに向かった。

変な感じ。

人間の身体は心にはなじまないけど、とりあえず動かすことはできる。

そこで、ボクは大変なことに気が付いた。ご主人様の名前が思い出せないのだ。

どうして？ どうして!？

大切だったはずなのに。自分の名前よりも。

大切だったはずなのに。

悩みながらも歩いていたら、ぼろぼろの家を見付けた。家を全方向から見ると、本当にあちこちが壊れていて、萱葺きの屋根はちよつと言葉にしがたいひどさだった。

なんとか、戸がその形を保っている。ボクは、ぎしぎしと鳴る戸を思い切り開いた。

薄闇の向こうに誰か立っている。

闇にうかびあがる鮮やかな赤い袴と白い小袖。余り背は高くない。髪も白かった。

「あなたの名前を教えてください」その人の声は笛の音みたいに高く綺麗だった。

「ボクの名前は チヨ」

「ようこそ、チヨさん。あなたをお待ちしておりました。ここは『あまのやね天戸の宅』、私達の家、そしてあなたのご主人様が住んでいた家」

そしてボクも物語に加わる。

## 間幕 「猫人」(後書き)

幕間劇です。まあ、伏線ですね。

先はまだ長そうです。どんどん書かないとなあって感じます。

チヨの一人称をどうしようか悩みました。あんまり女の子が「僕」と名乗るのは好きじゃありません。「俺」とかも嫌です。小説くらい、女の子は女の子らしく話してほしいものです。

て、この文じゃチヨが女の子かわかりませんね。

では第二幕でお会いしましょう。来週末くらいには掲載します。

## 2・1「隠れていた巫女」

僕が『天戸の宅』<sup>あまこのやね</sup>に来てから十四回太陽が昇った。月は欠けて朔を迎え、いまは三日月を通り越し上弦の手前にある。

季節は夏。日を追うことに少しずつ暑さを増してくる。

僕は二週間の時間を、三人の女性が営む自給自足の生活を学びいずれその一環を担えるようになるために費やした。

ある日はアカと畑に行き農作業。

ある日はキズオトと北東の森へ行き狩の練習。

ある日はササヤキさんと家に残って家事を教わった。

この世界は狭いらしいが、動植物はある。僕らはそれを取って日々の糧とする。(キズオトが言うには、彼らにとって『夢』<sup>まぼろし</sup>は一続きの世界らしい。)

しかし、人間はいない。もし、家の外で人のような物にあつたらそれは敵である。だから僕らは自活する必要があるのだ。

そして、自活以上に『自衛』の技術も学ばなければならない。要するに人殺しの技術、それと心得だ。

僕はこれまでに二人殺めた。

殺したことは、怖くも悲しくもなかった。理由は良くわからない。しかし、推察するに、僕は生きるために彼らを殺したのだから、こわがっても悲しんでも仕方ない、だから何も感じないのだろう。そう思う。

何はともあれ、当面の間は覚えなければならぬことが山積している。

気が付いたら一年くらいはすぐ経っているかもしれない。

\*

今日はササヤキさんと家事練習だ。

家事の練習は朝食をつくるからはじまる。後の二人より早く、僕は日の出ちょうどに起こされる。

竈の火にはア力の火が使われている。そのためどんな天候でも消えることなく熾火の状態を保っているが、使えるように火勢を強くするには手間がかかる。生みの親の影響だろうか？ 心から丁寧に薪をくべ、想いを込めて竹筒で吹いてもいっかな強く燃えようとはしない。

ササヤキさんはうまくやるらしい。

さすがの長姉役だ。

こうして竈をのぞきこんで小さな火のご機嫌を取っていると、ア力が起きてくる。

朝焼けの中、赫い髪を炎のように染めた彼女は、さも満足そうにこちらを見下ろしてくる。ざまあみろ、そんな感じで。

やれやれ。

因みにここで言うておくと、初めてここに来た日の夜以来彼女と肌を合わせることはなかった。特に僕から彼女を求めなかったからだが、彼女の方も僕のことを固く警戒していて、とてもじゃないが下手なことは言える雰囲気でもなかった。

しかし、そんな彼女も僕のことを全く嫌っているわけではないと思う。あくまでも主観的な見解だが。僕がササヤキさんやキズオトと行動していると背後から怪気めいたものを感じるし、そんな日の夕餉ではいつもよりまして機嫌が悪くなる。あくまでも主観的な見解だが、繰り返すけど。

まあ、ゆつくり仲良くなればいい。

僕はア力のことが好きだ。

「じゃあ、ツミ。いつてきまーす」

「ああ、いつてらっしやい、キズオト」

キズオトが元気よく戸口から駆け出て行く。今日も彼女は身体よりずつと大きい唐草模様の袷を着ている。髪も長く、あれで身動きは軽やかなのだから、不思議。

次いでそのそとアカが出て行く。彼女は金糸で刺繍のされた朱い狩衣を着ている。

「アカ、いつてらっしやい」

フンと鼻を鳴らして出て行く彼女。あの姿に、可愛らしさを見いだしてしまう僕はおかしいだろうか。

それはそうと、二人を見送った後は台所のササヤキさんの元に赴き、本日の指示を仰いだ。

「ちよつと待つてね」と彼女。いつも、こうしてみていると思うけれど、彼女は本当に良くできた女性だ。かいがいしく働く彼女の立ち姿は堂に入ったもので、僕は思わずうつとりと見とれてしまう。やがて、彼女から桶・雑巾・ろぼうき・ちり取り、掃除四点セツトを受け取った。今日のはじめの任務は掃除らしい。

「何処をやりますか？」僕は尋ねた。  
すると彼女は奇妙な答えをする。

「あ、あのね、ツミ。私はこれから部屋でアカの服のお裁縫をしなくちゃ行けないの。それでね、あなたにはその間、この家で一番気になること妒をそうして欲しいの」

先日の戦いの後、アカは服を一着焦がして駄目になっていた。確かに新しい物が必要だろう。

しかし……。

「気になるどころ？ 何ですか、それは」

「えっと、例えば、あなたがこの家でまだ入ったことのない場所とか」

「はあ？」

「じゃ、じゃあ、私はこれで」

奇妙な微笑みを顔に貼り付けたまま、ササヤキさんは逃げるように部屋へ入って行ってしまった。

訳がわからない。彼女は僕に何をさせたいのだ？

『天戸の宅』と名の付けられたこの家には様々な人智を越えた物が入り込んでいるから、迂闊に歩き回るな。僕はこの家に来て二日目になんと言われた。

だが、このまま立ちつくしても仕方ない。

僕はとりあえず、居間から北西にある物置部屋に行くことにした。

とりあえず来た物置部屋は、お札の張られた小箱、注連縄しめなわの巻かれた壺、人型の木の板が付いた着物だの、妖気むんむんの物がそここちに陳列されていた。

触らない方がいい、よね。

それは僕の身につけた月の力が教えるのか、それともただ単に一般人としての常識が拒絶するのは判らないが、とにかく僕はわずかに埃を採集してすぐにそこから出た。

しかし、どうしたものやら。

物置部屋を出て正面にも襖障子ふすまがある。この障子の前で、僕の脳裏で声が告げる。

この奥には目の見えない蛭子がいるのよ。

アカが言ったのだ。半信半疑だったけど、明けられたところを見たことのない戸を開くのはとても不気味なものだ。何も悪い予感はないのだが。

むう。

だいたい、ササヤキさんのあの言動は何だったんだ。あれでは、僕にここに入れと言っているようにしか取れないだろう。



えい、ままよ。

思い切って襖障子を横に引く。その軽い手応えは、いつも誰かが開け閉めしていないと存在しえない物だった。

襖障子の向こうには、また襖障子があった。その間の空間は、床・壁・天井・すべて漆塗りにされた異様な空間だった。

しかしここまで来ては、もう退くことはできない。いや、できるとね。

もう一枚の襖障子を開いた。

障子を開いた先の部屋は、昼間だというのに太陽の光が無く、灯火の明かりだけがあつた。

部屋にいたのは蛭子はいなかった。床に横座りになっている、緋袴に白衣、巫女装束の少女だった。

「ようやく、お会いできましたね。ツミさん」

彼女は構える様子無く、自然に僕に話しかけてきた。

「僕を知っているの？」

「ええ、一ヶ月ほど前から」

謎めいた発言。神秘的な微笑を浮かべる彼女。天色の双眸が僕を見上げている。注意深くその目をのぞきこむと、彼女の目はどこか虚ろでまるで僕に焦点が合っていないようで妙だった。

「ツミ殿。お座り下さい」

部屋の奥から声がかかった。部屋の隅、灯火の影に隠れるように、黒い割烹着を身につけた女性が立っていた。

黒い割烹着の女性と巫女装束の少女、並べてみると、とても対照的だった。髪の色は黒と白。声は低と高。

少女に示された座布団に正座する。「楽しんでくださいませ」と言われたので胡座を組んだ。

「まずは自己紹介を致しましょう。私の名前はサキ。光を操り、未来を覗く『先視』の能力を持っています。そして彼女は――」

「私の名はネガイ。サキ様ともども、どうかお見知りおきくださいませ」

「彼女は闇の加護を得ていますの。あまり人には見せませんけど」サキにネガイ。奇妙な名前にも少しなれてきたようだ。

僕は早速彼女にあれこれ聞いてみることにする。

「サキ。どうして君たちは今まで僕に会ってくれなかったの？こんな隠れん坊みたいな事をして。そして、何故今になってササヤキさんに妙なことを言わせて僕をここに来させたの？」

にこりと彼女は微笑する。その視線は、やはり僕の目に合わせられていようで、合っていない。

「ちよつとしたいはずら心、と申しては怒ってしまわれますか？」

「い……いや、別に……」

「ツミさんは優しい方なのですね」

容姿は少女のそれだったが、彼女は僕よりずっと年上なのかも知れない。大人びた彼女の雰囲気、媚態に、僕は調子を狂わされはじめていた。

「ツミさん。それよりも、もっとお互い基本的なことからお話ししませんこと？」

「き、基本的なこと？」

「そう。例えば スリーサイズとか」

ええ、と僕は思わず頓狂な声を出してしまう。すると彼女は鈴が転がるように愛らしく笑った。

「かわいらしいお方ですわ、ツミさんは。とても若い男性らしい、きつとあなたは澄んだ目をされているのですね」

目、と聞いて、僕は『基本的な質問』を一つ思いついた。

何も言わず、唐突に彼女の眼球を突くぐらい近くに人差し指を突きつける。

「君は目が見えていないのかい？」

「ええ。この目はうすばんやりした明暗しか捕らえられませんの」  
そう言つて、彼女は突きだした僕の手を握った。

「でも、周りの風の動きや気配でだいたいわかるものですよ。あなたが私にこうして手を伸ばしたこと。あなたが膝から手を放した瞬間からわかっていましたの」

白くやわらかな彼女の手は、僕の手を綿のようにいとおしげに包み込んだ。

手先から伝わる心地よさに動揺しながら質問する「サ、サキの歳を聞いても良いかな？」

ふふ、と彼女は笑う。

「だいたい八十五くらいです」

「八十五　？」　からかわれているのか？

しかし、彼女を見ている限りそう言うわけでもなさそうだ。わざとらしく表情を改めたりもしない、微笑のまま話<sup>まほろし</sup>し続ける。

「ツミさん、一つ教えて差し上げます。この夢<sup>まぼろし</sup>の中で、人は歳をとりますんの。この家に住む人は皆、外からやってきた歳のまま時を経ています」

「外から来た？　もしかして、キズオトみたいな小さい子も？」

「ええ、そのとおりですわ。キズオトちゃんは、数えて六十くらいでしょうか？」

あんな子供が六十歳。どうなっているんだ、ここは。

「一番若いのは、ついこの間来たツミさんが十六くらいだとして、次に来るのはアカ、彼女は二十七歳ですね」

へえ、アカが二番目なんだな。

そこで僕は少し思考に引きずられ、意識を奪われた。すると、その虚を突くようにサキが握り続けていた僕の手を引き、僕は前のめの姿勢になる。

目の前に、サキの唇があつた。

口内に下を入れる深い接吻。それも性的な欲望を顕わにした、むさぼるような口づけだった。

「何を！」

「ご機嫌を損ねてしまいましたか？」

全く悪びれる様子がなかった。それどころか、ずいと身を寄せ、白い小袖をはだけはじめた。

「七十六・五十六・七十九です。ツミさん」

「え　？」混乱して彼女の言っていることをとっさに判断できない。  
わたくし

「私ここに来る前の記憶がないのです。ここでは女性しか居ませんから、男の方を見るのは初めてなんです。ですから、あなたに全く興味がありますの。あなたは違うのですか？ 私のこと、嫌いですか？」

「ちよ、ちよつと待つて　！」

後ずさつて襖障子の近くまで来る。背中が付くと予想し身構えるが、バンと襖は何者かに開かれ、僕はバランスを崩して後ろ向きに転んだ。

仰向けになり上方を見上げる視界には、アカの姿があつた。

彼女は全身に怒りの炎を纏わせていた。

これはまだ比喩の段階であつただけ。

僕は人生の末期を覚悟した。

## 2・1「隠れていた巫女」（後書き）

予定より早く投稿できました。ちゃんと勉強もしてますよ。

間幕に引き続き、サキの登場です。第二幕はサキとネガイが主題になっています。なかなかサキの神秘さをアピールするのが難しいです。

『蛭子』は本当は位の高い神様です。ちょっとした妖怪扱いしていますが。

## 2・2「愛欲と依頼」

その夜、囲炉裏を囲んで僕はサキとネガイさんに関する詳しい説明をしてもらった。その話はただ単に彼女らの役割だけに留まらず、僕がここに来る前の彼女らの歴史にも及ぶものだった。

かいつまんで述べる。

まず一つ、サキは先視の能力を使い、敵の襲来の時期と位置を見ずることを専らとしてしていること。彼女は決して前線には立たない。ネガイさんはそんなサキのそばに始終いるので、彼女もまた表だつて敵を迎撃することはない。

二つ、彼女らは独自の制約に則り滅多に部屋から出てこない。食事はササヤキさんが作つて部屋に運ぶ。衣類の洗濯は彼女らの居住域にある専用の洗い場でやる。身体は真夜中に裏口から川に出て行つて浄める。厠も専用のを持っていろいろらしい。

この仕組みはキズオトの後に来たササヤキさんが決めさせられたらしい。この仕組みのために、天戸あまのやねの宅の中には二つの居住域が存在することになった。

「要するに引きこもりよ！」

アカは大層このことが気に入らないようだった。ササヤキさんが話をしている間、珊瑚色の双眸からはパチパチと火花が飛び散り続けた。

でも、僕もアカに賛成だ。

これでは、何故同じ家に住んでいるのかわからない。

そう皆の前で発言すると、各々の返答が得られた。

「そうよねえ。昔は私もそう言つて気がするわ。でもね、これが彼女たちのお願いだつたから……。私は何も言わないことにしたの」

「サキは、先視の能力は繊細だから、それにお日様の光が苦手だ

から、て言つてた。 あたしは、仕方ないと思うな。サキの先視は本当に正確だし、狂つたらあたし達この世界を守れないもん」

「 アカは？」

妥協の旨を各々の言葉で言つた二人に対し、アカは眉間に深くしわを寄せたまま何も言わない。

そこで、彼女に先んじて僕は自分の意見を言うことにした。

「僕は今の状況に納得できない。サキとネガイさんも、みんなと行動を共にすべきだよ。部屋にこもらせてないで。 そう、君も思ふんだよね？ アカ」

同意という形で彼女の言葉を促す。だが、アカはこれを鼻先で笑い飛ばした。

「私は別に何も思わない。 あんな土竜娘<sup>もぐら</sup>、出てこなくてむしろせいせいよ」

それに、と追い打ち「そもそも、私があんたと同じ事を思つわけ無いじゃない。 ツミ、あんたは、同じ家に住んでいるからあの子が気になるんじゃないくて、あの子の色香に惚れたから一緒に生活したいんじゃない？」

「アカ、何を言つて 「酷いこと言わないで、アカ！」

「あまのじゃく  
天邪鬼」

キズオトの一言。



アカの顔が見る間に朱に染まっていった。  
そして彼女は無言のまま、足音だけ踏みならして床に就いてしまった。

＊＊

次の日は何事もなく過ぎた。

今日は畑仕事の日だった。いつも以上に言葉のないアカの後ろについて畑に行き、水をやり草を抜いて回った。

眩しい太陽の下で思う。

今、サキとネガイさんは何をしているのだろう。

その夜は上弦の半月だった。

夜ごとに満ちていく月を見て思う。月の満ちと共に、自分の中で何かが高まっていく、と。

力と、欲望。

思案に耽りながら部屋に入ろうとしていると、誰かに横から呼びかけられた。

暗がりの中、背の高さからササヤキさんかなと思いきや、それはネガイさんだった。

闇の中に、低い彼女の声がしつとりと響く

「サキ様がお呼びです。どうかお越しくださいませ」

再び訪れたサキの部屋。昨日と違うところが一つあった。

窓が開いている。

小さな木の窓が開かれ、そこから半分の月が見えている。そして、サキがその月を見ている。

「よくお訪ねくださいましたね。ありがとうございます、ツミさん」

小鳥のような声が、可愛らしく科しなをつくって感謝の意を告げる。僕は促されるままにサキの前の座布団に座る。

何を言うべきか判じかねたので、黙したまま彼女の言葉を待った。

「昨日の続きをしませんか？」

至極何気ない口調だった。しかし、その中に含まれる意味は単純なものではない。

「いや、でも、僕がサキと、その……するのって……」

「私が先視の能を持つことは」 しどろもどろの僕の言を遮って彼女は話す 「昨日お話ししましたね」

「う、うん……」

「先視は、目の見える方が物を見るのとは違います。私は常に自然と未来を視ているわけではないのです。精神こころにある状態にするこ

とで、はじめて未来を垣間見ることができるのです」

「ある状態？」

この時、はじめて部屋に甘いにおいの香が焚かれていることに気が付いた。蠱惑的なにおい。これが、麝香なのか？

下半身の男性の部分が疼きはじめるのを感じた。

「そう、恍惚。過度の快樂による、忘我。言っている意味がわかりますね？」

わかる。凄くわかる。

でも、僕はそれを拒みたかった。多少の性欲はあろうと、僕は獣けだものではない。

しかし、窓の外の半月が、強引にでも僕の欲望をさらけだそうと

していた。否応なく、僕に突きつけている。

服を脱ぎ、彼女は全身の肌を露わにした。灯火が消えたが、蒼い月光がサキの裸体を明らかに、なまめかしく照らし出していた。

「いつもはネガイが相手をしてくれますが、今夜はあなたがいます。<sup>わたくし</sup>私はあなたのカラダが欲しい。あなたはどうですか？」

「僕は」「僕はまだ躊躇<sup>みさお</sup>っていた。

「もしかして、アカに操<sup>みさお</sup>を立てていらつしやるのですか？」  
そう言いながら、彼女の唇は既に僕の胸板の上にあった。

アカは怒るだろうな。

彼女の誘惑と自分の肉欲に白旗を挙げ、僕はサキの望みのままにすることにした。

彼女を身体の上に乗せたまま、禪を解く。そこであることに気が付いた。

「ネガイさんが見ているね」

ふふ、と触れあった身体を伝う笑い声。

「あなたがお許しくださるのなら、三人で楽しみましょう？」

「  
お手柔らかにね」

月光はまだこの部屋にあった。

一時間ほど戯れていたはずなのに、狭い窓口から月の姿が消えない。  
い。

「あなたをお招きするための、ちょっとした呪<sup>まじな</sup>いですわ。光の流れを屈折させて、月の光が常にあの窓にはいるようにしているの

す」

身を月明かりの下に横たえながらサキが答える。

上気して早く浮き沈みする彼女の胸。小振りで、山と言うよりは丘を思わせるそこに白っぽい物がこびりついている。身体を休ませながら、時折その白い液体を指ですくって口に運ぶ仕草は、いまだおさまりきらない肉欲を刺激する。

「これから、少し大切なことをお話します」ふいに醒めた声でサキが言った。

「次の満月が昇る時、異なる夢への扉まほろしが開きます。場所はここより南、迦具土の莫に入ってすぐの地点。ツミさんには、ネガイと一緒に扉を越えてもらいます」

え、でもそんなことしたら……。

「問題ありません。ツミさんは、すべての世界に不変に存在する月の化身ツミかわりミまほろし。夢を越えても変質することはありません」

チキ、と背後で音がした。振り返ると、闇から浮かび上がるようにネガイさんが立っていた。

彼女は僕の前に座り、これを、と一振りの打刀を取り出した。

「天乃常立あめのとこたちと言います。これからはあなたの物です。けれども、次の戦いの時まで抜かないでください」

手に取った刀はずしりと重い。異様な気配はないが、手にしていると何となくその見えない井戸をのぞきこんでいるような気分がした。

強力な封印がかけられているんだ。

「ツミさんは、戦うことは好きですか？」

純粹な質問だった。僕を見る虚ろな瞳には、答えに対する希望も期待もない。

だから、思うままに答える。

「みんなをまもるためなら、戦うことを厭うことはない。でも、それは決して戦うことが好きだという事とは違う。誰も傷つかないのが一番だよ」

すると、彼女はちよつとだけ嫉妬したような表情を見せた。

「あなたはアカと同じことを仰いますのね。でも、今夜は私と一緒にいてくださいまし」

そして、彼女は頬が触れあうほどに顔を寄せてくる。

「あなたは、性交することは好きですか？」

「好きだね」

闇の中で笑う声。

「御存知ですか？ 男女を陰と陽のどちらかに分けるとしたら、陰は女性で、陽は男性なのですよ。でも私は光の使い手。常に光を、陽の気を求めています。ですから、あなたとこうしていることは、本当に私にとって至福なのです」

## 2・2「愛欲と依頼」（後書き）

「つみき談話」の時から使っていた下書き用大学ノートを使い切りました。大学ノートって意外とページ数無いんだなあと思いました。

第二幕は全四話で行きます。あと二話ですね。2008/2/20  
くらいには2・3ができると思います。

## 2・3「天乃常立」

世の中には、怒ると二・三日その対象を無視し続ける人がいる。アカは、しかしその様な人間ではなかった。僕がサキの部屋で夜を過ごした日の後、僕に対するアカの態度は常に殺気を帯びたものとなり、事あるごとに言葉汚く罵られるようになった。

昨日は畑の用水路に蹴り落とされたりもした。事故を装って。

多分、彼女に謝るべきなのだろう。

サキとアカに二股かけるようなことになってしまった事を、開き直るつもりはない。身につけた月の力のおかげで、時折来る反動的な肉欲を言い訳にする気もない。

けれど、今は駄目だ。いまアカに謝っても、彼女に笑い飛ばされるのが落ちだ。

だから、僕は機を見ることにした

例えば次の満月の夜なんてどうだろう。

＊

そんなこんなで月は満ち、円かな形となって昇る夜がやってきた。僕とアカ、ネガイさんの三人は今天戸あまのやねの宅から真南に一時間ほど歩いたある地点に來ている。そこは、やや乾きめの土に礫いしが散らばる緑無き場所。『迦具土かぐつちの莫』と呼ばれるこの荒原は、要するに狭い世界にある超局所的な砂漠だ。天戸あまのやねの宅の周りには色々不可思議な場所がある。

夕刻、三人の影は乾いた大地に長く伸びる。僕らは立ちつくし、待っている。こことは違う『夢まぼろし』へ通じる扉が開く時を。

待つ時間はそんなに長くなかった。やがて日が沈みきると、残光の空の一点が歪み、異形の者達が現れ始めた。

数はおよそ二十。僕が初めて戦った世界もそうだったが、どうしてあんなに数が多いのだろう。僕らは六人しかないというのに。

「アカ、君をひと」 「心配無用」

彼女の身を案じて掛けようとした言葉は、彼女自身によって打ち切られた。赫い髪をなびかせながら、僕には目もくれず敵軍に向かって歩き出す。

「ネガイさん、本当に大丈夫なんですか？」

僕らは今夜、サキが立てた作戦に沿って動いている。僕がいなかった今までもそうしてきたらしいが。

作戦とはこうだ。

まほうし

・夢同士の侵略は、される側する側に分けられて、普通変えられない。  
あめのこゝろたち 天乃常立 を使ってその流れを変える。

・あり得ないはずのこちらの侵入によって、敵方の統制は大きく乱される。侵略の勢いは弱まるのでアカ一人で食い止め、僕とネガイさんは勢いのままに向こうの世界を滅ぼす。

まあ、言ってしまえばこれだけの簡単な作戦である。それだけに僕は不安。

「それは杞憂です、ツミ殿。サキ様の作戦は破られることはありません」

揺るぎないネガイさんの横顔。それを見上げて、僕は一つ大切なことを思い出した。

この人も、心配している人がいるんだ。

だから、僕もできることをしよう。そう思って口をつぐみ、東の空を見た。



朱い山の端から、金色の月が顔を覗かせている。

それを確認し、僕は己の中にある力を解放した。

「月よ、我が力よ！ 夜の王たる力、我が手にある古き刃を従える力となれ！」

あめのこたち  
天乃常立。それは神話に置いて天と地がつくられる前に生まれ、姿を隠した神の名。神話など、うつつ現においては寝物語にもならないほど価値のないものだが、まぼろしここ夢にあつては力になる。

七日前にこの刀を渡された時には、既に一部の封印が解除されていた。鞘に施された封印をすり抜け力が滲み出してくる。生半可な心構えでこの刀を抜いてはいけないのだと、僕は感じ続けていた。

故に、月の力を持ってこの刀を抑えつける。

そして、柄に右手をかけ一息に引き抜く。

瑠璃色の空にかざした刃、その色は純白。一点のくもりのない刃を微かに霧が包んでいる。

とりあえず暴れる様子のない刀を念頭に留め置きながら、僕はア力の方を見た。

彼女は炎の海に立つ。

出会ってからこれまでの間に、彼女は間違えるほどに強くなった。炎への恐怖を克服しつつある彼女は、かつてより比較にならないほど大きな炎を操るようになり、それはまるで真紅の花園をつくる如しだった。そんな彼女の姿を、僕は美しいと言っほかに言葉を知らない。

「ア力殿。そろそろ道を開けてください」

ネガイさんの声は決して張り上げられたものではない。しかし、その声は爆ぜる日の音を無視して低く彼女の耳に届く。

、  
赫い花園が渦巻きはじめる。やがてそれは巨大な一つの蕾となり

、  
「レンカコウジン蓮花紅陣！」

花開く瞬間は刹那。

ア力を中心にして灼熱の爆風が広がり敵を蹴散らす。

僕はときの声を上げ空の歪み、僕らの夢を脅かす夢へ通じる、扉へと向かって走り出した。

「開け時空の扉。神の名を持つ刃を持って、我らは侵攻する！」  
一閃。

切り裂くのは空。

重ねられた写真が破かれて覗くように姿を現した見知らぬ景色に、僕は躊躇わずに身を投じた。

＊

降り立ったのは岩ばかり転がる荒れ地の中。瑠璃色の空、半分の月、頭上の眺めは何処も変わらないのだが。

十メートルほど離れたところに今通ったばかりの、扉、があった。それを囲むようにして何十人もの、人間、が密集して立っている。彼らは順々に扉へ入ろうとしているらしい。多くは扉を仰ぎ見てこちらに気付いた様子がないが、間もなくしてちらほらとこちらに視線が集まりはじめる。

そして異口同音に叫ぶ。

「あいつらは誰だ？」

「あいつら扉から出てきたよな？」 「あの扉は私達が入るためのものじゃないの？」 「扉が壊れたのか？」 「否、扉は同胞を送り続けている」 「化け物でもない……」 「もしかして、我々の新たな仲間ではないのか」 「ばかな、二人同時に来ることなんてあるはずがないじゃろう！」

どよめきも僕の知っている通り‘人間くさい’。戸惑う彼らは僕らを敵として認識しきれないようだ。しかし、僕は静かに刀を彼らに向かって構える。

ねえ、サキ。向こうの夢の人達と戦うのは止められないの？ 無理ですわ。残念なことでしょうけど。接触した夢は、長時間そのままだと二つもろとも壊れてしまいますの。

悲しいことだと思った。しかし、僕は最後には、戦うことを、彼らを一人残さず滅亡させることを選んだ。何故なら、僕が死にたくないからであり、みんなをまもりたいからだ。そう思う上で、悲しむことが何より罪深いと思う。

だから、僕は迷いを込めず彼らに宣戦する。

「僕の名前はツミといいます。彼女の名前はネガイです。僕らは違う夢から、あなたが今侵している夢から来ました。ですから皆さん、僕と戦ってください。お互いの世界をまもるために。僕とあなた達は、……敵同士です！」

彼らの顔に走る驚愕の色。やがてそれは憎悪となる。剣や斧を持った戦士達が押し寄せてくる。

「ネガイさん、僕の後ろに」

刀を振りかぶり、虚空に向かって振り下ろす。この動作から生まれるのは、衝撃。白い波が物理的なエネルギーとなり、閃光と轟音を伴って押し寄せる人の波とぶつかる。

爆砕。

まるで紙吹雪のようだ。‘人間’が、四肢を裂かれながら軽々と吹き散らされていく。

悲鳴が上がる。それは白い波が消えてから、思い出したかのように叫ばれる。しかも、それは断末魔ではなく、巻き込まれなかった無傷の者達が上げる恐怖と嘆きの叫びだった。

「化け物、化け物　　！」

まさに蜘蛛の子を散らすように人々は逃げていく。

「逃がさないください」耳元で、ネガイさんが低く囁いた。

「うん、わかってる」

僕は天乃常立あめのとこたちを天にかざし叫んだ。

「月よ！　愚かなる敗走者どもに狂気と蛮勇を与えよ。宴を開かん！　者共、此处へ集え！」

逃げる足音が止み、こちらへ向かう足音になる。

まずは左前に三人。

「　せい！」　放った白い衝撃が三人を挽肉にかえる。

次に右、そして左、今度は後ろ、　　上！

次々と身体を回して敵を迎え撃つ。僕の望んだとおり狂気の光を瞳に宿した者達は、脆く枯れ葉のように散っていく。

と、敵との間に遮る影がある。

「ネガイさん！」

「失礼しました……」

彼女の姿は速やかに月陰に溶けて無くなる。しかし、その時には敵は間近に迫っており、僕が振った刀は直に彼らの身体に食い込むしまった、と思った時には力が炸裂していた。その人間は影も残さず塵となる。

「……なんて事を！」

自責、だが心を乱したこの瞬間に新たな事態が僕を襲う。

月の光、夜の闇を退けて天乃常立あめのとこたちが眼も眩む光を放射しはじめる。力が堰を切ったように迸りはじめた。

「天乃常立あめのとこたち、我が元に屈せよ。何時は我が手にある。鎮まれ

！」

僕を中心に、刀から放射される波動で、岩や土や空、すべてが掻き消えていく。

消しゴムに白くされていくような空間の中で、僕は慌てて刀を鞘に収めようと試みる。

だが、入らない。

「くそ、従え、天乃常立あめのとこたち！」

頭上から月の姿が消えた。この目に映るのは、純白の空、純白の大地、純白の………絶望。

「あなたの『願い』は何ですか？」

耳ではなく、心に直接問いかけの言の葉が届いた。

「僕の願いは、アカやサキ、キズオトにササヤキさん、それにネガイさん、みんなをまもることです！」

「あなたの命は如何にしますか？」  
死を覚悟しているのか、という問い。

「みんなをまもるために、必要なら死んでもいい。でも、そう簡単には死ねない。今は、帰ってやらなきゃいけないことがあるんだ！」

すべてが消滅していく白い景色の中で、黒い闇を従えたネガイさんの姿を僕は見いだした。彼女はゆつくりと、よどみない歩みでこちらに来る。

「九（吸）式封印術。猛き力、深く暗い闇に落ちよ」

白い刀身が闇に飲み込まれていき、暴走していた天乃常立あめのとこたちの波動は鎮められていく。

真っ白だった風景が徐々に黒い闇に塗り替えられ、僕はその中に落ちていった。

遠のいていた意識が、次第に現実へ引き戻されていく。僕は一切の光のない闇の中に浮かんでいる。目に見えない右手の中に、鞘に入った天乃常立がある。  
あめのとこたち

「ネガイさん？ そこにいますか？ 僕ら、帰らないと」

問いかけは虚空に消える。答えは心に響く。

「ツミ殿。それが願いならば、ご自身の力で成就なされませ。私は闇、私は影。私はあなたを守護することはできても、あなたを先導することはできません」

僕の力。

静かに、胸の中にイメージを紡ぎ出す。

「月よ、此处に。円かな月、闇に輝け」

銀色の望月、夜空に浮かぶ鏡のような月に、愛しいアカの姿が映ることをイメージする。

そう、彼女の元へ。

彼女が、待っていてくれている。

## 2・3「天乃常立」（後書き）

補足。

『天之常立神』は別天神と<sup>ことあまつがみ</sup>呼ばれる特殊な神様です。イザナギ・イザナミよりも早く生まれ、天地創造にかかわらずに姿を隠した神。この名を使ったのにはちゃんと意味があります。後の展開で明らかにしたいです。

このほか、天戸の宅の周りの地名にはそれぞれ神様の名前の一部を使っています。

例えば今回出てきた『迦具土の莫』。知っている方もいらっしゃるかも知れませんが、イザナミの命と引き替えに生まれた火の神様です。樹なつみの漫画『八雲立つ』とか、『舞・HiME』とかに出ていますよね。

それと、ちよくちよく話に出てくる、家の東に流れる『八衢<sup>やちまた</sup>の川』。ヤチマタヒコとは、岐<sup>ちまた</sup>の神様。サルタヒコと同じ神でもある、らしいです。

まあ、受け売りですよ。



## 2・4「家族の形」

元の夢へ帰った時、満月はまだ南中していなかった。しかし、出て行った時よりは十分時間が経った。今は、多分十時くらいだろう。帰った地点は、出て行った地点と同じようだった。足下の大地には見慣れて礫が転がっている。

そして、すぐ近くにアカが立っていた。こちらを見ていた。

「ただいま」

「ふん、遅いわよ」

にこやかに話しかけると、彼女は無感動に素っ気なく返事した。

「キズオトが、早く帰って来い、てしきりに行ってきて、うるさかったわ。さつさと帰って練るわよ」

ここにキズオトの姿はない。風を操る彼女の能力で、声だけをアカに送り続けていたのだろう。

だが、僕はキズオトを更に待たせてしまう申し出をアカにする。

「アカ、少し君と二人だけで話をしたいんだけど、いいかな？」

途端にいぶかしげな表情になる彼女。

「何？ ネガイが居ると話せないわけ？ どうせ、この夢に<sup>まぼろし</sup>いる限りキズオトが聞き耳立てているわよ」

うん、と僕は肯んずる。

「まあ、色々言いたいことはあるうけど、とにかく僕は、形だけでも君と二人だけで話をしたいんだ。      ネガイさん、そう言う訳なのでサキに帰っていてください。すぐ帰りますから」

ネガイさんは無言で首を縦に振り、闇に姿をくらました。遁行だろうか。

「で、話って何よ」

珊瑚色の双眸が、陰のある光を宿して僕を見ている。  
だけど、僕はひるまず、ゆっくりと話す。

「アカに、ある物を壊して欲しいんだ」

「ある物？」

「そう。居間とサキさんの部屋とを仕切っている壁を壊して欲しい」

「はあ？ と彼女は顔を嗤いと疑問の入り交じった表情に変える。

「家を壊せっていうの？ あんた、頭がどうかしたんじゃないの？」

「大丈夫、僕の頭は正常だ。それで、壊すのは今帰ったらすぐに壊して欲しいんだ」

「嫌だって言ったら？」

交渉される側の優位を意識した発言。だが、僕も真っ向から交渉しているわけではない。

話を、変える。

「アカは、サキのことが本当に嫌いなのか？」

わずかな空白があった。

それから、彼女は強情に口元を歪ませて言った。

「ええ、嫌いよ。あんなもぐら娘」

「嘘だね」

僕は断言する。たじろぐ彼女に、僕は更に言う。

「素直になり名よ、アカ。君は決して誰かを嫌いになれる人じゃない。本当は、君はサキと分け隔て無く接したいと思っっているんだろう?。」

「知ったふうに言わないで!。」

烈火の如く彼女はまくし立てる。

「私とあの子との関係は、かれこれ十年、はじめ合った時から変わらないのよ。いまさら、何が変わるといふのよ」

そして、一息。今度は一転して声の温度を下げて言う。

「あんたは誰のためにそれを言っているのよ。私のため? 笑わせないでよ。そんなにあの子が気になるのなら、あの子の部屋にあなたも一緒になって引きこもればいいじゃない」

「ごめん」

腰を曲げ、背中を傾ける。頭頂を彼女の眼前に曝し、僕は謝罪の意を身体で示す。

「僕は君を裏切ってしまった。君を傷つけてしまった。サキと一夜を過ごしたこと、理由がない訳じゃないけど、僕は君に何も言い訳をしない。僕はただ君に謝りたい。そして許しを乞い、その上で頼みを聞いて欲しいんだ」

ひたすら図々しい話だと、僕は自己分析した。頭を下げたまま、僕は彼女の声を待った。

「別に、私は傷ついちゃいないわよ。あんたのことなんて、何とも思っていない。あんたが何しようとか、私には何の関係もないんだから。……いつまで頭下げてんのよ」

「君が許してくれるまで」

しばし時が硬直したまま流れた。

月下の荒野に吹く風が僕らの間を走り去っていく。

そして、ぼつりと呟くようにア力が言う。

「私はサキのことが嫌い。あの子を好きなあんたも嫌い。でも……、あんた達は私のこと、どう思ってるの？」

弱々しい、風に吹かれて飛んでいきそうな弱気な問いかけだった。でも、答えを必要不可欠としている。僕は頭を下げ続けたまま、もてる限りの誠実を込めて答えた。

「サキは君のことを好いているよ。君に嫌われていることを知って、少なからずことを痛めていても、ね」

「……あんたは？」焦れたように彼女は問う。

「僕はアカのことが好きだよ。これまで、生まれてきてから出会ったすべての人の中で、一番、アカが好きだ」

「噓！」

彼女があらん限りの声で放った言葉は、静かな荒原に木霊するくらい、想いの込められた物だった。

僕は彼女の糾弾を前にしても何も言わなかった。

「ねえ、どうして頭を下げたままなのよ。目を見なくちゃ放せないでしょ。まず、顔を見せなさい。さもなければ許さないわ」

顔を上げると、すぐそこに赫い双眸があつた。心の奥底まで射抜くような強いまなざしが、僕に向けられていた。

「……あんたは、私のことどう思っているの？」彼女が再度問う。

「僕は君のことが世界で一番好きだ。君が僕を嫌っていたとしても、憎んでいたとさえしても、この気持ちは変わらない。僕は愛し

「君のために生きていく」

じつと、彼女と見つめ合った。

俄に彼女は足を踏み出した。その方向は僕らの家だ。

「ア力……」

赫い後ろ髪をなびかせる背中に追いつき呼びかける。

「あんたの頼みはわかったわよ。やってあげる、ぶち抜いてくれるわあんな壁」

そして、しばらく歩いてから、不意に彼女は振り返る。

「私のことが好きなら、サキとはもう二度と寝ないで。それが約束できるのなら、あんたのこと、許してあげてもいいわよ」

「うん、約束するよ」

でも、実際難しいかも。

そんな僕の胸中を見抜いたように、彼女は付け加えて言った。

「言っておくけど、サキは盲目の淫魔よ。俄色狂いのあんたが果たして堪えきれぬのかしらね」

「ア力……、その言い方はあんまりだよ。………君って口が悪い……」

て、こんな事言ったら不味いだろ。

しかし、彼女はふんと鼻を鳴らしただけで、何も言わずまた歩き出した。

「明日の夜、十六夜じゅうろくやが昇あったら……私の部屋へやに来て……もいいわよ」

＊

家に帰るとまずキズオトが、長い時間おあずけされていた犬のよ  
うに飛びついてきて、その後ろから優しい声で「おかえりなさい」  
とササヤキさんが出迎えてくれた。

居間にはいると、夕食のための膳は既に用意されていて、あとは  
囲炉裏に掛けられた肉じゃがとみそ汁を待つだけの状態だった。

アカが両手に火を灯して件の壁の前に立った。僕は約束の履行の  
時が来たことを悟り、床に並んだ四つの膳と肉じゃがの鍋を安全な  
場所まで移動させ、自分もアカからそこそに離れた場所に立った。  
キズオトはやはり僕らの話を聞いていたのか、そそくさと台所まで  
避難。ササヤキさんが独り、何事かと立ちつくしているの、手招  
きして僕の近くに来てもらっつ。

「レンカコウジン  
恋花紅塵！」

操作された局部的な爆発が、破片を飛び散らさずに壁に大きな穴  
を開けた。衝撃と爆音はそれなりの物だったけど。

「アカ！　なんて事を　」　「待って下さいササヤキさん

！」

予告無しの事態にササヤキさんがヒステリックに怒鳴り出そうとする。僕は彼女の手を取り声を掛けそれを制した。

「どういう事なの！？ ツミ。ちゃんと説明して頂戴」

いつも穏やかなササヤキさんが怒りのあまり顔色を変えてしまっている。慣れない状況に思わず気を動転させてしまい、僕は口を無為に開閉してみた。

「落ち着いて下さい、ササヤキさん」

サキの声だった。彼女の一声で、僕がなだめそこなったササヤキさんが肩から力を抜いた。

すらりと居間の襖が開かれ、そこから飄々とした面持ちの彼女が現れた。彼女は膳を手にし、後ろに控えるネガイさんも同じく膳を手を持っている。

「ごめんなさいね、皆さん。私<sup>わたくし</sup>、このことが起こることを先視していました」

本当ですか。

本当に声が出なくなつた。身じろぎをすることも忘れてしまった。立ちつくす僕の眼前で、落ち着いた態度のサキとネガイさんが当然のように囲炉裏の周りに自分たちの膳を配置しはじめる。

しばしして、アカのことを思い出した。はつとして振り返った時には、アカは爆発する直前だった。

「サキ！ やっぱりあんたのこと嫌いだわ！ これまで頑なにみんなで暮らすことを拒み続けてきたくせに、今の私がやること阻みもしないで……。ふざけるんじゃないわよ！ 何考えているのか、言ってみなさいよ！」

「ア、アカ、落ち着いて……」

「そうですね。疲れている時に機を乱すのはよくありませんよ」  
すつとサキが僕の横に現れた。彼女は僕の腕に自分の身体を巻き付けてからアカに話しかける。

「だって、他ならぬツミさんの望みですもの。聞かないわけにはいかないでしょう？」

「当たり前みたいに言うんじゃないわよ！ その手を放しなさい！」

「あら、何故ですか？」彼女はとぼけた口調で言う。「アカはツミさんのことを好いていらっしゃるのですか？」

「そんなこと、あた」  
言いかけて、止める。本当にアカは素直じゃない。

僕はサキの腕から自分で抜け出した。アカのために。

「ツミさん」

「ごめんね、サキ。僕はアカの物だから、そう決めたから。たとえば、アカが僕のことを好きじゃなくても、ね」

顔を真っ赤に染めるアカ。対してサキは、可愛らしく頬を膨らました。

「まあ、うらやましいこと。でも、負けませんわよ。ねえ、

ツミさん。一週間に一度は私の部屋に来て下さいますよね？」

な、何を言っているんだ彼女は。

「あら……、では、二週間に一度ですね」

「サキ、黙りなさい！ 焼くわよ！」

ガンガン、と固い物を叩く音がした。僕らのささやかな痴話げんかに痺れを切らし、ササヤキさんがおたまと鍋ぶたを打ち鳴らしはじめたのだ。

「ほら、もういいでしょ？ いい加減ご飯にするわよ。それとも、三人とも入らないのかしら？」

「僕は要りますよ！」 「わ、私もよ」



「では、ツミさんは私の物と言うことで」「ふざけるんじゃないわよ！」

「ツミ、一緒に食べよ」

肉じゃがは馬鈴薯じゃがいもの豊かな味が良く生かされていてとてもおいしかった。ご飯も、みそ汁も、蕪の漬け物も、みんなおいしい。

囲炉裏を囲んで、みんなと夕食を共にする。ネガイさんとササヤキさんが今後の料理当番について話し合っている。囲炉裏の向こう側で、アカとサキが賑やかに公論を交わしている。となりでは、キズオトが澆刺とした口調で、これまで待ちぼうけを食わされていたことについて話している。

これが食卓というものだ、これが団欒だんらんというものだ。僕はそう思った。

＊＊

満月の光は、夜なのに昼だと錯覚させるほどに眩しい。しかし、そこには慎ましさが欠かさず存在し、あまりの美しさに僕は溜息をつく。心は昂ぶりなかなか眠りの世界に入ろうとしない。

そして、性的欲求。

戦うために力があるのは望みの通りなのだが、その力のために月の出の度に悶々とさせられるのも厄介な物だ。

くつきりと明かり障子を通して畳みに影を落とす月光を避け、部屋の隅に布団ごと移動する。

僕の部屋もはじめの頃より物は増えた。主に物置から発掘された書物を並べてある本棚など、生の木の気配が近寄る者に不思議な安心感を与えてくれる。

頭から布団をかぶる。その中で、僕は帰り際にア力が言ったことを思い出した。

『十六夜の夜に部屋に来てもいいわよ』

焦らしているんだろうか。

そんな彼女の思惑を想像し、あまりのいじらしさに独り身悶えした。

と、明かり障子の開かれる音がする。

サキだろうか？　すると、かなりまずい。

誰にしても、もう今夜は誰とも顔を合わせたくない気分だったので、狸寝入りしてみる。すると、思い切り蹴飛ばされた。

「うお　！　ア力だね。こんなことするの」

闇の中で赫い瞳を爛と輝かせ、彼女は僕を見下ろしていた。その視線は殺気めいて鋭いが、僕にはわかる、それが彼女の強がりだということが。

僕は何も言わず彼女の言葉を待った。すると、思った通り彼女は痺れを切らして口を開いた。

「何か言いなさいよ」

「じゃあ　綺麗な満月だね、ア力」

ついと彼女が顔を背ける。

「だって……………明日がちゃんと晴れて、十六夜が見えるとは限

らないじゃない……」

本当に、彼女は可愛い。

手を引いて、僕は彼女を抱き寄せた。

- - - - -

現<sup>うつ</sup>、と今では僕も呼ぶあの世界にいた時、僕は毎日が空ろだと思  
っていた。

夢<sup>まぼろし</sup>、と僕も呼子の世界で、僕は日々命をかけて生きる理由と大好  
きな女性を見付けた。

僕はもうあの世界には戻らないだろう。

ここが、僕の生きる世界だ。

## 2・4「家族の形」（後書き）

ツンデレは難しい、という以前に女心は難しい。アカの気持ちをちゃんと文章にしてあげられたのか自信がありません。

ところで、今日はこの物語の裏設定を。

この物語の主な登場人物は七人と決めてあります。これを 七宝になぞらえてみたのです。これから、七宝に対応した力をみんなが身につけていく……という展開をしたかったのですが、それは無理そうなので。

アカ：金    サキ：水晶

あとの五人はまた次の機会に。

## 間幕 「廃墟」

サキ、と名乗る人に招かれるまま、ボクは廃墟同然の家に上がった。

廃墟の中は、やはり廃墟だった。すぐ入ったところの囲炉裏のある居間は床も壁も穴だらけで、その隣の少し綺麗な部屋にボクは通された。この部屋はこの家にあるもう一つの居間みたいな感じで、ここにも囲炉裏があった。

ネガイ、という新しく出てきた黒い服の人が裸だったボクに服をくれた。ネガイは少し背が高い女の人だった。そういえば、ボクも人間の女だった。サキはボクが服を着るところをじっと見ていたけど、あの人も女なのだろうか？ 声は高くてそれっぽいくど。

服を着て、お茶を一杯（すごく熱かった）を飲むと、サキは昔話だと言って物語りをはじめた。

それはボクのご主人様の話だった。ボクと一緒にいた頃、<sup>うつつ</sup>現にいた頃、の名前を忘れて、‘ツミ’と名乗っていた彼はこの家で三年間暮らした、という話。でも、サキの話は、物語と言うよりは、その昔の日々を思い出すような細々とした昔話で、なかなか長い。天高く昇っていた太陽が地平線に沈んでも、サキの昔話は、ご主人様がこの世界に来てから一年も経たないところまでしか進まなかった。

でも、退屈だった訳じゃないよ。話の中でボクが特に気になったのは、アカがどうしてサキのことを嫌いじゃないのかということだった。

「アカは、ここに来て間もない頃大きな病気をしたことがあるのです。そこで私が看病してあげたところ、<sup>わたくし</sup>いたく感謝されて、それから私達は友達になったのです。」

二・三年はその関係が続き、一時期はアカと一緒にあちこち山野

を歩き回って友好を深めました。しかし、ある冬の日、今度は私が身体をこわしてしまい、それから一年くらい部屋を出られない日々が続きました。そして、その間にお互いの気持ちは離れていってしまったのです」

「お互いの気持ちって、サキは病気だったんだから仕方なかったんじゃないの？ アカはどうして」

「いいえ！ アカは悪くありません。アカは、私が病床にあっても常に傍にいてくれました」

彼女は元々自分の気持ちを素直に表に出すのが苦手でした。それでも、彼女は私のみを精一杯案じてくださり、その気持ちを何とか伝えようとしていました。しかし、私の方が上手に彼女の胸の奥の気持ちを受け止めることができず、身体の具合の悪い時にはつい彼女の裏腹な言葉を真に受けて返してしまうことがあったのです」

やっぱりボクにはアカという女の人がよくわからない。どうしても心の中にある気持ちを反対のことをしなければいけないのだろう。そんなことをしても、誰かを、大好きな人を困らせてしまうだけじゃないのかな。

それに、彼女を好いたサキ、それにご主人様も良くわからない。人間って、変な生き物だ。

前足を地面から離し、二本の足で歩いているせいだろうか。

\*

そして夜、ボクはかつてご主人様が使っていたという部屋で眠る。机や本棚の置かれた質素な感じのするこの部屋は、廃墟と化した家の中で妙に綺麗だった。時が止まっている、とサキは言っていた。身体を横たえ、目を閉じて耳を澄ます。聞こえる音は本当に幽かな物だ。サキが言っていた、ここはもう死んでしまった世界なのだ。

と。野は荒れ、森は枯れ、水の流れは途絶えた。くすんだ空に、月の光は寂しい。

いま、この世界にいるのはサキとネガイ、そしてボクしかない。二人はいままでこの誰もいなくなった世界でどうやって暮らしていたのだろうか。命の乏しいこの世界で生きてきたせいか、さっきの夕食でも二人はほんの少ししか食べなかった。生きるための力というものが感じられない。

と、そこまで考えて用を足しなくなった。

『トイレに行かなきゃ』と、飼い猫らしい考えがボクの頭に浮かぶ。

厠はこの部屋を出て、廊下を右に歩いた突き当たりにあった。

済ませて出てきた時、右手にある襖障子の向こうが昼間サキと話した部屋だと気付く。サキは一日の大半をこの部屋で過ごしているらしい。

あれ？ ネガイは？

ああ、二人一緒と言っていたつけ。

何故か急に二人が枕を並べて寝ているところを見たくなくて、ボクはそおつと襖を開けて中を覗いた。

そして、見てしまった光景にボクは激しく後悔した。

身体を重ね足を絡め合い、互いに悶えるように身体を上下に揺らす男と女の姿。下で闇色の髪を乱している女の人がネガイさんだった。彼女に覆い被さる白い髪の男の人は　サキだった。

あの人は男だったんだ。

その事実、ボクを恐怖させた。襖に遮られていた嬌声に追われ

るようにして、ボクはその場から逃げ出す。

部屋に戻って、ボクは布団に潜り固く目を閉じた。

身体が震える。

ただひたすら怖かった。

そういえば、猫だったころもボクは交尾をしたことがなかった。

発情期を知らず、しようと思ったことがなかった。

やがて、布団の上から誰かが触れるのを感じた。身を竦めるボクに、その人は優しい声音で言った。

「私<sup>わたし</sup>と契りを交わしてくださいませ」



## 間幕 「廃墟」(後書き)

今日の裏設定。

チヨ 琥珀 ネガイ 黒真珠

真珠というのは、宝石と違いはじめてから、<sup>まこと</sup>珠、なので、真の珠、と呼ぶらしいです。

このあと予定では、第三幕(キズオトの挿話) 間幕 第四幕(サヤキの挿話) ……………と進みます。

第五幕からは話が核心的な部分に入って、ストーリーがどんどん進みます。あまり日常系な挿話を入れられません。ですので、『もつとみんなの日常が知りたい』と思う奇特なお方は是非御一報ください。頑張つて何か加えてみますので。

### 3・1「狩りと語らい」

西風が茶色の木の葉を吹き散らす季節がやってきた。

秋、黄金色になった稲畑をアカと共に刈り終わった後、僕はキズオトと一緒に森を訪れる。

ここは 千五百ちいほの森 という。ずいぶん変わった名だ。

赤や黄、紅や山吹、様々に色づいた木々の中には実を結ぶ物もあり、そうでなくてもやわらかく降り積もった枯れ葉の間からキノコが顔を覗かせている。

食べられるもの、食べられないもの。時に拾っては火を通しつまみ食いをしていれば話の種は尽きない。

秋は、一年という循環に生きる命が最後に輝く季節。  
だからこんなにも美しく楽しい。

「どう、ツミ？ 新しい候補は見つかった？」

「あー、うん。北北西に百二十一メートルくらいにいるやつ、どうかな」

僕らは狩に來ている。ただ、僕らの手には弓矢も罠もない。使うのは、自分たちの特殊能力だけだ。

狩の手順を述べてみる。

まず、僕が月の属性である 天 の力を使い、上空から情報を集め一番良さそうな獲物を探す。僕自身は地べたを歩き目も開いてい

るが、同時に頭の中には『見ている』という情報が流れ込み、いわば二重に感覚を刺激されている状態になる。これは慣れるのに時間がある。

次に僕が見当を付けた獲物に、キズオトが小さな風の刃で傷を付ける。彼女は獲物を視認する必要はない。風を伝って得られる感覚だけで対象に傷を付けられるのだ。

これを何体もの獲物に対して行う。しかし、狩り取るのは一体だけ。僕らが森を後にする時に、こちらとの距離と、獲物の大きさと、その二つを条件に最も良いものを選んで狩る。キズオトが獲物の息をつまらせ気絶させ、眠っている獲物に僕が近づいて傀儡にする。そうやって獲物を家まで連れ帰るのだ。

秋の森には多くの動物が、人には越えられない‘境界’を越えてやってくる。森の恵を思うままに食し、肥えた動物は素晴らしい御馳走になる。それに加えて、僕らは冬越しの備えをする必要があるので、狩の機会は自然と増える。

以前は狩はキズオト独りでやっていた。命を奪うだけなら彼女一人で問題ないが、獲物を運ぶのは小さな彼女には難しい。僕の持つ、対象を意のままに従えるという能力を使えば、それは容易いことになる。だから、こここのところ連日キズオトの手伝いをしている。

だが、連れて帰った獲物が屠殺されるところを見るのは、正直あまりいい気持ちがない。僕によって無抵抗にさせられた獲物をキズオトが窒息死させ、それをアカとネガイが解体する。その光景は僕の胸を痛ませる。せめて、己の手でやりたい物だが、何度試みても気分が悪くなってすぐに止めてしまう。

人を殺めても、こんなに気分は悪くならない。

それは、僕が人間を‘狩って’いるわけではないからだろうか。彼らと僕は‘殺し合って’いる。それは殺意と殺意の交換であり、

僕らの立場は互いに等しい。

しかし、狩りにはそのような相互関係はない。動物たちには殺意がない。ひたすら無垢な瞳をこちらに向けるだけの彼らを、僕は一方的に殺しているのだ。割り切るには、難しい。

「ツミ。できたよ。これで何匹目だっけ？」

キズオトの声。耳には届いたが、思索の海に浸る心には届かない。

「ツミ！ 聞ってるの！？」

「え、あ！ 何？」 ようやく反応をすることができた。

「だからあ、これで何匹に印を」 「キズオト、足下見て！」

「え？ きゃあ！」

注意は一寸遅く、木の根に足を引っかけ転んだ。

「もう……ツミがメランコリックになってるせいだからだよ！」

「あ……いや……、それよりその髪……」

彼女が転んだ場所は運悪く水気の多いところだった。身にまとっているいつもの大きな袷は多少汚れたくらいだったが、長い蜂蜜色の髪が泥染めになっていた。

「あー！ ツミ、責任取ってよね！」

「せ、責任！」

彼女は僕の手を取って走り出した。僕は、抵抗せずにおろおろつていく。

「あれ？ こっちは……」

「いい機会だから連れて行ってあげる。道敷ちしきの溜まほろし、この夢の最果てに」

＊

うつそうと茂る森の中にある湖とは奇妙な物だ、と僕は思う。そこだけ刈り取られたように唐突に開けた場所には、大きな大きな水溜まりがでんとある。

道敷ちしきの溜ちしき という湖。 天戸あまこのやねの宅あまこのやね の東にある 八衢やちまたの川 と繋がるこの滄い湖は、向こう岸を見ることができない。それは広いせいだけではなく、ぶ厚い霧が向こう側に壁のように立ちこめているからだ。

あれが僕らの夢まぼろしの果てなのだとキズオトは言う。

「あの向こうではね、湖はどこか別の夢まぼろしにある湖と通じているの。だから魚とかは泳いで夢まぼろし同士を行き来しているけど、あたし達は渡ることはできないよ」

彼女は湖の澄んだ水で髪を濯ぎながら僕と会話する。

「あんまり実感沸かないなあ……」

「そう、かもね。……………それでツミ、さっきは何を考えていたの？」

さあ話してみなさい、と包み込むような態度で彼女は尋ねてくる。今日のキズオトはなんだか年上の女性っぽい。

まあ、実際そうなのだが。

「ああ、その……人を殺めると動物を殺めるのって違うんだな、と思つて」

彼女はすぐには答えなかった。

あたりは静けさの住居となっていた。黙っていれば、キズオトが水を掬つては髪に向かつてこぼす、はしゃりばしゃりという音しか

聞こえない。耳を澄ませば、幽かに枯れ葉の落ちる音も聞こえる。  
ややあって、当たり前じゃない、と彼女が言った。

「自分と同じ種族を殺すか、そうじゃないかの違いがあるんだもん。ツミは、どっちの方が嫌いなのか？」

僕は迷わず、「動物だね」

「自分の物を壊すのと、他人の物を壊すのと、どっちが辛いことなのかな？　きっと、ツミは後者を厭う。それを同じだよ」

それを聞いて、僕は一つ思う。

諭すように話す彼女はどちらなんだろう？

髪を洗い終わった彼女が、水を絞り落しながら湖畔から離れる。  
そして、僕の方へ歩いてくる。

座っている僕よりは少しだけ背の高い彼女は、僕を見下ろしながら言う。

「こんな暗い話、あたしもうしたくない。ツミ、元気が出るように物語を聞かせてあげる」  
おはなし

僕の左側に腰を下ろして、彼女は話し始めた。

「ツミは伊邪那岐と伊邪那美を知っている？」  
イザナギ イザナミ

「日本神話に出てくる天と地を創った神様だったわけ」

「そう、伊邪那岐と伊邪那美は世界、つまり現と夢の世界を創った。  
イザナギ イザナミ うつし まぼろし

世界だけではなく、その守護者たる八百万の神々もまたその二柱の神をして生まれたわ

でもね、伊邪那岐イザナギと伊邪那美イザナミははじめから完璧な世界を　すな  
わち現をうつつ　創れたわけじゃない。夢とは、現をうつつ創る上での失敗作  
の世界なんだよ。知ってた？」

「……全然。それ以前に、本当なの、この話」

「現では虚構の物語。誰も知らない。でも、一つだけ『古事記』  
に記されている、名前を持つ夢がある

それは、淡島あわしま。地面が雲みたいになわふわわしていて淡いから、  
そういう名前なの。

理由はわからないけど、夢は消えてもまた生まれる。だから、現うつつ  
ができて国産みが終わってから何千年経っても、夢はまぼろしたくさんある。  
でもその中で、淡島あわしま　だけは昔から変わらない。どこの夢にまぼろしぶつ  
かることもないけれど、確かにある」

つかみ所のない漠然とした話だと、感想を抱いた。何千年もの昔  
の話、それ以前に真偽も疑わしい話。煙に巻かれたみたいに、僕は  
何を考えることもできない。

話している時のキズオトの口調は、極めて淡々としたものだった。  
語彙は大人の使うような難しいもので、語尾だけが普段の彼女の面  
影を残して。

「ねえ、ツミは強い力が欲しい？」

今のは、いつもの彼女らしい澁澁とした物言いだった。しかし、  
その内容は、ひどく難しい。

強い力、何のために、何をするための力なんだ？

「僕は、今はみんなと戦うための十分な力を持っていると思うか  
ら、要らないよ」

ふうん、と彼女。満足したようでも失望したようでも、どちらに

も取れる声での相槌だった。

「もし、ツミが強い力を欲しいと思ったら、淡島を捜すといいよ。淡島は世界そのもの、力そのものだから」

そんな時が本当に来るのだろうか。

もしその時が来たとして、僕は何を為そうとしているのだろうか。

\*

「だあれかさんが、だあれかさんが、だあれかさんが、みーつけた」

小道をたどりながら僕らは家に帰る。僕は後ろのに今日の獲物である中くらいの牝鹿を引き連れて歩き、キズオトは前の法で謳いながら歩いている。彼女の歌声は真に愛らしく、鶯を僕に思わせる。

「キズオト、ちょっといいかな？」

僕が呼びかけると、彼女は歩みを止め僕を待った。

「なあに？ ツミ」

「その歌って君がこの夢に来る前から知っていたのかい？」

彼女は首を横に振った。

「サキに教えてもらったの。そうそう、さっきの話もサキが

教えてくれたんだよ」

「サキが？」

そういえば、前に天乃常立をくれた時もその由緒を教えてくれたな。

「サキは何でも知っているよ。不思議だね。あたしはこの夢の中のことなら何でも知っているけど、サキは時々だけ余所の夢のことを話すよ。現のことだって知っているみたい。たまに、話しながら変な『流行語』を使うんだよ」



思い出した。初めてあった時、彼女は僕に‘スリーサイズ’を教えた。考えてみればおかしい話だ。八十年近くこの夢まぼろしにいる彼女がそんなこと知るはずがないだろうから。

「どうやって知っているんだろっね」

僕が呟くように言うと、答えが返ってきた。

「さあ……いつか『ネガイが教えてくれる』とか言っていたなあ。そういえば、ネガイのこともあたしたちよく知らないのよね」

そこまで言っつて、キズオトは背中を見せた。この会話はここまでで終わったのだ。

しかし、五歩ほど歩いてから卒然とキズオトが振り返った。

「サキで思い出したけど、最近ツミはしっかりアカとの貞操を守ってるの？」

な、何とプライベートな質問を！

しかも

「キズオト……知ってるんでしょ？」

この夢の中で彼女が知り得ないことはないのだ。

先に白状すると、僕は完璧に貞操を守りきれているわけじゃない。まことに、サキの誘惑は逆らいがたいものがある。しかし、ここ最近はなんとか堪えきれるようにもなってきた。ここ一月はサキを遠ざける事に成功し続けている。

「僕だつて頑張ってるんだ」

そう言つと、キズオトは然り顔で二度頷いた。

「ツミは本当にアカのことが好きなんだね」

「……まあね」

いいなあ、とキズオトがこぼした。

「ツミはもう誰のことも好きにならないの？」

「？　どうしたのキズオト。俯いたりして。元気ないの？」

いつの間にか顔を伏せてしまった彼女の頭に、僕は手を伸ばしてみた。しかし、この手はぱしりと弾かれる。

「元気なくない！　さっきまで、ツミの方は元気なかったもん！」  
軽い音を立てて彼女が走り出した。見る間に距離を作っていく彼女の背に、僕は慌てて叫んだ。

「キズオト！　あんまり遠くに行かないで！　君を見失うと

豪<sup>ゴウ</sup>と風が吹いて、僕の瞼は意志に関係なく閉じてしまう。

そして、次に光を見た時には、キズオトの小さな姿は何処にもなかった。

「キズオト。　何処？　おい」

困ったことになったかもしれない。このまま彼女がいないと  
「帰れない……………」

夕刻を予告する、冷たい風が吹いた。

### 3・1「狩りと語らい」（後書き）

第三幕はキズオトのエピソードです。次でお終いです。

解説……………「千五百」の由来がなんだかわからなくなってしまいました、ごめんなさい。「道敷」は……確か、道返しとかと同じだと思います。

ところで、皆様はこの小説を縦横どちらでお読みでしょうか？

書いている立場としてはこれは横書きで読めるようにレイアウトを組んでいます。行間をまめに空けるなど、見様見真似の工作をしています。

この間、図書館で横書きの小説を見付けました。しかもハードカバー。ちょっとビックリしましたね。

### 3・2「風神楽の巫女」

月の力を解放、脳裏に ちいほ 千五百の森 の全体図を呼び起こす。

キズオトを捜すため。

方向さえわかっていれば一人で帰れそうなものだが、どつこいそうはいかない。起伏の激しい地面、多くの木々、森の中は迷宮と化している。全体図を頭に入れながら歩くと、眼前がつい疎かになりがちなので一人じゃ迂闊に歩けないのだ。

感覚を一点に集中させず、あらゆる情報に対して意識を広げ、鋭敏に反応できるように構える。

そして僕はキズオトを捜して歩き出す。

まもなくして彼女の居場所の見当が付いた。

だが、それと同時に複数の異形の存在を確認した。こちらに敵意を持っている。

人間じゃない？

木立の間からチラチラ見える異形の姿、二本の足で歩いてはいるが、気配が人間と異なると感覚的に思う。他の夢から来た人間じゃない、全く異質な気配。

僕は反射的に腰に差した天乃常立に手を掛けた。三ヶ月ほどの訓練で、僕はこの刀をどうにか普通の刃物として使えるくらいに抑えられるようになったのだ。しかし、月夜ではない限り油断はできない。

構えは居合。勝負を一瞬と限定し、暴走の危険性を限りなく低くするため。鯉口を切り、姿勢を低くして相手に向かい合う。

異形がこちらに気付いた。ぱつかりと黒い二つの目がこちらを見る。

だが、次の瞬間、一迅の風が吹くと同時に異形は真つ二つになった。

風が吹いてきた方向は、キズオトがいると僕が見当を付けた方向だった。

己が眼まなこだけを頼りに僕は走り出す。

進むにつれ生い茂っているはずの草や枝が疎になってくる。切り落とされているのだ、キズオトの風に。

「めえかくしおーにさん てえのなるほおうへ」

森の中ばかりと丸く刈り取られた広がりの中にキズオトはいた。

そこにあつたと思われる木々は、すべて一ミリメートル単位で輪切りにされて、あたりに紙吹雪のように散らばっていた。

彼女は歌う。その足下に、灰色の身体から紫の体液を流す異形の骸。

彼女を囲む異形の数は一五。どれもが小さな少女一人相手に攻めあぐねている。

無理もないけどね。

僕は信頼感を込めて、鞘走留はたきどめが音を立てるまで刀を押し込む。

やがて、痺れを切らした一体がキズオトの背後から飛びかかった。彼女はそれを見ていない。しかし、次の一秒には異形は無惨に四つ裂きとされる。

歌うキズオトの背後で紫の血の雨が降る。

残された四体が時を同じくして動く。描かれる軌道は、キズオト

を中心とした円。異形達の走りは殊の外速く、端で見ている僕にはその姿が霞んで見える。けれど

「おーへやはきたむき くうもりのガラス」

次々と四体の攻撃が繰り出されてもなお、彼女は歌声を乱すこともなく軽々とそれをかわす。

のびやかな歌声、優雅な身こなし。それはまさしく

### 『風神楽の巫女』

僕の脳裏に、彼女に与えられた二つ名が自然とつかびあがる。

円かに切り開かれた森は彼女の舞台。秋風が拍子を取る笛の音。

異形達は彼女という舞い手を引き立てるための脇役に過ぎなかった。

「ちいさいあき ちいさいあき ちいさいあき みーつけた」

キズオトの横を過ぎ去った異形が上半身とか半身を分断させて、進む勢いのままに木に激突した。

はらりと彼女の袂の右袖が落ちた。

「ああー！ 駄目じゃない、ササヤキに怒られちゃうー！」

ついに歌を中断した彼女。ひとしきり嘆いた後、キズオトはばさりと袂を地面にうち捨てた。

「来たれ風の竜。 こいつらに痛い目見せてやるわよ」

突如降りてきた猛烈な竜巻に、異形達が無力に巻き上げられていく。

異形達はもがく。空中で、地面に向かって手足を振る。

それを見上げて、キズオトは嘲笑った。

「降りてきたいのお？ そう、風に逆らうんだ？」

なら、ケ

バタケ！ あの子達に空気の大切さを教えてあげなさい」

天高く、見上げる風が粒ほどに見えるくらい高く巻き上げられた異形達が、落下をはじめめる。だが見ていれば、その落下速度はあり得ないほどに早いことに気付く。

空気抵抗がない？

矢のように降ってくる。

地面に着く瞬間、異形達の身体がたてた音は空き缶を潰すようなもの。彼らは土にめり込み、永遠に動かなくなった。

＊

探しに来てくれたんだ、と聞かれ、これを肯定すると彼女は心底嬉しそくに顔をほころばせた。

空は藍に染まり、枝葉の影に三日月が見える。僕らは結局大きな獲物もなく、背に負った袋に栗や茸の類を半分くらいまで詰めて帰路に就く。

怒られそう、アカに。

憂鬱に空を見上げる。すると、顔の下の方から声がかかった。

「ねえ、ツミ。……………ツミはどういう女の子が好きなの？」

「ええ？」

驚きと共に彼女を見下ろすと、彼女は有無を言わせぬ表情でこちらを見上げている。

僕は不承不承答える。

「放ってけない子かな……。といっても、アカに会うまで 現 にいる頃は別に女の子と付き合うことも、そうしようと考えたこともなかったけど」

彼女は目を丸くして言う。「じゃあ、アカがツミの、初めて、な

の？」

「初めて」。何か表にも裏にも意味がありそうな言葉だ。

彼女は問いを重ねる。

「それで……初めてにして一目惚れのアカ以外、もうツミは誰のこととも好きにならないの？」

女性がわざわざこんな物言いをするには意味がある、そう僕は判断する。

先程はぐれてしまった事とも併せて、僕はキズオトの気持ちを推測した。

彼女の質問に言葉で返さず、ぐっと腰を曲げて背の低い彼女の頭的位置まで自分の顔を下げる。小さな顎をしゃくり取って、僕は自分の唇と彼女の唇を重ねた。

一秒間。

湿っても、深くもない、親愛を示すためだけの口づけ。顔を放した時、無念そうな彼女の面持ちが目には焼き付く。

「ツミ」

僕は彼女を遮った。

「僕は君のことが好きだよ、キズオト。でも、この想いはアカに對して想うような恋心じゃない。僕はキズオトを、家族として、妹として想っているんだよ」

絞り出すように彼女は言う。「それは……あたしの身体が子供で、十もいなくて生理も来ないから？ あたしを、抱くことができないと思ってるから？」



風信子石の双眸に浮かぶ涙。それを見て、難しいな、と密かに胸の中で呟く。

「キズオト、よく聞いて。人は好き合っているから身体を重ねなければいけないことは無い。逆に、抱き合ったところで好きになる訳じゃない。だから、君を抱かないからといって、僕が君のことが好きではないということとは違う。でも、僕はアカの物だから。僕の恋はすべてアカのためにある。僕の心の中で、一番にあるのはアカのことだ。だから僕は」

「もういいよ」感情のこもらない声。それで、僕の言葉は遮られた。

キズオトはぐいと腕で目を拭った。

そして、次に顔を見せた時には、花咲くように笑っていた。

「ツミの言いたいこと、わかったよ。今は、ツミの言う通り、

ツミの‘妹’でいてあげる」

彼女はくるりと身を回す。

わずかな風。紅葉と共に舞う少女。

「でも、これからあたしは、ツミがあたしにも恋するように頑張る。だって、あたしはツミのことが‘恋人’として好きなんだから」

そう、と短く答える。こちらが苦く笑うと、あちらは屈託なく笑った。

「帰る。歌いながら」

「えっと、『ちいさい秋みつけた』？」

「そう、三番ね」

日の沈んだ、星の瞬きはじめる空の下で、僕らは声を合わせ歌いながら帰った。

櫨の葉朱くて入日色。

＊＊

キズオトは穢れを知らない。

穢れても、それを穢れと思わない。穢れの存在を知らない彼女は‘無垢’であり、無垢な彼女と共に在る新しき風が彼女を浄め続ける。

一切の穢れを寄せ付けない彼女だからこそ、血風吹く戦場にあつて無類の強さを持つ。

僕は、キズオトのそんなところが好きだ。時には、その身体を欲しいとさえ思う。

けれど、僕が欲望のままに彼女を抱けば、彼女は穢れてしまうだろう。穢れを知らない彼女といえど、この穢れを抜うことはできないと僕は思う。

僕は彼女に透明であつて欲しい。蒼天と大地を巡り続ける、色のない風のように。

だから、僕は彼女の兄であろうと思う。

### 3・2「風神楽の巫女」（後書き）

キズオトの七宝は翡翠です。カワセミと同じ名前を持つ石は彼女にふさわしいと思います。

第三幕はキズオト中心のエピソードとしたのですが、書いた立場としては不完全な出来だったと思います。なかなか難しいです。もっと彼女の天真爛漫さとか出せれば良かったのですが。

解説：今回キズオトが呼んだ『ケバタケ』と言う名前は妖怪、というか埼玉県のある地方に伝わる超常現象の名称です。キズオトは自分の力を妖怪とかそんな名称に喩える癖があります。

まあ、この名前も受け売りです。CROSSNET原作のアニメ『AYAKASHI』を見ていて思いつきました。勿論、由来は調べなおしたけどね。

## 間幕 「忘風」

感覚は虚<sup>うつろ</sup>。そして意識は断片的。

両手首に縄が食い込む / 露出した肌に浮かぶ汗 / 渴いて、  
声のでない喉 / めめりを取ることでできない、両脚の間

生暖かい、湿った闇の中でボクは犯され続けている。

閉じこめられて、両手を繋がれ、縛られ、身動きできないまま。  
もう、何日がこうして過ぎたのだろうか。

始まりはいつも同じ。

ネガイが小さな蝋燭を持ってきて、その小さな光の中でサキがボクを犯す。

サキは目が不自由なのだから光など意味がない。その光はボクに羞恥を与えるため。彼は、来る日も来る日もボクを凌辱し続けている。徹底的に。

ほら、襖が開いたよ。

ボクの両脚は彼が潜り込むことを当然のこととして受け入れ、疲れ切った心と裏腹に、身体は股の間から与えられる快楽に反応していく。

そして、身体の快楽は心を蝕んでいく。

ほら、意識が薄れていく。

＊

夢。これは夢。

深い水底に見える景色のように、手の届かない現実味の薄い景色。ボクは猫。小さな、四つ足で歩くありふれた猫。ひげの先からしっぽの末端まで、昔のボクの身体と何一つ同じだ。

学校。左手に校舎。足下から視界の彼方までグラウンドが広がり、少し離れた場所に秋桜や菊の咲き誇る花壇がある。

誰もいない。ここにいるのは、ボクと、制服を着た一人の女の子。

ねえ、なにしてるの？

にゃお、と耳に聞こえる。人の言葉は口にできない。でも、彼女の注意を引くには充分だった。

「あれ？ 猫だ。どこからきたの？」

彼女はしゃがんでボクを呼ぶ。ボクはそれに応え彼女の足下に寄る。

「触らせてくれるの？ わあ、ふわふわだねキミ。あたし、

相川・千風。キミは？」

チヨだよ。

あははと彼女は明るく笑う。

「返事したあ、かわいい」。誰かに飼われてるんだね」

うん、昔ね。

「ちよつと話聞いてくれるかな？ おいで」

手招かれるまま、ボクは彼女の腕に抱き上げられる。やわらかい身体がボクを包んだ。

「『不意に駆け抜けた風。お前は私を何処に連れて行ってくれるのだ？』」

誰の物か知らない詩。いつ聞いたかも、わからないの。あたしね、子供の頃の思い出がないの。今はそんなの何でもなくて、ちゃんと友達もいるんだけど、ときどき思うの、あたしはここいいていいんだろって。時々、自分が本当はみんなと一緒にいちゃいけない存在のような気がしてきて、不安になる。

今はね、風を待っていたの。どうしようもなく不安になったとき風を浴びると、あたしには風が何か教えてくれるように感じるから」

見て、と千風はグラウンドの一点を指さした。

風が動く。枯れ葉が集まり……

「お願い」

彼女の呟きに応え、集められた枯れ葉が塵となる。

「すごいでしょ？ あたしが考えると風が吹くの。吹くだけじゃなく、あんなこともできるの。」

でも、風があたしの考えていることをわかってても、あたしは風の考えていることがわからない。昔はわかっていた気がするの。今ある思い出の、一番昔より更に昔」

「あたしは、いま間違った物語かせの中にいる気がする」

空色の瞳は、どうしようもなく深い戸惑いを浮かべていた。

キズオト。

思いもせず口をついた名前は、やっぱり猫の鳴き声としか空気を震わさせなかった。

土をかむ音がして、新たな人間が現れた。

「相川……授業はじまつてるよ。何かあったの？」

黒い髪に青みがかった黒い瞳の男の子。気遣わしげな優しい目は、ボクのご主人様に似ている、そう直感的に思った。

「あ、うん……少し風が浴びたかったの。ありがとう、透。迎えに来てくれて」

透は少し困ったように笑って、それを千風の感謝への返答とした。そして二人は肩を並べて行ってしまう。ボクは、彼女たちにとってはただの迷い猫に過ぎない。

消える二つの背中と共に、夢が覚めた。

＊

サキの寝物語は、まだ天戸あまとのやねの宅が廃墟になるところまで進んでいない。なぜご主人様をはじめとした四人の住人が姿を消してしまったのか。そしてどこへ行ってしまったのか。ボクには知るよしもない。

でも、夢ゆめから去る人間は現げんじつに行くしかないと思う。

キズオトは、昔を忘れて普通の高校生として生きている。  
そんな夢を見た。

## 間幕 「忘風」(後書き)

現実ではないもう一つの世界、『my moon』の舞台であるその世界を‘夢’と書き‘まぼろし’としたことに深い意味はなかったりします。しかし、そうしたことでも今回のような話もできるんだなあ、と一人感心しました。

そんなわけで、束縛プレイで調教中のチヨでした。次の間幕もこのままの気がします。

次はササヤキさんのエピソードです。これも二話ですね。



#### 4・1「白世界に消える一片」

乳白色の全体に赤い一点を持つ果实。

それは常に二つ揃って生り、特に乳飲み子にその恵をもたらす。皮の中は脂肪。握る感触はあたたかく、やわらかく、触れた者に包み込むような安心感を与える。

「ふふ、何を緊張しているの？ それとも焦らしているのかしら？」

僕を誘う艶っぽい女性の声。低くも高くもないその声は、密のよう

に心地よく耳朵をくすぐり脳に染み入ってくる。  
「さあ、早く。さもないと、ここで二人とも凍えてしまうわよ。それとも、やっぱりここは私に、年上の女に先導してもらいたいのかしら？」

ためらいを捨て、僕は目の前の乳首を口に含んだ。突起して下で押ししても引つ込まない乳首を何度も舐め、また同時にもう一方の突起にも手を掛け、優しさを込めて揉む。

甘い。

馥郁たる香り、糖のような味。意識せず貪るように吸ってしまう。すると乳房の主の呻く声が聞こえた。

慈しむように頭を撫でられる。

「本当に可愛らしいわよ、ツミ。私のこと、お姉さんにみたいに、お母さんみたいに思ってたんでしょ？ いいわよ、いっぱい甘えても。可愛いあなたのしたいことなら、何でもさせてあげちゃうのだから」

細く冷たい手が耳たぶをくすぐる。その官能に、僕の理性が埋められていくのを感じた。

＊＊

「今年は私じゃなくて、ツミを連れて行くですって!？」

憤慨したアカの声が今に響く。暖かな囲炉裏端から発せられたその声は、冬の寒気のしみこんだ壁に当たって消えた。

「なんで？ ツミは私みたいに火も使えないし、キズオトみたいに寒風も退けられないのよ？  
そうよ、キズオト、あんたが行きなさい」

「えー、寒いのだ」  
即答だった。

いきりたつたアカが床を鳴らして立ち上がる。しかし

「う、痛！」

「ほら……言わんこっちゃない」

あきれ顔のササヤキさん。

アカは二・三日前家の前に張った氷に滑って足首を痛めていた。火を性とする彼女は、それでなくとも寒さのせいか冬になってからずっと調子を悪くしていて、言動に切れがなかった。

何の話しをしているのかと言うと、ササヤキさんが天戸あまごのやねの南西にある閻山えんざまに昇らなくてはならないので、その付き添いを誰がするのかというものである。

閻山には白雪綿なる真冬の間だけ実を結ぶ木綿が生えているらしい。つまり服を作るために必要なのだ。

僕らの着ている服はすべてササヤキさんが作ったものなのだが、この服にはそれぞれ特殊な呪いまじないが掛けられている。例えばアカの朱

い狩衣は炎に焼けず熱を遮断する。キズオトの唐草の袢には、彼女が必要以上に力を行使しないための制御の呪いが掛けられている。力を持つ服には、それなりに特別な材料がいる。その一つが白雪綿であり、この寒風吹き荒ぶ真冬に雪山登山をする必要さえあるのだ。しかしアカは足を捻挫しており、キズオトは同行を拒否している。そう言ったわけで、僕がササヤキさんの同行と相成ったわけなのだが、アカはそれをよしとしなかった。

うれしいなあ。

もちろん、アカは反対の理由をそのような事とは言っていない。しかし、彼女の真意がどこにあるのかは、それこそ火を見るより明らかだった。

「アカ、約束するよ。ササヤキさんと二人になったからって、キミを裏切るようなことはしないって」

「そ、そんな心配してるんじゃない！」

ほら、顔が朱くなった。

ササヤキさんが言う。

「アカ、私を信用して頂戴。いまでも、アカのものを壊したことも盗ったこともなかったでしょ？ ツミも、アカにちゃんと返すから」

嘘、とアカの珊瑚色の目が三角になる。

「ササヤキ、私のものを盗ったことないって、本当かしら？ 私見たのよね。この前の明け方、私が取っておいたリンゴ酒、あんたがこっそり飲んでいたの」

「だ、だってあの日は寒くて！ ちょっとお酒が飲みたいなって

ー

「言い訳しないっ！」

アカはお酒が好きだ。甘いもの辛いもの、軽いものきついもの、

気分に合わせて色々飲むので、この家のそこそこにはアカのお酒が置いてある。しかし、自分以外の人間が無断でそれに手を付けることを彼女は絶対に許さない。

「あら、アカ。あのお酒はササヤキさんも作る時に手伝っていましたがね？　でしたら、あなたがあれを独占する謂われはありませんよ」

サキ登場。

これは長くなるな。

僕は焙じ茶を啜り長期戦に備えた。

＊

結果的にアカの意見は棄却され、僕はササヤキさんと共に、櫓かんじきと蓑笠という少々心許ない装備で闇山を登りはじめた。しかしさすがと言うべきか、ササヤキさんの用意した蓑笠はしっかり寒さを防いでくれた。

だが、そうとわかれると代わりに、別の二つの不安が僕の頭に生じた。

一、空が俄にかき曇り雪がちらほら舞い始めたこと。

二、さっきから妙にササヤキさんの口数が少ないこと。

周りが薄暗かったのは雲のせいではない。もともと、闇山くみやまは夏に來ても冬に來ても薄暗い場所だ。‘闇山’くみやまという名のせいなのだろうか。ここでは夕闇はすでに夜闇となり、夜闇など深淵である。

そこに雪が舞う。すると風景は一変する。一点の穢れのない雪花

が、白く妖しげな光を放って風に舞い始めるのだ。

こういったことは夏の終わりに皆で蛍を見に来た時もあった。夜になれば一寸先も見えなくなる闇の中、蒼い金剛石の光を放ち飛び回る蛍が無数に飛び交っていた。それは、僕にとっては、幻想的、の一言に尽きる光景であった。

ただ、このような目の前の雪景色の美しさに感嘆し、ササヤキさんに同意を求めても返事がないのだ。すこし様子が変だと思った。と、彼女の背中が止まった。間近により、何かと問う。

返ってきたのは言葉による答えではなく、接吻だった。

「サ、ササヤキさん！ なにを」指で口を封じられる。

笠で半分が隠れた彼女の顔、唇が紅玉ルビーのようなつやを放っていた。

「ツミ。愛くるしい私の坊や。少し待っててくれるかしら。

野暮な邪魔者達を片付けてあげるから」

突然のことに首をかしげつつ、ふと周りを見ると僕らは狼に似た白い異形に囲まれていた。

「ササヤキさん、これ」「ふふ、まかせてくれるわね？」

とりあえず彼女の言うことを聞き入れ一歩退く。天乃常立あめのとこたちはいつでも抜けるように構えておく。

彼女は蓑笠を身から剥ぐ。青い髪、雪華文様の蒼い着物が白い吹雪景色にうかびあがる。

『地から天へ、そびえよ氷の柱』

傍にいる僕でさえ聞き落としてしまいそんな微かな声。

何体かの異形を氷のとげが下から貫いた。

死んだ異形は勿論、残存二十の異形も何があったかわかっていないようだった。不意を突かれ、唸ることさえやめてしまった異形に、次の攻撃が行われる。

『氷雪、其は風に舞う銀の剣』

異形達は何も聞こえていない。本来なら、彼らはこちらの詠唱を耳にして対処するように動くこともある。少なくとも、それを合図に回避運動くらいはする。だが、今の彼らはそれはできない。何故なら、これが‘囁き’だからだ。ササヤキさんは、術の詠唱を空気の振動とすることなく、届けるべき神霊の類だけに送ることができるのだ。

降り注ぐ銀の剣に六体が倒される。見事な物だが、同時に一つ思う。おかしい、と。

『思い知れ、白き女神の拳は岩をも砕く』

白い輝きを放ち流星の如く降り注いだ大粒の雹に、七匹の異形が挽肉の塊と化す。

むごい。

普段、彼女は後衛担当で敵と交戦しない。しかし、戦う時の彼女はそれこそ‘囁き’の能力で一瞬にして戦闘を終わらせる。だが、今の彼女はわざと敵を少しずつ倒して戦いを長引かせている。

さらに気がかりなことがもう一つ。彼女は水だけではなく、火や光の術も使うことができるのだが、これまで避けるように氷の術だけは使わなかった。

何か変なのだ。

『非情なる裁き。凍れ、そして砕ける』

ようやく動き出した七体の異形が、身を躍らせたその形のまま七つの氷の像となった。そして、風が吹くと像は粉みじんとなり雪原に埋もれた。

己の所業を満足そうに、残忍な笑顔で見渡す彼女。背筋の凍てつくものを感じつつ、しかし僕は彼女に労りを述べる。

藍色の瞳に冷たい光を宿した彼女は、僕に奇妙な質問をした。

「ねえ、ツミ。私は誰だと思っ？」

「誰って……ササヤキさんじゃないですか」

そう言った途端、弾かれたように笑い出した彼女。ようよう激しくなりだした吹雪の中、その声は高らかに響き渡る。

「そう、無理もないわね。はじめまして、ツミ。私はナゲキ。

ササヤキの鏡像にして、主である女よ」

鏡像？ 主？ 何を言っているのだろうか？

「私達は水の使い手、流れる水、冷たい氷、見えない水蒸気。私達は本来そのすべてを使える。

水は鏡になる、水鏡に映る二人の私。それがナゲキとササヤキ。でもね、水鏡に映って現れるのはササヤキの方。本当の‘私’はナゲキ。ササヤキは、私から生まれた下位存在よ」

形容しがたい不安が僕を襲う。

「それじゃあ、今ササヤキさんは何処にいるんですか？」

「もちろん私の中よ。安心しなさい。別に消したりしないから。だって、ササヤキがいなければ、誰が天戸あまこのやねの宅の家事をやるの？

私は嫌よ、そんなこと」

そこまで言い終えた彼女は、ついと天を見やり宙に手をかざして言う。

「ちよつと吹雪いてきたわね。どこかに隠れましょう?」

＊＊

彼女は、ナゲキは悪意に満ちた存在だった。

かつて、現<sup>うつ</sup>から夢<sup>まぼろし</sup>に来てしまった時、力に目覚めた彼女はササヤキさんを生み出し自らは眠りに就くことを選んだ。退屈<sup>たいくつ</sup>だったからササヤキさんが窮地に陥った時のみ、彼女は表に出て残虐の限りを尽くしてきた。

「ササヤキが表に出ている間、私は完全に眠っているわけじゃないわよ。でもね、私が表に出ている間は、ササヤキは昏<sup>ふか</sup>い眠りに就いている。わかるかしら? 私は彼女を邪魔<sup>じゃま</sup>することができれば、私は私の思うままに振る舞えるのよ」

隠れた洞穴は当然寒い。一応、用心して火種を持って来てはいるが、そう沢山は使えない。だから、ナゲキは人肌で暖めあおうと言った。

凍える身体にナゲキの蠱惑的な誘い。決してアカとの約束を忘れたわけじゃないが、この状況下でそれを守り通すことはできなかった。

冷えゆく身体を温めるため、丹念に前戯をしてから交わることにする。はじめは何の趣向もない正常位。ナゲキは僕を熱心に先導しようとするが、僕はこのまま彼女に優位を取られたくはなかった。

微かに湯気を上げている彼女の陰門。脚をひろげ、恥ずかし気もなく露出されたそこからいよいよ彼女の中に入ろうとした時、腰より少し高い箇所の皮膚に焼けつくような痛みを覚えた。



ああ、そうだったね、アカ。

これは用心深いアカからの戒めの火傷。僕が間違いを犯そうものなら、痛みを發して僕を抑止する火傷だった。

理性を取り戻した僕は、直ちに着物を直して洞穴の入り口に立った。

「あら、どこへ行くのかしら？」

そう言うナゲキは、Mの字に脚を開いたままの姿。悩ましげな居住まいに男の部分がいきりたつを感じるが、意志の力で抑え込む。「帰りましょう。今宵はまだ下弦。山を下りるまでの間、結界を張る力は充分ありますから」

「嫌だといったら？」

こちらに向き直った彼女は、これ見よがしに豊満な乳房を見せつけてくる。その感触、におい、味が記憶に甦る。

しかし

「引きずっても帰ります」僕はきっぱりと答えることができた。すると彼女はやれやれと首を振り、着物を整えながら立ち上がった。

「そう。ま、初めてあったばかりだものね。そういう、あなたの真面目なところが好きよ。それでこそ、可愛がり甲斐というものがあるわ」

背筋にぞくりと冷たいものを感じつつ、僕は下弦を隠す吹雪の下へ足を踏み入れた。

#### 4・1「白世界に消える一片」（後書き）

ナゲキの登場。今回は少し色気のある場面が多いです。

説明というのは、書くことより、入れることが難しいと思います。

ツミ達の服の設定はずっと入れたかったのですが、入れてみると長くなるなあの的にそこそこで終わらせました。あと、囁き、もそうですな。

というか、今回はツミ君が好き勝手に話してくれて、文章のつながりが滅茶苦茶です。ごめんなさい。後書きもそうですな。

#### 4・2「戦跡に響く歌」

雪山から帰った後、ナゲキは誰とも言葉を交わすことなく早々に床に入った。夕食はネガイさんが作った。

その次の日、ササヤキさんは物静かに朝食を作りそして片付けた後、また部屋にこもってしまった。僕は、自分から彼女の部屋を訪ねることにする。

彼女の部屋はやや広い。反物の類は別の場所にあるのだが、ここには織機が置いてあるのだ。色とりどりの湯野や扇など、趣を持つて配置された風雅な部屋の中、彼女はかたんかこんと静かに機織りはたおをしていた。

部屋に入って無言で示された座布団の上に座っても、しばらくは会話のない時が続いた。彼女は機織りを続け、こちらに視線もよこさない。僕の方も、来てみたものの何を話したいのやら、会話の切っ掛けを掴めずに口を開けないでいた。

フトフトと雪の降る日だった。閑しずかだった。

長い静寂の後、ついに彼女が口を開いた。

「ナゲキに会ったのね？」

「はい」

彼女はこちらに向き直る。物寂しそうな頬笑みを伴って。

「一年ぶりよ。彼女はね、冬になると一度は出てくるの」

だが、昨日のナゲキは冬だから出てきたのではないだろう。ナゲキは

「昨日のことはね、覚えて、いるわけじゃないけど、知って  
はいるわ」

ナゲキは僕に興味を持って、そのために現れた。

「夢の中であらましを聞いたの。ツミ……きつとあなたは気分を  
悪くしてしまったでしょうね」

「……いいえ、悪いのはササヤキさんではありませんから」

悪いのはナゲキだ。それだけは言い切ることができる。

ありがとう、と彼女。だが、その目はこちらを見てはいない。

一つ、大きく息を吸い、ササヤキさんは話し始めた

「私はね、ナゲキの仮面なの。仮面がその人格を演じている間、  
その下の顔は世界を見ている。けれど、仮面は、外されてしまった  
ら何も見るができなくなってしまう。仮面は「物」、ササヤキ  
は道具なの。」

私は持ち主であるナゲキに逆らえない。ナゲキは好きな時に私を  
外してその顔を顕す。今、こうしてツミと話している間もね」

もしそうなたら逃げてね、と告げられた。

彼女はあまりに痛ましい微笑でこちらに向き合っている。僕は、  
そんな彼女に堪えきれず、彼女の姿を視界の外にやってしまった。  
しばし会話が途切れ、それからまっすぐな問いがあった。

「ツミ、私のこと、好き？」

問いに対し、心底の想いを瞳に込めて彼女の目を見た。

「ササヤキさんのことは、とても頼れる人だと思います。初めて  
あった時から好きでした。でも、ナゲキさんは」

「ツミ」それは鞭でぴしやりと打つような、咎めの響がある言い  
方だった。

一つ息を吸い、ササヤキさんはやわらかな口調で言う。

「ナゲキは私なのよ。むしろ、私こそ私の一部。ナゲキを否定して、ササヤキを肯定することはできないの」

まるで諭すように。だが、僕はそれを理不尽だと判断する。

「そんなこと……。では、ササヤキさんは何だと言うんです？」

ササヤキさんだって、ちゃんとした一人の人間でしょう！？」

ふ、と哀しげな失笑。落涙こそないが、僕は彼女の涙を目にした気がした。

言ってはいけないことを言ってしまった。

そう気付くや、僕の思考は白くなり始め、やがて僕は何も考えられなくなった。

からり、と固まった場を壊すように襖障子が開かれた。

「お二方、突然で申し訳ありませんが戦支度をお願い致しますわ。八街川の向こう側に‘門’が開かれます」

\*

その夜、僕はアカと愛の営みをしていた。

昼間の戦いは実にあっさりと終わった。ナゲキが出てきたのだ。ナゲキは力ではキズオトに及ばないものの、頭を使った効率の良い戦いをする事で、並はずれた戦闘力と残虐性を見せつけた。れた。

そして、ネガイさんが用意した夕食を食べた後はさっさと部屋に入ってしまった。おそらく今はこの壁の向こうで寝ているのだろう。そんなことをあたまの片隅で考えつつ、僕はアカの中に入った。

部屋全体に防音の結界を張ってある。僕らの声は外には漏れない。

交わりの中、アカは炎そのものになると僕は思う。そして、彼女の膣内はまるで炉のようである。

彼女の中にはいると、焼けつくように熱い肉壁が僕を締め付ける。その度に、僕は溶かされて彼女と一つになる。行為の最中、アカと僕は一体の熱として融和するのだ。

限界まで彼女の炉の中を動き続け、最後に入れるだけ奥に入って自分の精を解き放つ。　　成長、<sup>まほうじ</sup>という概念がない夢では避妊をする必要はない。

彼女の動きが止まり、彼女の生殖器が最大の収縮をする。

自分の精液が出きつたのを確認し、荒い息をしながら力を抜きはじめた彼女の中から生殖器を抜き取る。

彼女から一步下がり、一時的に鎮まった陰茎を意識しつつ、僕はぐったりと横たわる彼女の肉体を見下ろす。そして、思う。

一つにはやはりなれない。

いくら言葉で形容しようと、本当に一つになることなどあり得ない。それは空しい事実、しかし、一瞬の合一感は確かにあるわけで、その魂と魂の一瞬の邂逅こそが性交の愉しみなのかも知れない。

まもなくして、アカがその身を起こす。熱情のこもった珊瑚の双眸。そう、僕らの欲望はまだ満たされていない。勃起しはじめた陰茎に彼女の手を導くと、彼女は身を屈めてそれを口に含むとする。

だが、そこで予想外の出来事が起きた。月光を蒼白く透かす明かり障子が開かれたのだ。

障子の向こうには縁側がある。そこに金の半月を背にササヤキさん、否

「お楽しみの最中、邪魔させてもらっわよ」  
ナゲキが傲然と立っていた。

彼女は縁側から僕の部屋に入ってくる。半分身を起こした全裸の

アカの前で止まる。

アカを見下して、ナゲキは言う。

「とんでもなく幼稚な交わりね。子供じゃないんだから、もう少しともできないの?」

あまりの発言にあっけにとられてしまった、僕は。

対するアカはと言うと、闇の中でもはっきりわかるほど、顔に朱を昇らせて立ち上がった。

「な、なによなによそのいい草! ナゲキ、いきなり出てきて私とツミの時間にけち付けるんじゃないわよ! 焼くわよ!」

唾を飛ばして怒鳴り散らすアカ。しかし、ナゲキはそれを聞かず、無関心そうに視線をそらしてこちらを見た。

科なこをつくってナゲキは言う。

「ねえ、ツミ。こんな小娘より私としない? 昨日の続きよ。

たつぷり愉しませてあげられるわよ」

服が脱ぎ捨てられる。生ぬるい閨房の空気に、彼女の素肌のおいがむんと漂いはじめる。

僕はその申し出を断る。

「できません。今夜はアカと過ごすと決めていますから。そして、これは次の夜も、その次の夜も、ずっと先までそうです。僕は、アカしか抱かない」

先程とは別の意味の朱みに顔を染めて、アカが顔を背ける。

ナゲキが一瞬だけ眉を顰める。しかし、次の瞬間には妖艶な笑みを見せていた。

「大した物ね。これだけ女から誘っているのに拒むなんて。でも

」

彼女の表情が哀しみに変わる。思わず、胸が締め付けられるほど切ない表情。

「ササヤキもね、あなたが好きなのよ。あなたに抱いて欲しいと思っている。時々、特に、月の昇る夜なんかに、あなたを想って自分を慰めているのよ」

ナゲキはもちろん演技で顔を曇らせたのだろうが、その実そこにあったのは彼女の偽りの表情でもなく、ササヤキさんの表情だった。だからこそ、見ていてこども胸が痛くなったのだろう。

その事実気付いた時、僕の心に一つの感情が生まれた。

「ナゲキさん。それ以上僕の家族を侮辱することは許しませんよ」

怒り、それが声にももる。ナゲキの顔が虚を突かれたそれになるけれど、それで引き下がる彼女ではない。

「初めて見たわ、あなたの怒ったところ。私は、ササヤキを通してではなくて、生の私としてあなたの怒りを見ることができたのよ！」

喜びに、ややうわずった声のナゲキ。だが、僕は喜ぶどころではない。

「謝って下さい。ササヤキさんとアカに」

少しの驚愕。しばしの後、彼女からの答えは、

「嫌よ。私は誰にも頭を下げないの。私は、誰よりも貴いのよ」

そして彼女は「囁く」。氷の風が、明かり障子を切り裂いて僕に飛んでくる。

月光の結界、それが彼女の威嚇を退けた。

「なに……？ はじめから、私が攻撃するのを予測してたの……」

愕然とした色の濃いナゲキの声に、僕は怒号で答える。

「そうだ、ナゲキ、あなたは僕の家族ではない。月の化身として命じる。眠れ、己が仮面と蔑みしその下で！」

一足でナゲキに肉薄し、月光の照らす縁側まで突き飛ばす。  
ナゲキの全身を包んだ月の光が、鎖となって彼女の四肢に絡まりつく。



「意識が重く……。ふふ、これで私を封印できると思ってるの？」

縁側の氷に滑って横倒れになるナゲキ。床面から、狂った光を瞳に宿して彼女は僕を見た。

「いいわ……。今夜はここまでにしましょう。で、いつか私達は会う。そして今度こそお互いの手を取り合うことになるわ。だって、あなたは希望に謳う者ではなく、絶望に嘆く者だもの！」

狂気を孕んだ高笑い。甲高い声で肺を空にしてから、彼女は瞼を降ろし眠った。

\*

数日が、何事もなく過ぎていった。

\*

季節が一巡することを一年と言い、その一年の区切りとされる終わりの月齢、最後の晦をとくに大晦日という。

僕の性欲は月齢に左右されるので、晦の日はとても穏やかな気持ちでいられる。年越しのこの瞬間、天戸あまののやねの宅の皆は祭りのような賑やかな祝いはしないので、僕はひとり静かな雪の原を歩いていた。ある程度のところまで来て、二つの事柄が僕の目の前に現れた。

一、足下にこの間の名残である骸が転がっていること。

二、目の前にササヤキさんが真っ白な振袖姿で立っていること。

「ササヤキさん……、どうしたんですか、こんな所で」

僕がそつと呼びかけるとササヤキさんが振り返った。彼女の顔にあるのは悲しみ。けれど、同時に彼女は微笑んでもいた。

「こんばんは、ツミ。あなたこそ、ここで何をしているの？」

「あ……、いえ、なんとなく……」

雪は白い緞帳のように降る。僕はササヤキさんまですぐに触れられる近さに歩み寄った。

僕らの立ち位置は、骸散らばる戦跡の中心だった。

「沢山、殺めてしまったのね……」

ササヤキさんの言葉は、涙のように雪の中に落ちる。

「あれはナゲキのやったことです。ササヤキさんがやったことではありません」

僕の言葉は、彼女の悲しい微笑を更に濃くしてしまう。

僕は、自分がとても愚かで無力に感じられた。

彼女のために何をする事ができるのだろう。少なくとも、今言ったことも、ナゲキを眠らせたことも、ササヤキさんのためになつてない。静寂に凍てついていく白い夜空の下、僕は口がきけなくなつたように押し黙ってしまう。

「ツミ、私のこと、好き？」

頷いて答える。すると、見上げていた彼女の顔がゆっくりと下がってきた。

唇が重なる。僕は、手を伸ばして彼女の頬を包み舌を伸ばして彼女の口内に入ろうとした。しかし、それはやんわりと拒まれた。

「ツミ、約束して」

口づけをやめた彼女が、表情を殺した顔で言った。

「私を抱いては駄目。あなたはア力を選んだのだから。私はア力

に対して誠実でいたい。わかってくれるわよね？」

……それは、僕の気持ちがどうと言うことに関係なく

「女と女の約束だから」彼女は断言した。

躊躇いつつも、僕はそれを承諾した。すると、彼女はこぼれるような笑みを見せ、それから後ろを向いた。

『新しき年の始めの初雪の 今日降る雪のいや重<sup>し</sup>け吉事<sup>よこと</sup>』

囁かれた歌は、空の高みから真つ白な六花を招いてた。降りしきる雪は、戦跡の屍を弔うように積もっていく。

「あけましておめでとう。ササヤキとナゲキから、これからよろしくね」

「はい、こちらこそ。ササヤキさん、ナゲキさん」

#### 4・2「戦跡に響く歌」（後書き）

少し詰め込みすぎたかな、と思います。やりたいことはやれましたけど、予告に逆らって三話にすれば良かったかもしれません。

ササヤキさんの七宝は瑠璃です。選んだのはただ単に、青いから、が理由。しかし、数あるパワーストーンでも屈指の力を持つらしいところは、術力の強いササヤキさんにあっていると思うのです。

最後の歌は万葉集にある大伴家持の歌らしいです。年始にあって今年も良いことありますように、みたいなことを願う歌です。年賀状にどうぞ。

## 間幕 「炎恨」

身体を貫く熱い痛みを意識を奪われ、ボクはまた夢を見る。

猫の身体で降り立った場所は、薄暗い路地裏。

ボクの視界の中、路地が交差する点を右から左へ炎の風が吹き抜けた。

続く絶叫。猫の鋭い嗅覚が、肉のただれるにおいを感受する。

「我らが月の御方……、力になれず、申し訳ありません……………」

事切れる間際の呟き。

月陰の路地から顔を覗かせると、月影の中赫い長い髪の女の人が燃えさしとなった人間を見下ろしていた。

「また一つ、あんたの手足をもいでやったわよ、ツミ……………」

本当なら嘲りを込めて言うべきその言葉を、まるでいとおしむように囁く女の人。

彼女は、アカだ。話しに聞くより歳をとっているように見える。凜とした、大人の女性っぽい雰囲気がある。

と、ボクがアカを見る反対の方角、路地の交差点の右から、別の黒く長い髪を三つ編みにした女の人が歩いてきた。

「紅鳥、<sup>いぶ</sup>片付いたようじゃな」

コオウ、と呼ばれたアカは、驚いたようにびくりと反応してその女の人の方に振り向いた。

三つ編みの女の方はボクの前で立ち止まり、肩をすくめて言う。

「何じゃその目つきは。      もしや、考え事をしようとしていた

ところを邪魔してしまったのかや？」

険のある目つきでしばらく女の人を見つめた後、アカは気まずそうに目を背けた。

「……何でもないわ、糸鶴イトカズ」

シヅルと呼ばれた三つ編みの人は、軽く唇をすばめ、そして自らの足元を見た。

「おや、こんな所に猫かいや。可愛いの、お主、こちらへ」

招かれるままにシヅルの腕の中へ。彼女の身体は、戦う者らしく少し剛い感じがした。

ほれ、とシヅルはアカに呼びかけた。

「紅鳥、そう難しい顔しとりやんで、少し妾と一緒に猫と和まんかや？ ほれほれ」

そう言って、シヅルはボクの前足を取ってアカに向かって振る。アカはそれを興味なさげに一瞥する

彼女の目が煌と金色に光った。

アカはシヅルの腕からボクをひったくり、肋骨を圧迫してボクの身体を壁に貼り付けた。

「魔物じゃったか？」 一拍おいてシヅルが問う。

「さあ、どうでしょうね。悪意はないみたいだけど、こいつからはあいつのにおいがする」

憎々しげな口調。シヅルはやれやれと言わんばかりに首を振り、言った。

「つまり、お主と同じにおいじゃな？ アカや」

激昂したアカが、ボクを投げ捨て、その動作の延長でシヅルに向

かつて火を投げつけた。

「　　また焼かれないわけ？」

火を避けたシヅルが答えた。

「いや、妾が悪かった。許しておくりゃ、紅烏」

それを聞き、満足そうに鼻を鳴らしてから、アカはボクの傍に立つ。ボクは叩き付けられた衝撃で朦朧としていた。

彼女の瞳は今もう金色ではない。珊瑚色の双眸をぼんやりと見上げ、ボクは動物的な感で悟った。

この人は、ご主人様<sup>ミミ</sup>を恨んでいる。

そして、愛している。

「私はいつを許さない。私はいつの世界を許さない。私はいつの思いを許さない。私はいつの痕跡すらも許さない」

ふと、思う。ボクは、今どこかの世界にいるご主人様の、何なのだろう、と。

「見てなさい。私は、世界を変えさせやしないから」

言葉と共に、ボクの小さな身体にめり込むアカの足。全身がバラバラになるような痛みの中、ボクは夢から覚めた。

\*

瞼を上げると、そこにサキの顔があった。

サキが男の人だと照明する薄い胸板。それが、両手・左足・右足と三本の杭につながれたボクの身体の上に覆い被さっている。

「ねえ、ボクってご主人様のおい ツミのおいがする?」

ボクからの突然の質問に、サキは眉をつり上げる。  
そして、女の人の声で答える。

「そう…… かもしれませんね。 もともとあなたの身体にはツミさんのにおいが染みついているでしょうし、そのにおいの消えきらない私<sup>わたくし</sup>があなたを犯していますものね」

その答えに、ボクは安心感に似た感覚を抱く。

でも、サキはボクとは別のことを思ったらしい。

「まだまだですわね。 もっと頑張りませんと」

「え、どういう……… あっ!」

サキはボクを汚したいんだと思う。 でも、それはどうしてなのだろう?

目的があるみたいだけど、ボクにはわからない。  
もしかしたら…… そう……、

…… みんな、ご主人様の影を振り払おうとしているのかもしれな



い。

## 間幕 「炎恨」(後書き)

現に出ると身体の成長がはじまるのですよ。アカも、キズオトも、普通に歳をとるようになります。

糸鶴しづるについてはそのうち明らかになることでしょう。今は、待っていて下さい。

この後はいよいよ新展開となります。気合い入れて書いていきますので、どうか最後までお聞き下さいませ。

## 5・1「常なる一日」

僕、ツミと自称する少年がここに来て、三回目の夏が来ようとしている。

ここに僕が言うのは あまのやね 天戸の宅 と名の付いた一軒の家のことである。純正の日本家屋であるこの家は、壁は土、柱は木、屋根は萱葺きといった天然仕様。コンクリートなどで作られる無機質な家とは違う、‘生物’なこの家は住んでいるだけで管理等に手間がかかる。しかし、それにさえ慣れてしまえば住み心地は抜群だ。

この家は、一辺の長さが徒歩にして一日半という正方形の世界の中心にある。小さな世界だ。僕らはこのような世界を夢と呼んでいる。まほろし 夢はここ以外にも無数にあるのだが、僕ら人間は原則的に他の夢に行くことはできない。向こうから来ることもない。来るとしたら、それは戦争の始まりである。多くの場合防衛戦となるその戦争で、僕らは来訪者を片端から殺戮し、こちらの夢に埋葬する。彼らの家には返さない、返せない。

夢と夢の戦争は、取りらかが滅ぶことで決着する。僕はこれまで五つの夢の滅亡に立ち会ってきた。殺した人の数は空しいから数えていないが、三桁にはなるだろう。

このような戦争は、何も考えていなければ人間を殺めているという感覚が薄くなりがちだ。何故なら、夢を越えてこちらに来る人間は、人間の姿と心を一時的に失う ネガイ さんはこれを『妖化』と言う。のでそうすると人間はただの化け物だし、化け物を殺しても何の感情も動かされないからだ。

しかし、僕はこういった夢の条理に不満を持ってはいない。まったく無いと言う訳でもないが。

その理由は、偏に僕が夢での生活に満足しているからである。幸福感を抱いているとすら言える。今、僕が送っている生活を守るためなら、涙もこぼせない戦争でもごく自然に受け入れられてしまう。

それ程までに、現うつでの生活は無味乾燥としていた。

というわけで、これより以下は僕が何よりも大切としている生活の一部を、今日一日の僕の過ごし方を通して述べてみようと思う。

\*

まずは起床。

時間は日の出より少し後でよい。炊事担当のササヤキさんとネガイさんはもつと早くから起きている。

縁側とは反対側の襖障子から廊下に出る。この廊下は、僕、アカ、ササヤキさん、キズオト、の四人の部屋の前を通っている。

廊下を挟んで、僕の部屋の向かいには大間がある。中には反物や薬草一式、調理器具やその他時々使うけど外にはおけない物が置いてある。

大間の襖を開こうとすると、背後、僕の部屋の隣の襖が開かれる。中から現れるは渋柿色の衣を着た、僕と同じくらいの背丈の 因みに僕の身長は百六十五センチメートルくらい 赫い長髪的女性。彼女こそ、我が愛しのアカである。

「おはよう、アカ。今日も良い天気になりそうだね」

「……そうね。おはよう、ツミ」

無然とした面持ちで答えるアカ。彼女は寝起きが悪い。いくらこちらが笑っていようと、朝一番から彼女が笑顔でいることは太陽が西から昇るに等しい事態だ。まあ、それはそれで可愛いところであるが。

よしよし。

知らず識らずにやけていた僕を横目に、アカが先に大間を通って

居間に行ってしまう。

居間に出て、顔を洗うために台所に行く。

台所では二人の女性が朝食の準備をしている。一人は短く青い髪に、目端が少したれた藍色の瞳の、僕より少し背の高いすらつとした全身に振袖をまとう女性。もう一人は、少し長い黒髪を首の後ろで束ねた、灰色の瞳と特徴的な褐色の肌の、黒い割烹着を着た女性。先に言った人がササヤキさんで、後の人はネガイさんという。ネガイさんはササヤキさんほど背は高くないが、僕よりちよつと背が高い。

「おはようございます。ササヤキさん、ネガイさん」

「おはよう、ツミ」やわらかい包容力のある声でササヤキさんが返す。

「お早う御座います、ツミ殿」低めの声のネガイさん。

「ご飯はもうできているからね。アカとツミが準備できたら出してあげるから」

母親のようなササヤキさんの言葉に、はいと僕は答える。台所の隅の水瓶で顔を洗い、次いで居間を通って廁に向かう。

廁は物置部屋の前を通る廊下の突き当たりにある。居間から廊下に入って、右手に物置部屋だ。

廁の管理は僕とアカの仕事だ。田畑の管理を受け持つアカが、肥料類の精製をかねて汲み取りを行う。僕は掃除。嫌いではないが、もちろん好きでもない。

そしてそこから出るや、右手になる物置部屋ではない部屋の襖障子が開かれる。中からは、また新たな女性が一人現れる。

僕の視線くらいにある彼女のうなじ。雪のような白い髪が流れる首筋は、驚くほど白くきめ細やかだ。

「おはよう、サキ。手を貸そうか？」

こちらに向けられるサキの双眸。どこか虚ろなその天色の目は、

物体の像を鮮明に捕らえることができず漠然とした光の明暗しか捉えられない。それでも、彼女は自由に動き回ることができるが、今のようにならぬところが黙って立っていれば気付くことができなかつたりする。

「まあ……おはようございます、ツミさん。そして、お氣遣いありがとうございます。できましたら、そのお優しさを夜の方にも恵んで下さいませ」

小鳥のさえずりのような、澄んだ高い声で、彼女はそのような意味深な提案をする。

「はは……駄目だね」

僕がそう言つて断ると、サキは、もう、と小さく頬を膨らませつつ同時に笑つた。僕が手を差し出すと、彼女はこの手を強く引いて腕全体に自分の身体を巻き付けた。

これはまずい。

振り払うわけにはいかないが、振り払うべきなのである。何故ならば

「二人とも、お互いすみやかに十歩以上離れなさい。さもなければ、まとめて焼くわよ」

居間では独占欲を赫赫と燃え上がらせたアカが待ちつけているからだ。

「おはよう、アカ。今日も朝からけちけちしていらつしやるのですね」

僕なら恐ろしくて口にできないような挑発を、涼しげに言つてしまふサキ。

「誰もけちけちしてないわよ！ 当然の権利よ！」

「ツミさんを独占することがですか？」

「そ……そうよ！ ツミは私の物なのっ！」

サキ、ありがとう。

あつたばかりの頃はなかなか恥ずかしがつていってくれなかった言葉を、アカは今大声で叫んでくれた。朝からこれを聞くことができた僕は、胸の中で密かに滂沱した。

サキも妙に楽しそうに僕から離れていく。僕は空いた手を、顔を真っ赤に染めたアカに差し出す。すると、彼女はさらに恥じらいながらこの手を取ろうとする。

だが、それは果たされない。

「ツミ、おはよ！　ね、一緒に朝ごはん食べよ？」

飛び出してきたのは、本日最後の起床者となったキズオトである。外見は十歳ほどとこの家の住人では一番若く、生きている時間はネガイさんとサキに次いで長く、六十年とか七十年と言う。

蜂蜜色の長い髪、身にまとった大きな袷。空色の瞳をくりくりと輝かせているところなど見てみると、彼女が六十年以上生きているとは俄に信じがたい。

そう思っている間にもキズオトはぐいぐいと僕の手を引っ張る。

アカの視線が背中を痛く突き刺している。

「キ、キズオト。引っ張らないで。そのね、僕はいつもどおりアカと――」

「だめ、ツミはあたしと食べるのー！」

こちらの言い分は一切無視。最後まで言わせても貰えない。そして、この状況をアカが黙ってみているわけがなかった。

「キズオト、悪ふざけは終わりにしてツミをこちらに寄越しなさい」

声を冷たくして勧告するアカ。キズオトはそれに舌を出して応じた。

「べえー、だ。いいじゃん、ちょっとくらい貸してくれたって」

「……このー！」

爆発寸前のア力。

みんな、そろいも揃ってどうして朝食前からそんなに元気な  
んだろう。

自分の空腹を感じ始めたその時、ササヤキさんとネガイさんが朝食を載せた膳を運んできた。

「はいはい、みんな。三秒以内に座らないと朝ご飯はないと思いなさいね」

ササヤキさんの警告に、みんながいそいそと囲炉裏を中心に車座になって座る。

僕は結局キズオトを右腕に付けたまま座った。左側に、不機嫌顔のア力が座る。

献立は、麦飯・油揚げのみそ汁・山菜の漬け物・川魚の天ぷら。

まだ春の終わりで山野にようやく食べ物が出てきたばかりだというのにこれだけの献立ができるのも、日々みんなで頑張っているからだ。そう思いつつ、いただきますと箸を取る。

食事を終えると、僕らはそれぞれの仕事に就くために準備を始める。起きた時に着ていた白い衣を脱ぎ、農作業用の七竈の文様が染め抜きされた枯葉色の作務衣を着る。

普段はこのようにア力と共に畑仕事を行うことにしている。はじめこの家に来た時は何でもできるようにあれこれ教わったけれど、今は誰かに呼ばれない限りア力と同じ仕事をする。

玄関でア力を待つ。しばしして、赤錆色の狩衣を着たア力が出てきた。狩衣はあまり畑仕事には向いていない気がするが、彼女はいつでも狩衣かそれに似たを着ている。



本日の作業は種まき、苗植え、それと灌漑整備。

種まきと苗植はほとんど終わっている。畝の乱れや水路の決壊を直すのが主となる。

農作業の極意は歩くことにある。

これはまったく僕個人の考え。しかし、田畑のすみずみを歩いて回り作業するのだから、おのずとこの様になるのではないだろうか。鋤や鍬を荷車に積んで、僕が運ぶ。ア力があちこちを見て、指さして僕に指示をする。

植える、直す、雑草を抜く。

加えて、僕らは農作に術を使う。土に適度な温度を与えたり、感想から退ける呪具をそこに設置するのだ。

それらはサキやササヤキさんが作ってくれる時もあるが、たいていはア力が作る。しかし、ア力が作る物はどこか雑なので、それを見付けて直すのも僕の仕事。

まあ、昼間の仕事はこんな物だ。当然の事ながら、季節ごとに仕事の内容は変わる。

それにしても、毎日太陽が沈むまで仕事をしているのに、どうしてこんなに仕事があるのだろう。

帰宅する。夕食の目玉料理は兎の香味野菜焼きだった。朝のようなおふざけを少しやった後、キズオトの語る兎を追いつめるという少々笑いつらい話を聞きながら食べる。

夕食の後は入浴。台所の奥、家の外に突き出た年季の入った浴槽を使う。水は昼間の内にササヤキさんが運んでくる。沸かすのはア力。入浴順はくじ引きで、今日は僕は三番目。ほどよくぬるくなってくるはずだが、異様に熱い。いつもの事だけど。これもア力の気持ちだと思いつつ、さっさと上がる。残り湯は洗濯に使うか、翌日ササヤキさんが捨ててくる。日照りの時は田に持って行って撒くこともある。

就寝までの一時、みんなで団欒する。今日はアカの新しいお酒が完成したのでそれを味見する。度数の高めな米酒だった。僕は今年ようやく二十歳なはずなので飲酒法に引つかからない。とは言っても身体は十七歳のままだが。

キズオトなど見た目で言う限り完全に飲酒法を無視している。しかし、さすが六十年以上生きたという彼女、この家ではネガイさんに次いで二番目に強い。因みにアカは三番、その下に、サキ、僕と続いて、ササヤキさんが一番弱いと言っている。

そして就寝。新しく満ち始めた四日月を眺めつつ、眠る前に物置から発掘した『桐一葉』を読む。何度読んでも内容が掴めない。

これが僕の一日、最後にアカが来ることが不定期であるのだが、まあこれは改めて述べる必要もないだろう。

## 5・1「常なる一日」（後書き）

ちよつと新展開の前の準備運動として人物紹介をし直してみました。  
あと、ツミ君の一日を書いてみたかったので。

アカの畑にも名前があるので、由来が思い出せなくなったので  
秘密にしておくことにしました。

第五幕は五話くらいになると思います。

少し緊張してます。ちゃんとできるかなあ、と。  
応援お願いします。

## 5・2「霧立つ場所での邂逅」

霧は神秘そのものであると思う。

否、神秘的なのは霧自体ではなく、霧に包まれた‘もの’であるかもしれない。それらは霧に包まれることで同時に何らかの神秘性をおびるようになる、そう僕は思うのだ。

ぼんやりと霞む世界の中、輪郭を妖しくしたものは得体の知れない何かに変異し、僕らには計り知れない何かをする。

霧の向こうから、未知なる物がやってくる。

吉兆か、凶兆か。

僕は拒むことを知らなかった。

＊

夢には異形と呼ばれる存在がいる。<sup>まぼろし</sup>

それは他の夢から侵入してきて変質した（妖化した）人間とは違う。戦争の際に討ちもらした人間が変質をさらに強くして異形化することもあるが、多くの異形は人間でもその他の生き物でもない。<sup>うつ</sup>現に比べて不完全な世界である夢の、その不完全な部分から滲み出してくる汚濁のようなもの、それが異形であるらしい。ネガイさんが言っていた。

異形は放置しておく周囲の環境、つまり草木や水・土を汚染し、また動物たちを無為に殺戮する。よって、見付けしだい排除するのがよい。

多くの場合、それらはキズオトによって為される。しかし、僕らもキズオトに任せきることはなく、見付けたら適時排除することになっている。

そんな訳で、今、僕は一体の異形を追って北の方角に走り続けている。

厄介な相手だった。足が速いのでこちらも追いかけるので精一杯。月が出ていれば月光を固着化して弓矢を作りそれで討つこともできるのだが、昼間では弓矢を出しても大した性能を出せない。

北へ北へと走るうちに、だんだん見通しが悪くなってきた。自分が霧に包まれはじめたことに気付く。

どうやら、まずい場所に近づいているみたいだ。

まもなくして八街川のほとりに着く。この向こうは いくぐい活杙の霧処と呼ばれる場所になる。

あましのやね天戸の宅の西を流れる八街川は、北東で向きを変え、家の北に回り込むように流れる。川は向きを変える時分岐して、その中州は常に深い霧を蓄えているのだ。

川を挟んだ中州の向こうは全く眺めがきかない。

ネガイさんの説明では、この霧立ち籠める場所では常に違う夢まぼろしへの扉が開いたままの状態らしい。そのため異形や妖化した人間がうようよしていると。さらに、キズオトの話では、この中の様子は意識して風で探らないとわからないらしい。

とにかく物騒な場所である。

ずいぶん家から離れてしまったと気付いた。そんなに無理して異形を追う必要もないだろうと思い、僕は来た道を引き返しはじめた。

二・三歩歩いた時、背後から救命を求める叫びが聞こえた。

高い声、女の子の声っぽいが、直感的に男の子の物だと判断。しかし、何故？

異形や妖化した人間の中にも声を出すものはいる。しかし、こち

らを欺くように発声能力を使うものはいなかった。あれが欺くものではないとしたら、正常な人間が一人霧の向こうにいることになる。如何にすべきだろうか。

少しの逡巡の後、僕は心の思うままに動くことにした。

腰に差した一振りの刀、あめのとこしたち天乃常立 がある限り何とかなるだろう。

活杙の霧処に入ったのはこれで三度目。

前の二度はササヤキさんの付き添いだった。僕らの医者にもなつてくれるササヤキさんが使う薬の原料となる 十力の金剛石 を採集しに来た時。おおよそ、この夢の中で危険と言われる場所はササヤキさんと一緒に行っている気がする。

それにしても霧が深い。

足下も悪い。ちゃんと戦えるか不安だ。

視覚に頼るのは止め、それ以外の感覚で要救助者とそれを狙う異形を捜す。

聞こえた。

逃げ惑う人間の足音、それを追う人間のものではない足音。

ぬかるみを蹴って走り出す。はきなれた‘運動靴’が泥を跳ね飛ばして身体を前に引つ張ってくれる。

着物を作るササヤキさんも、靴を作ることはできない。雪駄や下駄は何とか作れるが、それでは僕が慣れないだろうと言って、ササヤキさんは僕の現うつからもってきた運動靴に恒久使用の術をかけていつまでも運動靴を使えるようにしてくれた。同じように、アカも

スニーカーを履き続けている。

白い紗の向こう、小さな人影とそれを追う異形の影絵芝居。

「月光よ、ここに！」

昼間、その上太陽も見えない空の下では僕の力など微々たるものだ。しかし、これでも注意を惹き寄せることはできる。

手裏剣をイメージして異形へと月光を飛ばす。あれにとっては軽石ほどにも感じられないだろうが。

思惑通り、異形がこちらを向く。

距離はこちらにとって十歩。向こうにとっては未知数。向こうの姿は十分はつきり目視できるが、細部までは見えない。どういった移動器官をもっているのかわからないので、迂闊には突っ込めない。天乃常立を鞘ごと腰から抜いて、胸の高さに構える。

異形が飛びかかって来る。

軌道は直線。しかし、その直線の向かう先は僕の身体を中心より僅かに左にずれている。

かかったな。

ほんの少しだけ光の軌道を曲げ、異形には僕がややずれた位置に立っているように見せたのだ。

ちよつと足を右に動かすだけで容易に異形の突進を避けることができた。

そして、身体を右回転させ、すれ違う異形の背中に居合をたたき込む。

背後から切られた異形は、跳躍の勢いのまま霧の向こうに進みそのまま存在を停止した。

天乃常立を鞘に収める。そして周囲を見回し、ぬかるみに尻もちをついている小さな人影を見付ける。

その人影は、予想の通り十歳くらいの幼い少年。おびえた二つの目がこちらを見上げている。

新入りなのかな？

疑問があつたが、まず彼に話しかけてみることにする。

「大丈夫？ 安心して、ここにはもう君を狙う敵はいない。僕は君の味方だ。どこか怪我はあるかい？」

着物の裾に泥が付くが、僕はかまわずしゃがみ込んで彼と目の高さを合わせた。

赤いパーカーに、黒いジーンズ。現<sup>うつ</sup>なら何処にでもいそうなありふれた服装の少年。

「怪我は足かい？」

「……手」

差し出された右手は、手首が赤く腫れ上がっており、また切り裂かれたパーカーの肩口から血を流していた。

「これじゃ戦えなくてよ……。逃げるしかなかったんだ」

戦う？ この子は武器を持って戦うのだろうか。

確かに、利き手をやられていては武器を持つことはできないだろうが。

しかし、まずは彼との友好関係を気付くことが先決だと判断し、疑問は黙殺した。

「清らなる月光。青き御手。この者が傷を净めよ」

洗浄と殺菌の術。袖をまくった彼の腕全体から、水で洗うように汚れが落ちていく。

懷から包帯を取り出し傷に巻く。

「これでとりあえずは良し。……………えっと……………」

さて、何と切り出したものかな。

「僕の名前はツミ。ここから南西に少し歩いたところにある家に



暮らしている」　まずは自己紹介。

「君の名前は？　何処から来たの？」　なるべくそつと尋ねる。  
緑玉の双眸が、探るように僕の目をのぞきこむ。その視線は、受け止める。

「俺は、ヨミ。俺は……俺のいた場所は……」

ヨミ、と彼は名乗り、そして口を閉じてしまう。自らの居場所を答えられない様子に、僕はかつての自分の境遇を思った。

でも、名前は現のものではないよな。

そう思いつつも、ヨミの言葉を待ってみる。しかし、彼は瞳を泳がせて何も言わなくなった。

まあ、とりあえず敵ではないのだろうし。

僕は提案する。

「思い出せないんだよね？　いいよ、とりあえず僕と一緒に来て、ヨミ。みんなに会わせてあげる」

立ち上がって手を差し出す。だがヨミは僕の手を取らずに立ち上がり、その上、僕から三步ほど距離を取ってこちらに向き合った。

「俺……、あんたと一緒に行けない……」

まるで謝罪するかのように、彼は言う。

「俺は、他の夢から来た。俺は、この夢を滅ぼす者なんだ」

強い口調での告白に込められていたのは　別離。

## 5・2「霧立つ場所での邂逅」（後書き）

さて、解説。

活いくぐい杣イザナキは伊邪那岐・伊邪那美イザナミと同じくして生まれた神代七代の神様です。別天神の次にすごい神様ですね。それだけこの霧の場所がすごいと私は言いたいのです。

それと、『十力の金剛石』ですが、これは宮沢・賢治先生からちよつと拝借しました。私の宝石知識は大体あの童話から来てます。

### 5・3「秘かな戯れ」

明かり障子越しの月光。

開かれる襖障子。

やわらかな金の半月。

そつと近づく足音。

「ツミ。せつかく来てやったのにそっぽ向いているなんて大した度胸じゃない」

「っ！」

囁く声での咎めは、僕の全身を戦慄わななかせた。

「ご、ごめんアカ。……え、えつと、よく来てくれたね」

顔から一切の表情を消したアカ。

だめだ、何て言うべきなのかさっぱりわからない。

アカが膝をついて僕の横に座る。

僕は言葉を作ろうとする努力を放棄し、とりあえず彼女の頬に触れるために手を伸ばしてみる。

クロスカウンターで拳打が来た。

「苛つくわ」

殴られた左目の下を押さえている僕にそう言い捨て、彼女は自分の部屋に帰ってしまった。

女性は鋭いな。

僕が心を虚ろにして考え事をしていたことを、一目で見破ってしまったのだから。

サキなら、今の僕を見て何と思っただろう。

構わず僕に絡みついてきただろうか。否、サキにだって矜恃とい

う物はあるだろう。

あのあと、ヨミは頑として僕らの家に来ることを拒んだ。

理由は、自分が他の夢まぼろしから来た者だからと言う。自分がいれば、この夢を危機的な状況に陥れる。ヨミは、僕に自身を殺害するようにも言った。

そんなこと、できるわけないだろう。

確かに、夢と夢が混じり合っていれば、それらは互いに干渉し合い歪んでいく。それはかつてサキから聞いた。

ヨミは言う。これは戦争なのだ、と。自分はこの夢にとって侵入者以外の何者でもない。

僕には合点がいかなかった。そんなことは、すべて彼の思いこみだと思った。

ヨミの言う通りなら、そのうち何らかの異常現象が起きるだろう。保留、と言うことで僕は彼を説き伏せ、とりあえず『活杣の霧処』から連れ出し、天戸あましのやねの宅の北に広がる『鹿屋かやの原』の丘の影に食料と薪を手渡して置いてきた。

しかし、これからどうしたものか。

誰かと相談できないものかと思う。サキあたりなら、こういった相談にも適切に答えてくれそうな気がするが、そうしたことによって彼女に負い目を背負わせることにはなって欲しくない。

とりあえずは、明日もう一度ヨミと話し合う必要がある。

そのために、何らかの理由を付けて僕一人で行動する。

また、ア力を裏切ってしまうことになるな、と思う。すまないとは思うが、はっきり言って彼女こそ一番ヨミのことを知ってはいけない人間だ。

僕は彼女への謝罪を唱えながら眠りについた。

＊

翌朝、朝食の席で、討ちもらした異形がいるから、とみんなに告げた。無論、今日一日一人でいさせてもらうためだ。

各々反応の差こそあれ、全員一致で怪しんでいるようだった。しかし、サキが「お気を付けてくださいまし」と言うと、とりあえず表面上はみんな納得してくれた。

朝食が済むと、ア力はさっさと畑に行ってしまった。起きて会った時からア力は無表情を仮面のように顔に張り付けており、何を考えているのか全くわからなかった。

ササヤキさんはいつも通りだった。ア力が無表情なことに少し戸惑っていたようだったが。

サキとネガイさんも普段通り。この二人は「知っていた」、と僕は判断した。きっと、予めより。

キズオトは確実に知っているだろう。いつもながら朗らかな彼女だったが、どこかその様子は空々しかった。

ともあれ、僕は鹿屋の原を突っ切りヨミの下へ急ぎ足で向かう。

彼は、皮を剥いだ兎の一部を火で炙っていた。

「や、やあヨミ」

まだ低い太陽の下、少年の短い金髪が風に吹かれる。

「……………」

僕の呼びかけに応じこちらを向いたものの、その口から言葉が出ることはなかった。常磐色の双眸を丸くして僕を見上げている。

「昨日の夜はどうだった？ 寒くなかったかい？」

兎の肉片を炙る炎を挟んで、彼の前に座る。

赤いパーカーに灰色のジーンズ。現代風の彼の衣装は、懐かしさよりも奇妙さを僕に憶えさせる。

「……寒かった」

微かな声での返答。聞いたその声は、やはり少女のもののように愛らしい。

「まあ、そうだろうね。本当は森に連れて行ってあげたかったんだけど、あそこには、その……主がいるから」

主、と彼は繰り返し首をかしげる。

「そう、主。もっとも、彼女にとってこの夢の大地<sup>まほろし</sup>すべてが庭みたいなものなんだろうけど」

「……うかうかしてらんねえ、てことか」

すれっかれた口調での独り言。その姿を見て、僕は一つ思った。

「似ている……」

「……………」 「誰に？」

「うん、その主、キズオトにつて子に……………て、うわ！」

いつの間に来たのか、ヨミの背後にキズオトが立っていた。

やはり来たか。

彼女に害意はないようだった。単に、様子を見に来たという感じだが……。

こちらからは何も言わず、目を見て彼女の真意を探ろうとした。キズオトは、笑いの表情で目を細めた。

「ねえ、ツミ。この子 ヨミって言うのよね？ ヨミとあたし、

どこらへんが似ているの？」

何も含まれるところのない、ただの質問。

ヨミは首を曲げてキズオトを見上げている。彼の視線に込められ

ているのは、奇異。

「うん……ヨミは大人っぽいけど子供らしくて、キズオトは子供っぽいけど大人らしい、と思った……」

「子供じゃない！」

ユニゾンだった。どうやらこの二人は気が合うようだ。

二人の子供は、叫んでから啞然として互いの顔を見合わせた。サキに口を開いたのはキズオトだった。

「ふ、……ふん！ あたしは今年で六十八歳なのよ。ヨミ、あんたみたいな子供とは違うんだけど」

いや、そこで張り合わなくても……。

当然、ヨミは負けじと言い返す。

「そんなの、ただのババアってことじゃねえか。俺は三十二だ。

ほどよく大人なんだぞ」

なんだね、その理屈は。

「ただのオヤジじゃないの」

「なんだと！」

そして子犬のように取っ組み合う二人。

「ふ、二人とも止めなよ……」

こう言う時どうすべきか、兄弟のいなかった僕には見当も付かない。

そう言うわけで、僕は二人の子供が戯れているのをただ見てい

「じゃ、ヨミはここで暮らさない」

千五百の森の一角。周囲の木々に比べひととき大きな樹の根本を

指し示して、キズオトは言った。

「ここなら雨露は防げるし、木の枝は太いから眠りやすいし」  
さらに、キズオトは虚<sup>うつろ</sup>から何かの獣の毛皮を取り出し、

「あたしのとっておき、貸してあげる。これをかぶって寝なさい」  
あつけにとられた表情のまま、言われるままに毛皮を受け取るヨミ。  
三。

親切にされたことがないんだろうな。

僕はヨミに先んじて謝辞を述べることにした。

「ありがとう、キズオト。ヨミのために、こんなに色々してくれて」

「そんな……大したことじゃないよ、ツミ」

しおらしくしてみせるキズオト。

下心あり、かな。

そう勘繰って僕が不謹慎に笑っていると、隣ではヨミが暗い顔をしていた。

彼が重苦しい声でキズオトに問う。

「お前は、俺のこと何にも思わないのか……？」

その深刻な問いに、キズオトはけろりとした顔で答える。

「うーん、何にも思わない訳じゃないけど、あたしだってあんたみたいな人間にあったのは初めてだもん。あんたの言いたいことはわからないでもないけど、あたしは早とちりして動きたくない、そういうことよ」

ただね、と彼女はヨミに詰め寄る。

「あたしとツミ以外の人間、特に赫い髪の人間には近づかない方がよいよ。あの子、変なの見付けたらとりあえず焚き火にしようとするから」

酷い言われ様だな。

しかし、それも真実だ。無言で刻々首を縦に振るヨミにならって、



僕もつい頷いてしまう。

自分の言いたいことが伝わって満足したのか、明るい表情を見せるキズオト。だが、口ではああ言っても、やはり憂いに思っているように、その面差しには未だ影が差している。

こう言う時は……。

もじもじ始めたヨミの肩を叩き、彼の言葉が口から出るのを促す。

おずおずと、顔を背けながらもヨミは言った。

「わ、悪かったな……。色々迷惑かけちゃって……」

「ヨミ」

咎めるように、キズオトは彼の名を呼ぶ。う、と身を震わせたヨミに、キズオトが再び詰め寄った。

「こう言う時はね、ただ『ありがとう』と言いなさい。あんたは確かに迷惑だけど、謝ってどうにかなるものじゃないでしょ？」

お姉さん口調のキズオト。

厳しいな。

彼女はヨミに謝罪を許さなかったのだ。それは、彼の存在が僕らにとって‘悪’になって欲しくないからで、万が一彼が‘悪’となるのならその罪は謝ってどうにかなるものでもない、ということ。彼女が知っているからだろう。

ヨミが言う。

「……ありがとう」

にこ、とキズオトが笑った。

＊

その夜、僕はアカに隠し事の有無を訊かれた。  
無い、と答えると、彼女は嘘だと言った。そして、彼女は顔が火  
照って赤くなるまで酒を飲んで寝た。

自室で引かれはじめた弓張り月を眺めていると、サキが尋ねてき  
た。

僕らは何も会話しなかった。彼女はしばらく僕の横顔を眺めた後、  
壁に寄りかかって長座していた僕の股間に潜り込んだ。陰茎を刺激  
し勃起させ、それを口と手で摩擦して口内で射精させた。

サキは僕の精液をこぼすことなく飲み干し、そしてその口でこ  
う言った。

「彼の言うことは真実ですわよ」

いつになく冷淡なサキの顔。僕は今更ながら彼女のことが空恐ろ  
しく感じた。しかし、その怖れを顔に出すことができないほど、僕  
の心もまた彼女の面差しと同様に冷えきっていた。……まるで、死  
んでしまったかのように。

滅びの運命さだめをきかされたように。

僕は問うた。

「止めはしないんだね」

ええ、と彼女。口を引いて微笑するが、目は相変わらず何の感情  
も映していない。

「未来というものは、変えられるものと変えられないものがあり  
ます。そして、未来を変えられる人と変えられない人がいる。

この未来は変えられない。加えて、あなたは未来を変えられる人  
ではありません」

それは静かな、静かな宣告。

サキは顔を袖で隠した。次に顔を見せた時、サキは、本当に、笑っていた。

わたくし「私を抱いて下さるおつもりはありますか？」

冷えた心で僕は答えた

「無い」

残念そうな顔を見せて立ち上がる彼女。その彼女は、いつもおり、の彼女だった。

しかし、今の僕は、いつもどおり、にはなれそうにない。

去っていく彼女の背を見送った。

どうして僕は生きているのだろう。

運命に流されるままなら、他の誰かでも僕の代わりはできる。

僕が生きている必要などあるのだろうか？

### 5・3「秘かな戯れ」（後書き）

当初の予定ではヨミは女の子だったのです。そんなわけで、ここいらの話はヨミが浮気をして云々という話になるはずでした。しかし、いざ書く段になってヨミが本当は男の子な様な気がして、このような話になったのです。ちょっとした裏話。

長期休暇中なのでさくさく書いています。しかしその分文章が適当臭いような気がします。お気づきの点がありましたらコメント下さい。

## 5・4「赫い目に見つかる」

ヨミとは三日おきに会うことにした。

彼のことは公には秘密ということになっている。彼の世話はキズオトが受け持っている。とにかくアカには絶対に知られないようにしている。

そのアカと言えば、僕がこそしていることに疑問を持ち何とか突き止めようとしているらしい。

ヨミをかくまって一週間ほど経ったある日、夕食の席でアカが言った。

「最近、作物の生長が良くないわ」

「あっ！」

キズオトがお碗を取り落とし、中身を床に撒いていた。

「あら……キズオト。どうしたの？　いつもはこんなこと無いのに……」

にへらとキズオトが笑って答える。

「う、うん、ちよつと失敗しちゃった」

それは僕から見ても無理のある笑顔だった。……キズオトは隠し事が得意な女の子ではなかったのだ。

アカはキズオトのことを直視してはいなかったが、横目でしっかりと観察していた。

アカの注意をそらすために、僕はアカに質問することにした。

「アカ、他には変わったことはあったかい？」

ぎらりと光る赫い瞳が僕を見る。あまりの視線の鋭さに心臓が縮み上がる思いだったが、何とか目を反らさずに堪えた。

「雨が冷たい。まるで氷のように。……まあ、外にいる人ならこ

れくらいは知っているでしょうけどね」

そのとおりだよ、ア力。

囲炉裏の周りから会話が無くなり、壁を通して雨垂れの囁きが聞こえた。

微かで軽いはずのその音が、やけに重々しく聞こえた。

＊＊

時は一昨日に戻る。

森の中の少し開けた場所、花々が春を謳う青い空の下で二人の子供が草相撲をして遊んでいた。

「より、今度こそ。む、くそお！」

「もう、あきらめなよ。あたしはこの森と六十年近く付き合っているのよ。この森にある草木についてなら、大体のことはわかってるんだから」

そんな会話をしながら、ヨミとキズオトは、友達のように、姉弟のように遊んでいた。

無邪気だな。

キズオトもヨミも、きつと互いに自分と似ている遊び相手を探していたのだろう。二人は何年生きてても子供らしさを失わない人間だった。しかし、自らの生きる環境故に彼らはその子供らしさを押さえて生きてきたのだ。はじめキズオトが現れた時にはどうなるものかと肝を冷やしたが、今この光景を見ていれば、万事良かったんじゃないのかと思う。

ぼつり、と木の葉を打つ音が聞こえた。

雨が降ってきた。僕ら三人は空の見えるこの場所を諦め、ヨミの

隠れ家である大樹の下へ行った。

降る水は冷たかった。樹の根に座ると、そのぬくもりにほっとした。

ふと、ヨミを見る。彼はいつになく暗く沈んだ顔をしていた。

「どうしたの、ヨミ？」

緑黴のような、陰鬱な瞳の色。

「なあ……俺の冒険譚、聞きたくねえか？」

「冒険譚」。額面通りなら面白いものかもしれないが、声を低くした彼が語るものなど、決して愉快なものではないだろう。

でも、聞くべきなんだろうな。

僕がこの旨を伝えると、彼は静かに話し始めた。

「初めて俺が来た夢には、<sup>まぼろし</sup>じいさんと、その人を長とする十数人の人達が住んでいた。その人達は、俺を見て新しい仲間だと喜び、同時にすごく申し訳なさそうな顔をした。

しばらくその人達と暮らして、その理由がわかった。俺の来た時からその夢は、空が灰色で、山ははげ上がり、川の水は黒ずみ、草も薄い黄色をして地面に伏していた。あの夢は 終わりにかけていた」

「終わりにかけていた？」

「あんた、もしかして夢に寿命があることを知らねえのか……？  
そうか、なら憶えておきなよ。夢はな、戦争で勝ち続けていても五十年くらいで終わるんだよ」

「え？ でも、この夢は七十年くらい続いているんじゃない。キズオト、そうだよね？」

「……………」



「俺の話が続けるぜ。」

それで、俺が初めて暮らした夢は、俺が着いて三週間くらいで壊れはじめた。

夢の崩壊は大地の果てから、空の彼方からはじまった。地面は砂の板でできていたみたいに沈んで落ちていって、灰色の空は見ていて目の痛くなる黒い闇に塗りつぶされていった。

夢に住んでいた人達は、それぞれ自分で死んだり、外に立って夢と一緒に消えていくのを待っていたりしていた。俺は、みんなの長だったじいさんと一緒にいた。

怖いとは思わなかった。俺はじいさんの昔話を聞きながら、自分が夢ごと消えるのを待っていた。

でも、俺が消えることはなかった。

気が付いたら、俺は地べたで寝ていた。ぼんやりしていると、見知らぬ誰かが来て俺を新しい仲間として受け入れてくれた。……そこは別の夢だったんだ」

「二つ目の夢には色があった。眩しい太陽の下、世界に色があるのはちよつと不思議だった。空は青く、草木は緑で、残雪は白かった。」

でも、それは二・三日で見えなくなった。空が灰色になってから三日後に、降り続けた紫色の雨の下でその夢は泥のように溶けて消えた」

「それから、三つ目の夢にいた。そこは生まれたての夢だったらしく、暮らしていた三人の人もみんなそこに来たばかりだと言っていた。俺はその人達と共に、武器の使い方や、外で獲物を捕まえる方法とかを学んだ。そうして、一年を過ごし、ある日を境に夜が終わらなくなつて、その夢は闇に沈んでいった。」

そんなふうにして、俺は沢山の夢を渡り歩いた」

我が耳を疑う話。ヨミの話はそれそのものだった。

彼が最後の言葉を発した後しばしの間、僕は何も言うことができなくなっていた。

キズオトもその様だった。喉を詰まらせたような表情のまま、ぴくりともしなかった。

ヨミを見る。彼は顔を蒼くし、組んだ指は白くなっていた。緑の瞳には強い光があったが、どう見てもそれは無理をしている子供の表情だった。

だから、僕は彼を抱きしめた。

「……ツミ」

彼を腕に抱くという動作をしても、身体から声を発することはできなかった。冷たい彼の身体を温めるように、腕を回すことしかできなかった。

「……男に抱きしめられても、嬉しくない」  
照れた彼の声。

男の子じゃなかったら、このまま情を通じていたかもしれない。。

なあ、と彼が呼びかけてくる。発声は、触れあった身体を振動として伝わってきた。

「兄ちゃんのこと、兄ちゃっ！」

……もう、呼んでいるじゃないか。

胸の中に暖かい気持ちが始いてくるのを感じる。

「いいよ。僕の場合は、好きに呼ぶと良い」

そして、僕は言う。

「大丈夫。きっと何も起きない。起きても、僕が何とかするから……」

なんの根拠もない言葉。それでも、彼は僕の腕の中で頷いてくれた。

「ありがとう……兄ちゃん」

「ずるい」

はつとして振り返ると、キズオトが恨めしそうにこちらを見ていた。

「あたしも……あたしもツミのこと、お兄ちゃん、て呼ぶー！」

「はは……。キズオト、おいで」

片腕をひろげると、キズオトが躊躇わず飛び込んできた。

「お兄ちゃん……。大好き」

そうして、雨が降り止んで斜陽が木々の間に差し込んでくるまで、僕らはそこにいた。

こんな時がいつまでも続けばよいと願いながら。

＊＊

そして三日が経ち、アカが現状を告げた次の朝。

冷たい雨の降る中　千五百の森　まで赴き、ヨミの住処とする大樹を目指す。

ヨミは樹の根に腰掛け僕を待っていた。彼の頭上の枝に、心ここに在らずといった様子のキズオトがいた。

「きよ、今日も雨だね。まったく、嫌になっちゃうよね」  
そうあいさつしてヨミの前に座る。

彼は悲しげに笑ってた。今まで見たことのない彼の表情。

「兄ちゃん。俺、一つ考えたんだ」

少年の言葉に、頭上の少女が反応した。

二メートル程の高さから飛び降りたキズオトは、怯えたような頬笑みを僕に見せながら言った。

「あ、あたし、お昼ご飯探してくるねっ」

逃げ出すようにかけていく彼女。

ヨミはそんな彼女の様子に表情を変えることなく、やがて軽やかでどこか慌てたような足音が聞こえなくなってから話し始めた。

「俺考えたんだ……」。

自分の存在が誰かにとって害悪となると思った時、その人に自分を殺してくれと言うのはずるいことなんじゃないかって。そう言うって事は、自分とその人の絆を確かめたいからって事なんだよね。でも、俺はそう言うずるい人間は嫌いだから」

そして一息。次の彼の言葉を、僕の聴覚は周囲のすべての音を聴こえなくして感受した。

「俺、死ぬ時は兄ちゃんの手を借りないで死ぬから」

彼は、時たま僕から話す能力を奪う。

また彼を抱きしめようと思った。だが、彼の言葉に秘められた魔法の力は、僕に身じろぎすることすら禁止していた。石になった僕の背後で、声が聞こえた。

「あ、アカ。こんな所に来るなんて、め、珍しいね」

「ちよつと、探し物を、ね」

「探し物!? もしかしてツミのことかな? それだったら向こ

」

「退きなさい……!」

何かを叩く湿った音と、少女の短い悲鳴。

聴きまごう事のない愛しい女性の足音。それは、僕のすぐ後ろで止まる。

「面白い動物を飼っていたみたいね。てつきり私は、あんたの浮気相手は同じ年の女の子かと思っていたわ」

ヨミが立ち上がった。

「あんたがアカか? 兄ちゃんとキズオトから、ずいぶんおつかない奴だつて聞いたぜ。……本当なのか?」

「……本当よ」

くく、とほくそ笑むアカ。まるで、罪人を裁くことを至福とする処刑人のように。恐怖を振りまく赫い女の前で、ヨミは足を震わせながらも必死に彼女と向き合っていた。

アカが僕の方を向く。

「それで……ツミ? この子供のおかげでこの夢は歪み始めているんだけど、あなたはどうしてくれるのかしら。この子供を殺す? それとも……私を殺す?」

そんな選択、一つしかないじゃないか。

この夢と自身の存続のために、幾多の夢を滅ぼし続けた僕が、許

されることなど一つしかない。

腰の刀、あめのとこたち天乃常立を握り僕は立ち上がる。

「僕は！」

「だめだ兄ちゃん！」

ヨミの叫びが僕の言葉を遮った。

彼を見下ろすと、涙に輝く緑玉の双眸が僕を見上げていた。エメラルド

「これまでありがとう、兄ちゃん。俺は、いままで死ぬのが怖くて沢山の人を殺して生きてきた。でも、もうそれは止めにしたいんだ」

その何処が悪いんだ。

ヨミはア力をひたと見据える。

そして、宣戦した。

「ア力。俺の名前はヨミ、夜を導くもの。俺は、あんたに決闘を申し込む」

陰惨に口を歪ませた女が答える。

「良い度胸だわ。上等よ、その罪ごと焼き尽くしてあげる」

#### 5・4「赫い目に見つかる」（後書き）

弟萌えです。

BLは趣味ではないので裸になってどうこうと言うシーンはありませんが、それ抜きの関係だったら大いに書いてみたいです。

それにしても、やはりツミってへたれですよね……。

どうしてこうなりましたかね。話の流れ的に逆らえないものがあつたんですよ。

第五幕は次で終わりなはずですよ。間幕を挟んで、第六幕には言ったらそれでこの小説はお終いです。しかし、次回作があったりするんですよ。

## 5・5「太陽の決闘」

迦具土かぐつちの漠。

そこは水なき地、雨なき沙漠。

乾いた大地、熱い風、翳りない太陽。

砂塵に煙って白く輝く空の下、僕は立つ。

「ずいぶん歩かされたからどんな場所に連れて行かれるのかと思つたら、こんな殺風景な場所かよ。色気のねえあんたらしいぜ」

不敵な笑みを浮かべたヨミが言う。焼けつく日差しの下、彼の金髪は一層の輝きを放っている。

「その強がり、いつまで持つかしらね。……この私をここまで苛つかせてくれた代償は高くつくわよ。じっくり焼き肉にしてあげる」怒りに染まったアカの瞳は、真紅といえるほどの色彩となっていた。その瞳を見ただけで、僕は全身が強張るのを感じた。

今のアカは、幾つかもっている狩衣の中でもとっておきの物を着用していた。血液と同じ色に染められた下地に、金糸で蓮を銀糸で彼岸花を密に刺繍した、絢爛たる狩衣だ。

力が入れられているのは服だけではない。耳には、紅玉髓を加工した耳飾りを。腰には、大粒の燃えるような紅玉を中心に配した玉飾りを付けている。これらすべては、アカの炎の術力を高めるための装備だ。

そして、この場所。この夢まぼろしの中で最も火の気が集う迦具土の漠の中心部。

彼女は完膚無きまでにヨミを潰すつもりなのだ。そのために揃えられる条件はすべて揃えられている。

すべては、僕の咎か。



自分を裏切った僕を断罪するために、アカはヨミを殺すのだ。そうでなければ、彼女はここまでしないだろう。

だが、僕にもできることが一つあった。

「この決闘の見極め役は僕、それで良いんだよね？」

二人の闘士が僕を興味なさそうに見た。

「そうだ、兄ちゃん……いや、ツミ。手出しはしないでくれよ」

「わかっていると思うけど、この決闘はどちらかの心臓が止まるまで続くのよ」

そう言った後、瞬きしたアカの口元に歪んだ笑みが浮かんだ。

「ねえ、ツミ。あんたはどっちを応援しているの？」

底意地の悪い質問。しかし、僕にそんなことを思う権利はない。

「僕は……アカを応援している」

これは本心だ。

質問が重ねられることはなかった。

二人は改めて向き合った。

これで、僕は自分の口で決闘に手を出さないことを誓った。しかし、見極め役となったことで、僕にもある一つの行為が可能となる。

それは、戦闘不能となった者を殺すこと。

アカはそんなこと認めはしないだろう。

また、ヨミとの約束も反故としてしまう。

けれど、だれに何と言われようと僕はヨミの虐殺は阻止しよう。

これを、僕の償いとするために。

\*

「始め！」

＊

両者の距離は二十歩ほど。ヨミが近接武器のみを使うのなら、何歩も近寄らなければ攻撃はできない。

ア力は両手に火を灯して待ち受ける。白みを帯びた炎は、鉄すら溶かすだろう。

ゆっくりと、静かにヨミが前進する。

「  
コウダンウ  
紅蛇走」

叩き付けられた左の炎が、地面を這ってヨミを下方から襲う。

ヨミは炎を紙一重でかわした。そして、その動作のまま強く踏み込んで矢のようにア力に跳びかかる。

向かい撃つア力の右手。

「火雷撃！」

砲弾のような火玉。

それは……切り裂かれる。

「何！」

「甘いよ」

疾風の如きヨミの短剣が、ア力の右の横腹を切りつける。

「ああ！」

赤い狩衣が重ねて赤く染まっていく。

傷を負った右横腹を左手で押さえてア力はヨミと向き合う。驚きを隠せないア力の表情に、ヨミは冷笑をもって答える。

「ここの夢まぼろしの連中はみんな術を使えるみたいだけど、それは珍しいことなんだよ。普通は、夢に來たからって誰もが術を使えるようになるわけじゃない。だから、みんな武術を習得する。この俺みたいにな！」

やおらヨミが駆け出す。ア力は反射的に火の玉を撃つが、当たらない。

突き出されたアカの腕の下から、ヨミの斬撃が放たれる。

「く！」

アカの右手首から血が噴き出す。止血しなければとおからず身体に異常を及ぼす出血量だ。

だがアカに手当をしている時間はない。狼のように俊敏に動くヨミは、アカを中心として円に走り次の攻撃を狙っている。

「要は近づけなきゃ良いんでしょ！　蓮華紅陣！」  
レンカコウジン

剣印を結んだ右手が、血を撒き散らしながら天に振り上げられる。彼女の足下から爆発するように花開く炎の蓮花。

草木の類なら一瞬にして焼き尽くされる灼熱の中、ヨミは駆け抜ける。

「勘違いするなよ！　力は弱いけど、防御結界くらい張れるんだぜ！」

突き出された短剣の切っ先は、まっすぐアカの心臓を狙う。

必死に身を捻って回避するアカ。心臓は護ったが、かわりに斬られた脇の下から大量の血がこぼれ落ちた。

多くの出血故か、アカが地に膝をついた。

「意外にあっけないもんだな。俺は、あんたが綺麗さっぱり俺を殺してくれるもんだと期待してたんだがな」

彼女の血を吸った飾り気のない鉄の短剣をヨミが舐める。それを見たアカは、荒い息をしながら、ぎり、と歯を食いしばった。

「殺してやるわよ。この私の最強の火炎で！」

そうか、とヨミは言い、短剣の血を服で拭って鞘に収めた。

「なら、次で終わりにしようか」

豪と風が動きだす。乾いて熱い風がア力の下に集い始める。まるで、ふいごで炎を煽ぐように。

ア力は両手の平をあわせてヨミに突き出す。右手首から流れる血は、渴いた砂地に次々と吸われていく。

コウテイバクサイショウ  
「紅帝爆裁掌！！」

放たれる火炎の奔流。幅二メートル近くある火炎流はヨミを直線的に狙う。

ヨミはその射線から横方向に逃げた。

「逃がさないわよ！」

合わされた両手が左右に振り切られる。

それは切り離すための動作。火炎の流れは、龍となってヨミを追尾し始める。

沙漠の砂を半熔解させるほどの熱。即席結界くらいではあれを防ぐことはできない。

ヨミの選ぶべき道は一つ。龍に追いつかれる前に、ア力の喉笛を掻き斬ること。

はたして彼はその通りにした。背後に龍をつかせたまま、電光の如く勢いでア力の横側から襲いかかる。

術に集中して無防備なア力。

龍が身を躍らせヨミを捕らえようとした瞬間、彼は地面を蹴り飛び上がった。

がら空きの彼女の喉笛と、鉄の軌道が交差した。

たん、という軽い着地の音。

赤い飛沫がアカの喉元から噴き出した。

膝をつく彼女。その、去<sup>サリ</sup>という音と同じくして火炎の龍が霧散した。

上半身を棒のように伸ばし、光をなくした瞳で太陽を仰ぎ見ている。伸ばされた喉は、壊れた蛇口のように血液を流していた。

ヨミがこちらを向いた。翳りのない、穏やかな微笑すら浮かべて。

「悪いな……兄ちゃん。この人のこと、好きだったんだろ？」

そして、血まみれの短剣の切っ先を己の首筋に当てる。

「じゃあ、さよならだ兄ちゃん。兄ちゃんは生き残ったんだから、最後まで生きるんだぜ」

く、と短剣を握る手に力が込められる。

砂塵が吹かれる音が聞こえる静かな一瞬。

咆吼が響き渡った。

## 5・5「太陽の決闘」（後書き）

太陽の決闘と言うと、テイルズシリーズの術『デュエル・ザ・サン』を連想します。

久しぶりに真面目に戦闘シーンを書いたので、どうやったもんかなと考え考えやりました。

予告を裏切って二話に分けました。ちょっと次が大切なシーンだと勝手に思ったので……。

と言うわけで、次回最終ラウンドです。

## 5・6「金色火刑」

太陽は空の中心に坐していた。

アカは、膝下を地面につけ全身を「の」字に伸ばし、その顔は天上に向けられていた。

光のない瞳。燦然たる日の光が、眼球の表面で反射している。  
ぽっかりと開かれた口。

「おおおおおおああああおおおお

」！

気管を切られた彼女が叫ぶことはできない。その叫びは、彼女の全身から発せられていた。

叫びと言うよりはあまりに本能的な、咆吼とも言うべき物。  
怒り、憤り、そんなものが咆吼の意味。  
それから、呼びかけ。

我に力を与えよ。

我にすべてを焼き尽くす肅正の炎を与えよ。

応えるように、天空から一条の光が落ちてくる。  
アカの身体を飲み込む光の柱。観察者の視界は白く塗りつぶされる。

そして、大地から燈トウと静かに炎がわき上がった。

広域に渡り出現する炎の海。  
その色は 金色。こんじき



『な、何だよこれ……。俺の身体、崩れていくぞ……』

金色の炎に包まれたヨミが呆然と独りごちた。

炎は彼を包んだ瞬間、彼の全身を一瞬で灰の柱としていた。よつて、彼は肉声を発することはなく、この言葉は彼の遺思の囁きだ。

『桁違いじゃねえか。どうしてこんな人間がいるんだよ？』

彼ははたして自らの死を理解しているのだろうか？ ……もちろん、彼は自身が死んだことを識っていた。

『あばよ……兄ちゃん。元気でやっていてくれよ』

これを最期に、彼の意識は炎に消えていった。

赫い長い髪が、昇る気流にはためいている。

髪の主は成人を迎えたばかりの女。衣は炎に焼かれ、若々しい裸体を包むのはその炎そのものだった。

金色の炎は彼女を焼かない。それどころか、傷ついた彼女の肉体を癒し、失われた血液を補填さえする。火炎は、乳白の彼女の肌を優しく包む羽毛だった。

女の名は、ア力。普段の彼女の知る者が目にする赤蛋白石フアイヤオパールの瞳は、今は黄金の輝きを放っていた。

＊＊

僕ミミが我に返ったとき、時刻は太陽が西に傾きはじめた頃だった。どうやら、時間の認識が一時間ほどずれている気がする。

この目に映るのは、白い空に眩しい太陽。流刑の小さい砂粒で覆われた地上には、一糸纏わぬ姿で立ちつくすア力。

珊瑚色の双眸を虚空に据え、彼女は何も見えていない。

僕が足音を立てて近寄ると、ゆっくりとこちらに向き直った。

「帰ろうか」

「ええ……疲れたわ」

そう言っただけで彼女は目を閉じた。力をなくし寄りかかってくる程良い重さを持つ身体を背に負い、僕は家路についた。

僕らが去れば、ここにはもう誰もいない。ヨミという少年の姿をした、僕より年上だった男性は、その存在を痕跡も残さず消していた。

これも戦争か。

家に帰れば、またいつもの日々に戻る。

戻れるのだろう。ヨミを失った今、日常まで僕は失いたくなくなかった。

戻れるはずだ。それを妨げる理由もない。

戻れるはずだった。

## 5・6「金色火刑」（後書き）

短かったので一日で投稿です。

ヨミは、大人だったのでしょいか子供だったのでしょいか。私は子供だったと思っっています。

架空のこととはいえ、子供の命が奪われてしまうのは悲しいことです。『これも戦争か』というツミの言うことは尤もですが、現実

私達の世界からはそう言うことが一日でも早く無くなればいいと思います。

と、脈絡もなく平和主義な話を一つ。

## 間幕 「水鏡」

ここに来てから幾つの夜が過ぎていったのだろう。

長い間の戒めから解き放たれて、とても久しぶりにボクは自分の意志で歩くことを許された。

鈍色の空の下、川に行つて身体を洗う。

川の水は、命のにおいが全くなかった。

ただガラスのように澄んだ水。真つ黒な水底。何も映さない。

何も ……

…… あれ？ 何か映つてる。

『嘘でしょ？ そんな話』

『嘘じゃないわ、ササヤキ。私の話した通り、ツミとキズオトはこの夢を滅<sup>まほろし</sup>ぼしかけたのよ。今からだって、水鏡を使えば確かめられることだわ』

声が聞こえて、水面に一人の女の人の顔がうかびあがる。青い髪に、藍の瞳。ちょっと長い顔。水が揺れるたびに、その印象が、妖艶、と、‘柔和’の相容れない二つの間で入れ替わる。

『…… わかつたわ、ネガイを信じる。それで、二人は今何をして  
いるの？』

『ツミはアカと一緒にその侵入者の少年を連れて 迦具土の漠<sup>やそま</sup>に向かつているわ。キズオトは泣きながら前後不覚に走つて 八十禍<sup>がっ</sup>の沼に引き寄せられてる』

『八十禍に……？ なら迎えに行つてあげないと』

『ねえ、ササヤキ。あなたはそのまま二人の過ちを許して良

いの？』

同じ声同士の会話に間があった。

『許して……何が悪いの？ 仕方がないことじゃないの。私だって、妖化していない少年を見て、敵と判断できないかもしれないんだから』

『今問題なのは、この夢を滅<sup>まほろし</sup>ぼしかけた者に罰を与えるか否かということ。あなただって、過ちを犯した者には罰を与えるべきだと思うでしょ？ 自分の身に置き換えて考える必要はないのよ』

『それは間違っているわ！』

『いいえ、間違っていないわ。どうしても言うなら、罪と罰は人の感情とは無縁の場所から下される物だからよ』

ナゲキの言葉に、ササヤキはとっさに言い返すことができなかった。そうしてササヤキが口をつぐんでいる間に、ナゲキが言った。

『ササヤキ、あなたはこの夢が滅<sup>まほろし</sup>んでしまっても良いと言うの？』

水面が大きく揺れて、見えていた顔が消えた。声も聞こえなくなった。

気がつくと、いつからいたのかボクの傍にサキが立っていた。

「ツミさんがナゲキさんを戒めて以来、ササヤキさんは自力でナゲキさんを抑え込められるようになっていました。しかしこの時、心に迷いを抱いてしまったササヤキさんはその隙を突かれ、ナゲキさんに身体の主導権を奪われてしまいましたの。ナゲキさんは、悲しみに我を失ったキズオトちゃんを殺すために動き出しました」

（あたし……何か間違っていたのかな？ ただ、ヨミと仲良くなりたっただけなのに、どうしてもこんなことになっちゃったの？ あたしは、風を操って人を殺すことしかできない。誰とも仲良くない。誰の思いも得ることができない……！）

風に乗って届いた、問い掛けと悲しみの嘆き。きつと、キズオトの遺した物なんだろう。

サキはボクを見て、にっこりした。

「わたくし私の昔話も、もうすぐ終わりです。さあ、帰って続きを話させて下さいまし」

すべてを聞いたら、ボクは何をさせられるのだろう。

ちらりと浮かんだ疑問を心に留めつつ、誘われるままにボクはサキの後に続いて廃墟へと戻り始めた。

## 間幕 「水鏡」(後書き)

サキの言う通り、この小説もそろそろ終わりですね。

次回はキズオトとナゲキの戦闘。まあ、なるべく派手にやりたいところ。

その後はまとめのために地味に話をして終わりですかね。盛り上がり、て何だろうと考える昨今です。



## 6・0「風の舞／氷の囁き」

現の広き世界の中で最も穢れている場は何処、と問われて聴者諸君は何と答えるだろうか。

答えは「何処も此処も穢れきっている」ではないだろうか。

その真意はここで語らないことにして、ツミと名乗る男と五人の女が暮らす夢には、『穢れ』と呼ぶにふさわしい場がある。

彼らはそこを《八十禍の沼》と呼ぶ。

何故、その様な場があるのか。

それは、夢は狭き世界だからだ。去ぬべき穢れどもは、集まるべき場を容易く見付けられる故に。

そして、穢れはさらなる穢れを呼ぶ。

今、キズオトと名乗る半世紀以上の時を生きた少女の姿をした女が、その場へと引き寄せられている。

一方、この女を追う二つの名と二つの心を持つ女も一人。

腐臭漂う中、立ちつくすキズオト。自分の住む夢の北東の果てにある、忌まわしき沼に踏入りその中心に来てようやく彼女は自分がいる場を悟った。

「あ、あたしどうしてこんなところに……」  
言ってから、彼女は自嘲した。

「そうだよね……。自分の気持ちだけに走ってみんなを殺しかけたあたしには、ここがお似合いよね」

黒灰の天に胆汁色の沼地。足場となるのは枯れた草と何かの骨。キズオトもまた、ぶよぶよとした腑のような膜の上に立っていた。

「あたし……これからどうしたらいいのかな……」

「死ねばいいのよ」

彼女が普段聞き慣れた声が、審判を下す。

キズオトは声の方に振り返りながら言う。

「ササヤキ ううん、ナゲキ？」

沼を凍らせ、その上に傲然と立つ女。ナゲキは、泥染めを蒼く染め抜いた奇妙な色彩の振袖を身に着けていた。

氷をひろげながら、キズオトに歩み寄る。

「死んで償いなさいよ、キズオト。あんたがいなくても、ツミと私がいればこの夢は守れるのよ」  
まほう

薄笑いして放たれる、冷たい言葉。キズオトは顔を蒼くして後退りした。

「そんな……死ねなんて、あたし……」

「自分の過ちを償う気もないってわけ？ ふざけないでよ」

ナゲキの口が小さく動く。

「囁き」に応え、キズオトの足下で小さな黒い氷が作られる。氷は矢となつて彼女を狙う。

「いや！」

キズオトを護るように風が動き、小さな矢が吹き散らされる。

身体を抱いて震えるキズオト。

そんな彼女の様子を、冷然と見つめるナゲキ。

「死ぬのが怖いのか？ どうしてか、教えて頂戴」

ナゲキはさも愉快そうに尋ねる。

「だって……死んだらツミに会えなくなるもの！」身を切るような叫び。

けれども、ナゲキはそれを笑い飛ばした。その笑い声は、ぬかるんだ空気にも朗々と響いた。禍々しいほどに。

「キズオト。ツミは私の物よ」

え、と目を見開くキズオトを前にして、ナゲキは彼女を殺すための術を起動させ始めた。

『不浄の地に潜む呪われた神。私が操る水を肉とし、土を脆い骨として、今ここに立ち上がりなさい』

キズオトにはナゲキが何を唱えているのか聞き取れない。ただ、己に従う清浄な風を呼び集め、不気味に蠢く沼に目を凝らしている。そして、ナゲキがすつと掌を上挙げた。

『さあ、私に従いなさい、やそまがつひのかみ八十禍津日神』

ナゲキとキズオトの間に、身の丈六メートルほどの泥の巨人が立ち上がる。

『ほら、ご挨拶なさい』

巨人がキズオトに向かい拳を打つ。

「天狗！」

風を操りキズオトが飛翔し、拳をかわす。

だが、拳は一つではなかった。

「うあ！」

左斜め後ろから。大質量の鈍い衝撃が、少女の身体を軽々と吹っ飛ばす。

巨人は三体いた。それを、飛ばされながらも身を翻し、背中から泥に落ちた彼女は見た。

「う、うう……身体が重い。臭いよ」

泥は肉の爛れるにおいがした。その泥を身に付着させたまま、ふらふらと飛ぶキズオト。その動きは、至極ぎこちない。

「ふふ……。どうやら、うまく風を操れないようね」ほくそ笑むナゲキ。

彼女の言葉の意味は、この 八十禍の沼 に吹く澱んだ風はキズオトには操ることができない、ということである。キズオトは澄んだ綺麗な風のみ手足のように操ることができるのだ。

『もつとあの娘をいたぶりなさい』

三体の巨人がキズオトに肉薄する。

振り上げられる拳。

「そんなの！」

キズオトは乱暴に加速して巨人達から距離を取る。充分に距離を取ってから強引に旋回し、叫ぶ。

「入道、こいつらをぶつとばして！」

招かれる暴風。

巨人達の身体が大きく削がれる。

しかし、それを見たナゲキが笑みを崩すことはなかった。

「……愚かね」

キズオトの背後に泥の砲弾が撃ち込まれた。

「か……………」

声も出せず、受け身を取ることもできずキズオトは泥にめり込んだ。

「八十禍津日神はこの沼そのものよ。この巨人は形に過ぎない。

どれだけ壊そうと、意味はないの」

新たに巨人が立ち上がり、起き上がるうと泥の中で足掻くキズオトを踏みつけた。

「ふふふ……溺れてしまいなさい」

風がキズオトを救おうと泥をえぐり始める。

ナゲキは、そこに追い打ちを掛けることにする。

『八十禍津日神。子供の肉が欲しいのなら、もっと頑張りなさい』

沼に無数の人型が立ち上がった。それらはキズオトに向かつて一斉に走り、次から次へと倒れ込んで少女を埋めていった。

「メディー」  
喜劇のような光景。ナゲキは腹を抱えて笑い出した。

だが次の瞬間、ナゲキは激しい頭痛を憶え頭を抱えた。

「ぐ……ササヤキ。邪魔するんじゃないわよ！ 私の下位存在のくせに」

意識を覆そうとするササヤキにナゲキは抵抗する。その間ナゲキの使っている術は乱れ、キズオトは徐々に泥の中から脱出し始めていた。

さらなる頭痛が彼女を襲い、同時にキズオトが顔を泥から出したとき、ナゲキの意識が途絶えた。

「キズオト……！ 私の声が聞こえる？」

疲弊しきった顔のキズオトが呼ばれた方向に顔を向ける。その顔面は黒く染まり、目には狂気にも似た獣じみた光が宿っていた。

「サ、サ、ヤキ……？」

ササヤキもまた顔面蒼白の様相。しかし、意志の込められた強い口調でキズオトに呼びかける。

「キズオト、あなたの封じたものを解き放ちなさい」

キズオトの目が驚愕に見開かれる。

「だめ……、あれ、はだめ。だってあれを使ったら、あたし、抑えられなくなる……！」

彼女の声から滲み出る強い恐怖。もしツミがこの場にいたとしたら、何故彼女がここまで怯えてしまうのか想像もできずに狼狽えているところだろう。

そんなキズオトに、ササヤキは重ねて呼びかける。

「お願い。本当なら私が自分で命を絶つべきなのだろうけど、ナ

ゲキがそうはさせてくれないでしょうから。だからお願い、私を殺して」

「あれ」と使うこと。キズオトとササヤキ、そしてナゲキの共通認識では、それは誰かの死と同義であった。

「キズオト……、わたしはあなたを殺したくない。もちろん、あなたに私を殺させたくもない。でも、他に方法がないの。どちらかしか選べないのなら、身勝手かもしれないけど、私は後者を選ぶ。」

「ごめんなさい、キズオト。私の……可愛い妹」

『不浄の場に身を潜める、清廉なる水達。私の大切な家族を助けて』

やそまがつひのかみ  
八十禍津日神を従えるのはナゲキ。ササヤキの指揮下にはないので、彼女は別の術でキズオトを救出しなければならない。

さらにササヤキは大気に囁きキズオトの助けとなる風を呼ぶ。

「さあ、キズオト。私が私<sup>ササヤキ</sup>である間に……」

ヤソマガツ  
泥はこの瞬間にもキズオトを飲み込もうとしていた。足下に這い寄る感触が、キズオトの心を舐める恐怖の舌となる。加えて「あれ」を呼ぶ事への恐怖。二つの恐怖が、キズオトの精神を掻き乱していた。

「ふふふ…… あつははははは ! キズオト、死になさい!」

この声を引き金にキズオトの恐怖が弾けた。  
ついに、叫ばれる。

「すべてを毀して……… ダイダラボッチ!!」

槌を振り下ろす音。目に見えない巨人が地面を殴りつけているかのように、沼に次々と無差別に大穴が空き始める。

まるで一面に爆撃を受けているかのようにだった。槌を振り下ろす音が響くたびに、沿に直径四・五メートルの空気が開き大量の泥が飛び散った。

八十禍津日神の意志がナゲキを護ろうと、山のような防壁を作り出す。

この防壁に反応して、今まで無差別だった不可視の打撃がそこに集中し始めた。

その光景は、まさしく巨人が山を手で掘っているかのようなものだった。巨人の手は見えざるものだが、確実に山は抉られていく。

キズオトはそのありさまを呆然と眺めていた。自らの意志を失い、壊れた人形のように、ただ呆然と。

やがて、泥の山の中から女性の姿が見えた。  
ラヒス・ラスリ  
天を見上げる、優しくな瑠璃石の瞳。彼女はササヤキだった。

風の巨人の一撃が加わったとき、彼女の身体は風船のように割れて潰れた。

\*

猛り狂う風の中で、泣きじゃくる少女が一人。

風と言うよりは、それは不可視なる暴力であつた。泥は幾度も挟られ空に散り、周囲を黒く塗りつぶそうとしていた。けれど、どれほど暴威を振るおうと風は収まることを知らなかった。

キズオトの体力を蝕んでいようと。

彼女の普段着ていた袷も、この様な事態を防ぐためのものだった。

「二（荷）式封印術。意志を継ぎ、我、汝を慰撫せん」

キズオトの影の中から声が聞こえた。声と共に、影から美しい顰甲の簪が現れ、彼女の髪に挿された。

「ネ、ガ、イ……？」

むせび泣く声で呼ばれた名の主は、影からわき出るように現れた。漆黒の振袖を着たネガイが、キズオトを背中から抱きしめ、囁く。

「これはササヤキ殿の願い。十年より前からサキ様より自らの終局、この日のことを告げられていた彼女は、この簪を貴方への別れの品として用意し、届けることを願われたのです」

告げられたことを噛みしめるように、キズオトは愛おしげに簪を握り締めた。

簪はキズオトの力を吸収し鎮め、淡く光を放っていた。

ネガイが問う。

「キズオト殿……貴方の‘願い’はなんですか？」

零れる涙。悲しい声で答えは告げられる。

「あたし、もう家に帰れない。もう、ツミに……お兄ちゃんに、会えない。だから、あたしを現に送って。力を失い、いつかしわがれて死ぬように」

「承りました」

引き留めはしない。それがネガイの本質であつたから。



黒き深淵が開く。現へと落ちるための、戻ることのできない扉だ。  
「ばいばい、お兄ちゃん。元気だね……」

最後の力で風に別れの言葉を託し、キズオトは長き時を過ごした  
世界を後にした。

## 6・0「風の舞／氷の囁き」（後書き）

この小説は基本ツミの主観文なので、今回は第六幕の零話と言うことになります。

今日の解説：ダイダラボッチはあちこちで呼び方が変化する巨人の名前です。攻撃のイメージ的には、テイルズシリーズの魔法「ゴツトプレス」ですけど。

それと、八十禍津日神。黄泉の国から逃げてきた伊邪那岐が楔ぎを始めたときに出てきた疫病神です。よく奉れば災厄から護ってくれるらしいですよ。

ササヤキさんが死んでしまいました。それにキズオトもいなくなりました。

しかし、キズオトはまた次回作で活躍してくれるでしょう。ササヤキさんとナゲキさんも復活させてみたいな、とか思ってます。

## 6・1「別天津神」

『ばいばい、お兄ちゃん。元気でね……』

その言葉を、確かに僕は受け取ることができた。

そして、彼女の思いとは裏腹に、僕はこの言葉が贈られた経緯を知っている。キズオトとナゲキさんと、そしてササヤキさんの戦い。それがいかなるものだったのか、僕は知っている。

語り聞かされた。僅かなうたた寝の合間に。

『泣かないのか？ 悲しくないのか』

頭の中に直接響く声。彼女たちの戦いを語り聞かせた声は、僕の心を覗きながら話しかけてくる。

「悲しくないわけじゃないよ……あめのこたちのかみ。突然のことに何も考えられなくなっているだけだよ、あめのこたちのかみ 天之常立神」

そうか、と古い刀に宿る意識が答える。

家に帰り着き、ア力を部屋に寝かせネガイさんに彼女を任せた後、僕は部屋でただ独り呆然としていた。

壁によりかかり立ち膝の姿勢でうたた寝を始めると、天乃常立は僕に語りかけてきた。

まるでかねてからの友達のように、実に気安く僕に語りかける。

『わかった。吾あは心を持たぬので良くわからぬが、御身おんみも無理はするなよ』

「ありがとう、天之常立神」

『御身、その呼び方はやりづらくないか？ 吾のことなら、トコ

と呼べ。吾もいちいち人のつけた長い名で呼ばれたくない』

本当に友達みたいだな。

「わかったよ、トコ」

それから、しばしの沈黙。

話すことのできる相手と共にいて、何も話さないのは一般に居心地の悪いものだと思ふ。

だから、僕は尋ねることにした。

「トコ……それで、どうして今になって僕と会話を始めたの？」

刀を膝に乗せ、僕は彼との会話を始める。

『その理由は一つではない。』

まず、御身が始めて吾を手にしたときは、吾はまだ寝ぼけた状態であつたからだ。それに、御身の波長と合わせられるようになり、念波を授受できるようになるまで時間が必要であつた。尤も、それは半年前には済んでいたが。

そうだな、一番の理由は、今がその時期だと感じたからだ。御身が大切な存在を一時に三つも失つた今だから。』

彼は一拍作り、それから僕に問う。

『御身に問う。御身は、吾の目的は何だと思ふ』

そんなこと、わかるはずがない。

率直に僕は答えた。

その答えを愉快に思つたのか、思わなかつたのか。とにかく彼は、ふむ、とだけ短く呟いて話を続けた。

『当然、だな。吾にも目的があるわけではない。目的など、想念を持つ人間やそれに似た存在が持つものだ。』

だが、吾には存在理由というものがある。原始の時に現れ、神代の歴史にも僅かに名のみ残すだけの神と同じ名を持つ理由がな。

御身、すべての世界の有り様、つまり現うつと幾多の夢まぼろしが存在するこ

の宇宙を如何に思う』

二つ目の問い掛け。

だが、僕は直にそれに答えなかった。

「君は、古事記や日本書紀に記された天之常立神とは違う存在なのかい？」

質問を質問で返したことで機嫌を損ねた様子もなく、答えは淡々と返ってくる。

『そもそも、人間の神話など架空の物語に過ぎん。現状の宇宙と照らし合わせて、その成り立ちを想像しただけのものだ。吾の名を考えればわかるう。‘天之常立神’など、吾の真の名ではない。吾に名はない。人間が今の名を付けるまで、吾は別の存在であった。しかし、名を与えられ、存在を定義し直され、吾は役目を、存在理由を得た。故に、吾は問うのだ』

そして彼は沈黙した。後は、僕が答えるべき時だ。

この宇宙の有り様、か。

そう問うからには、彼は現状をよしとしていない、もしくは彼の性に乗っ取って言い直せば、彼は現状に何らかの変化をもたらすために存在している。彼は世界を変えるための器物であり。

「僕はトコの主人、と言うことになるのかな？」

『そうだ』彼は短く、はっきりと答えた。

『御身おんみは月読命シヅノミコだ。支配する天照大神あまてらすのおおかみと同列であり、しかし現うつでの権限を持たない御身こそ、夢まはゆしを王城とし吾を振るうにふさわしい』

話がだんだん大きくなってきたな、と思った。

僕は彼によって新世界の王に祭り上げられようとしているのだ。が、そう心に思っや、頭の中でそれを否定する声が響いた。

『吾に目的はない。御身を促すのは、それが定められた吾の性だからだ。それ以上の理由がないことを忘れてもらいたくない』

確かに、語りかける彼の声にこちらを強制するような調子はない。

では、彼の言う通り、僕個人にとってこの宇宙がどういったものなのか考えてみよう。

今、僕の心にある大きな出来事と言えば、ヨミを死なせ、キズオトがササヤキさんとナゲキさんを殺し、そのキズオトも心に傷を負ったまま僕らの下から去っていつてしまったことだ。

彼女たちの殺し合いが起きたきっかけは、ヨミが現れたこと。ヨミが死なせなければならなかったのは、夢同士が戦争をしなければならぬという節理があるからだ。

夢の統一を行えば良い……？

『夢の統一というのは難しい話だ。夢が一団となれば、それはもう一つの現となる。そうなれば、現と夢がつぶし合うことになる』

戦争が起きる。それも、接頭語に‘大’が付くほどの。

『吾が御身に与えられる力には、御身の陣営を勝利に導くほどの可能性はある。だが、一度大戦争を起こせば、宇宙は大きく破壊されることは不可避だ』

『しかし、夢を統一する方法は一つではない。御身が許すのなら、吾はその方法を語ろう』

とりあえず話は聞いておこう、そう思って僕は彼を促した。

『夢を統一するもう一つの方法。それは夢だけを一つにするのではなく、現を巻き込んで夢を統一すること。形としては、現を夢で浸食し、夢を現に染み込ませることになる。』

だが、これを行うことは大罪を犯すことと同義だ。

夢とは単に現の失敗作として存在するわけではない。現を循環する無数の魂が零す負の想念、それを拡散させ宇宙の彼方に消し去るために夢がある。

現と夢を統合してしまえば、魂の撒き散らす負の想念は、その統合された世界の中で処理されることになる。それは、膨大な量の異形として顕在化する。異形を徘徊する世界の理は、弱肉強食だ。御身は力のみが理となる世界を創ることになるのだ』

暴力の支配する世界を創ること、それが大罪の意味か。

「僕らの力で何とかならないの？」

『もちろん、御身が王となり統べることで宇宙に調和をもたらしすることはできよう。しかし、それは人のみのままでは不可能だ。広き宇宙を統べることができるのは神。だが、神代が有限なのは既に実証済みだ』

彼の言う通り、完全である世界である現からも神々は姿を消していき、末裔である皇族も第二次世界大戦に降伏したときに現人神を止めた。神の時代とて有限なのだろう。

一つ思いついた。

「トコ、君の主は、僕の前にもいたのかい？」

珍しく少し間があった。答えづらいことだったらしい。

『そうそう吾の主人になれる者はいない。‘天之常立神’と呼ばれるようになってからは、御身が三人目の主だ。先の二人の主は、吾を使い何かを為すことはなかった。ただ、それはこの名である頃の話。それより昔、別の名で呼ばれていた頃は働きをすることもあった。しかし、今それを御身に語ることはできない』

今の話は、日本神話より前にも別の神代があったことを示唆して

いる。

神は変わる。彼の言うままに僕が神となったとしたら、僕も変化しながら永劫の時を過ごすことになるのだろうか。時代の変わり目に犯される大罪を背負って、人として生きることが永遠に取り戻せないまま。

途方もない話だ。

僕だって、ちっばけな一人の人間ではなかったのか？ 何処をどう間違ったら新世界の王だの神だのという話になるのか。

『御身は特別なわけではない。平凡でもないが。他の魂よりも持ち得た可能性が少し多かった。それだけだ』  
すべては僕の選択か。

「今、選はないといけないのかい？」

『否。御身が減じるまでで良い。御身が減じる、その刹那まで吾は答えを待つことができる』

そこまで聞いて、僕は会話を打ち切った。

少し、家族とも話したくなった。

\*

居間とサキの部屋を隔てる襖障子の前に立ち、入って良いかと尋ねる。どうぞ、と返答があったので僕は襖を開けて部屋に入った。

薄暗い部屋。中央に正座してサキは僕を待ち受けていたが、

「あら……ツミさんには暗いですわよね」

彼女は立ち上がり灯りを点けようとした。

「いいよ、そんなに楽しい話をしに来たわけじゃないんだし」

「そうですか……、ネガイがいればお茶でもお出しできるのです



が」

ネガイさんはまだアカについていてくれているようだ。  
サキと僕は薄闇の中で向かい合って座った。

「それで、何からお話し致ししょうか」

気負いなく彼女は聞いてくる。その声の調子に、僕は少しだけ肩の力を抜くことができた。

「そうだね……………まず、天乃常立と話したよ」

この話題で良いのだろうか。

しかし僕は思う、悲しいことを話してもきりがないだけだろうと。  
「もう、決められたのですか？」

サキは、僕と天乃常立が何を話したかを訊かない。

「まだ、だよ。それで、サキに一つ訊きたいことがあるんだ」

「何でしょう？」

「この夢はあとどのくらい保つの？」  
まほろし

「それを聞いてどうなされるのですか」

サキの言う通りだ。

しかし、他に尋ねることは思いつかないし、この質問を撤回する気も起きない。そうして、僕が黙ってしまったが、サキは質問には答えてくれた。

「この夢はツミさんがご健在な限りは、天乃常立によって当分維持されるでしょう。ツミさんが何らかの形でこの夢を去られたとしても、最期のお一人がここに来られるまでこの夢は存続します。しかし、いつかはこの夢も終わりを迎えることには変わりはありません」

「最期の一人？」

サキはぴたりと口を閉ざし、それ以上何も言わなかった。

僕がこの夢を去るとき。

それは世界を改変しに行くときだろう。だが、誰のために、何のために、僕はそれをするのだろう。

世界を変えたとしたら、僕には理由が必要だ。

ふと、問いが生まれた。

「君は、夢同士が戦争することをどう思っているんだい？」

じ、とサキは僕を探るように見た。

「……その質問には答えることはできません。答えれば、ツミさんの選択に干渉してしまうことになりますから」  
そう言ってから、彼女は卒然と咳き込んだ。

「サキ？」

白衣の袖で口を押さえながらサキは答える。

「すみません。実はこのところ体調が優れないのです」

僕がヨミをこの夢に置いたせいだ。

そう思うや、彼女は僕の心を読んだかのように首を横に振った。

「お気になさらないください。もう、終わったことではありませんか？」

居住まいを正して彼女は言った。

「それより、ツミさんこそお疲れではありませんの？」

そうかもしれない。

では、と彼女はここに来て始めて優しげにほえんだ。

「少しの間、私わたくしと同じ床でお休みになりませんか？」

一瞬、頭の中が白くインシヤライズされた。

「サ、サキ……今はそう言う気分じゃないよ」

僕が言くと、サキは軽やかに笑って答えた。

「私も同じですわ、さすがに。しかし、だからこそ、二人身体を並べて安らぎを得たいと思うのです。重ね合うのではなく」

僕はその時、家族というものを改めて認識した。

それは、広漠たる宇宙の中で、人々が結びうる最も強い絆の一つ。孤独を退け、安らぎを分かち合うことができる存在。

サキの敷いた布団は、やさしい蓐はなあやめのにおいがした。

僕を包んだ二つの腕の中は、やわらかな花文目はなあやめのにおいがした。

ふいに、涙が落ちる。

「僕は、何のために生きているのだろう……」

大切な人を護るためにこれまで多くの人を殺し、でもその人も失った。

僕のせいなのだろうか？ それとも、この宇宙のせい？

「ツミさん、私はここにいます。アカもネガイも、まだあなたの側にいます。でも、あなたが神になることを選んでしまえば、あなたはここにいらなくなります。」

ヨミちゃん、キズオトちゃん、ササヤキさんにナゲキさん。どの方もかけがえのない存在ではありますが、それでこの宇宙全体を否定することができませんの？」

彼女の言うことは尤もだと思った。この宇宙には、僕のものではない、悲喜こもごも沢山の想いがある。ただ

「僕は……悲しい」

あとは、ただ泣くことしかできない。

サキの胸に縋り付いて、僕はひたすら子供のように泣いた。

## 6・1「別天津神」（後書き）

会話ばかりでしたね。トコの説明みたいな会話のおかげで文章の量も多めです。

それにしても、ツミの冷静さにはちょっと難儀しました。本当に、家族を失ったことを悲しんでいないかのようなツミ。最後のシーンで、ようやく泣いてくれましたけど。

おいの描写で用いた花は、実際のにおいよりも花言葉で選びました。だって、本物のおいなんて良くわからないし……。

## 6・2「みことのり」

天戸あまこのやねの宅に住む者が四人に減ってから三週間ほど経った。  
月齢は朔を迎え、また満ちて今は弓張り月だ。

明るい月の夜、久方ぶりに戦争が起きた。

ぞろぞろとやってくる敵の一陣。妖化した人間達の群れを、僕とア力は二人だけで迎え撃つ。

彼我の戦力差は五十ほど。しかし、僕の傍らに立つア力にこれを恐れる様子はない。僕の腕を軽く抱き、くつろいでさえいるようにも見える。

が、そんな彼女を動揺させることを僕は言ってしまう。

「ア力、ちよつと下がっててくれないかな？ はじめだけ、僕に任せて欲しいんだ」

何で、と当然の事ながら彼女が問う。

「私がやられると思ってるの？ 馬鹿にしないでよ。戦闘力なら、火を使う私の方が上に決まってるでしょ」

「僕は別に家に帰ってくれと言っている訳じゃないよ、ア力。僕の背中に隠れて、初撃だけ任せて欲しいんだ」

髪と同じ色の、赫い太めの眉を顰めて、しかし彼女は承諾してくれた。

「へまするんじゃないわよ。最初をしくじったら、後が大変なんだから」

諭すように言うア力に、僕は、はは、と笑って答えた。

「大丈夫。まかせて」

渋々といった様子でア力が僕の背後に回る。

それを確認してから、僕は天乃常立を抜き放つ。蒼い月光の下、刀身は雪白の光を放った。

「トコ、僕の声が聞こえるかい？」

答えは即座に、僕の頭に届く。

『何用だ、我が主よ』

手の中の刀は、かつてのような暴走の気配を全く感じさせない。目覚めた彼方に宿る意識が、僕を主と認め己の力を自律しているからだ。

天乃常立を正眼に持ち、命令する。

「君の力を見せて。敵の首魁と他に二人だけ残して、他を殲滅するんだ。できるかい？」

『容易いことだ』

僕と敵との距離は最短でも三十メートル。

刀をまっすぐ振り上げ、力を込めず振り下ろす。

簡単な動作。しかし、発揮される威力は絶大。

敵陣が光に包まれ、収まったときには三つの影が残されるのみだった。

「ツミ、あんた今何をしたの……？」

背後から驚愕に震えるアカの声が聞こえる。

だが、僕は答えない。

「……瞬間移動する」

『では、空間を切り裂いて繋げばよい』

指示された通り、空を切ると光の裂傷が造られる。

そこに踏み入ると、次に立つ場所は敵の首魁 残された三体の中で最も気配の大きい三本角の人間 の眼前だった。

咄嗟に身を退けようとする敵。僕はその胸に、ゆっくりと刀を突き刺した。

絶命すると妖化は解かれる。その敵の正体は、十四歳くらいの少女だった。

敗残兵となった二人は、僕を追ってきたアカによって塵も残さず焼き尽くされた。

「ツミ、今日はすごかったわね。　　で、何見ているのよ？」

僕は少女の骸を見ていた。

アカに問いかける。

「ねえ、この世界は間違っていると考えたことはない？」

「ああ？　とアカは返事した。

「こんなこと、いつもの事じゃない。今更何を言っているのよ」

そうだ、これが僕らの日常だった。

しかし、僕は思うようになった。変えられる日常は、変えてしまおうと。

白い刀、僕を好いてくれる珊瑚色の瞳、天上の金色の月。

それらすべてを見て、僕は呟いた。

「　　現への侵攻を開始する」

これを宣言とした。

\*

家に帰ると、玄関でネガイさんが待っていた。

「ついに決められたのですね」

低い声に一切の感情を込めずに、単に事実を確認するための口調で彼女は言った。

「うん、もう決めた。僕は、月神としてこの宇宙を創り変える」

そう言って、靴を脱いで三和土から上がると、黙って彼女は中に通してくれた。



お吸い物のおいがする。

戦いを済ませた僕とアカのための夜食。

背後で、アカがネガイさんに問いかける声が聞こえた。

「ねえ、ネガイ。ツミの様子が変だと思わない？ あいつ、何を言っているの？」

「ツミ殿は自らの運命を選ばれたのです。 新たな世界を創るために、人を捨て神となられることを」

困惑に満ちたアカの問いに、ネガイさんは極めて無感動に答えた。そして、ネガイさんは僕を追ってアカをうち捨てて居間に入ろうとする。

制止の声が響く。

「そんなんじゃないわよ！ ということか、いい加減私にもわかるように説明しなさいよ！」

いらだったアカの叫び。けれども、僕の心は何百年と生きた大樹の幹よりも揺らめかなかった。

居間の敷居をまたぐとき、サキが僕と入れ替わった。

「おあがりなさい、アカ。あなたの疑問には、私<sup>わたくし</sup>が答えしますから」

僕は黙々と切り身魚のお吸い物を食べ、アカは何も食べずサキとの問答に没頭していた。

囲炉裏端から二人の家族が消えて以来、僕らの食事も団欒もすっかり静かなものになってしまった。今日、久しぶりに会話が盛んになったと思いきや、その話題は一人の若い男が全宇宙を変革しようとしているという物。目の前の光景は、僕の頭の中では、‘滑稽’の一言で表現されるのみだった。

サキは話し、ア力は聞いた。僕が夢<sup>まぼろし</sup>同士の戦争を無くすために、現<sup>うつ</sup>を含んだ全宇宙を変えようとしていること。そのための力、天乃常立のこと。僕が目的のために神となること。そして　そのためこの家を去ること。

僕が夜食を済ませたとき、彼女たちの会話の終了した。

ア力がまず口から発した声は、深い戸惑いに満ちたものだった。

「何で……？　莫迦じゃないの、あんた………？」

誰も何も言わない。

「ササヤキも、あのヨミって子供も、生きていたんだから死んだのも当然じゃない。キズオトがいなくなったのも、戦う意志がなくなった奴が戦場からいなくなるのと同じ。そんなことも、わからなくなつたの？」

僕に投げ掛けられる、張りつめた弓弦のような真剣な視線。

僕はそれをただ静かに受け止めた。

「この夢がいつか終わることも当然のこと。ただ、できる限り生きられるように私達は戦い続ける。あんただって、それを受け入れてたんじゃないの？」

かつての僕はそうだった、と胸の中で思った。

けれども、それは他に選択肢がなかったからだ。僕自身と、なによりみんなの命を守るために戦うしか道がなかったから、僕は戦い殺し続けた。決して、僕が望んだ生活ではなかった。

僕は誰も殺したくなかった。

「仲間や家族を失って悲しむのは僕らだけじゃない。他の夢の人達、そして完全な世界である現の人達でさえ、日々心のどこかで悲しみを覚えながら生きている。そんな世界は歪んでいると僕は思う。そして、僕には歪んだ世界を直すことができるんだ」

ア力の瞳に激怒の紅が宿った。

「莫迦じゃないの！？ 世界を直す？ あんた何様のつもりよ！ 私にだって、他の夢の人達が悲しみを知っていることぐらいわかるわよ。 ツミ、あんたの罪はヨミを見殺しにしたことでも、サヤキやキズオトを救えなかったことでもない。ましてや、何百の人間を殺したことでもない。あんたの罪は‘傲慢’よ！」

ルシファール  
傲慢。

七つの大罪の一つが僕の罪か。

「望むところだよ、アカ。これから僕は、人に生まれた身でありながら神の領域に乗り込むという大逆を犯すんだ。傲慢なんて、何でもないことだよ」

右頬に衝撃を覚えた。

アカが僕を殴った。そして、僕を押し倒し被さるようにして口づけをした。

仰ぎ見た彼女の顔から、落ちてくる涙。

「あんたは大莫迦よ、ツミ。世界が何だっていうのよ。私には、全宇宙の苦しみより、今の生活が無くなってしまう方が苦しい。キズオトもサヤキも、私達の生活を守るために犠牲になってくれたんじゃないの？ なのに、あんたは」

ちらりとサキの方を見ると、彼女も同じ思いであるようだった。憤りに歪んだ、アカの口元。

「もし、僕が」

訊ねる前に、胸を叩かれて制止された。

「もし……もし、あんたに止める気がないなら、私が殺してあげるわ。髪一本も残らないように燃やしてやるんだから」

僕を見つめる本気の瞳。

疲れたな。

この重い心は、彼女の炎に焼かれれば、軽やかな空気になって空に昇っていけるのだろうか。決意といい悲しみといい、僕の心は様々なことで石のように重くされてしまった。石の心は動かない。この心を胸にしまったまま、肺を動かして呼吸するのは苦痛だった。いつそのこと、死んでしまいたいと思うほどに。

けれど、僅かに残った人らしい心が、この想いを表に出すことを抑止した。そのかわり、僕はアカの身体を抱き寄せた。

「僕は君のことを」

愛している？

僕はアカへの愛故に宇宙を変えようとしているのか？

一つだけ言えることは、僕は、アカ、それにサキにネガイさん、彼女たちの存在無しでは生きていく事ができないということだ。例え離れていても、例えいつか彼女が死んでしまっても、僕は彼女たちを護りたい。夢同士の戦争という理由で彼女たちを失うことは、断じて許さない。

僕はアカに問う。

「君は僕のことを愛しているの？」

さつと彼女の顔に朱が昇る。しかし、彼女の答えは、

「……ええ、愛しているわ。どういふことか、言葉にはできないけど……。私は、あんたを無くして生きる気がしないの」

ひたむきな彼女の告白。

僕はアカに言う。

「僕は君のことを愛してはいない」

彼女の表情に衝撃が走った。

「僕は君のことを大切に思っている。でも、この想いが愛なのかはわからない。」

だから、僕は君を置いて現に下ろう。もし、君が僕を失うことができないのなら、僕を追ってくるといい。世界を変える僕の計画を邪魔して、この身を君の手で捕らえて欲しい。

これは僕らの愛を確かめるための遊戯だ。

僕が勝てば、愛ではなく欲望でもって君を所有し奴隷としよう。

君が勝ったときには、愛をもってこの身を君に捧げよう」

こう言えば、君とは戦場で共にいられる。

アカの唇を奪う。舌を侵入させ、眠りの力を送り込んだ。

彼女の瞼が降ろされ、身体から力が抜かれる。その身体を自分の上からそつと降ろし、床に寝かせた。

そして、僕はサキと向かい合った。

「サキ、君のその『最期の一人』を迎えたら僕を追って欲しい。

これは、僕の頼みだ」

僕の言に、彼女は頬笑みをもって答えた。

「わかりました。それがあなたのお望みでしたら、私はあなたを貫く槍ともなりましょう。その代わり、私が勝利を得た暁には、私と共に小さな家庭をもつことをお約束下さいまし」

悲壮感を全く感じさせない、明るい返答。思わず、僕も頬笑んでしまった。

そこに、しかし、と異議を挟んだのはネガイさんだ。

「サキ様はお体が強くありません。この家から出てツミ殿を追うことも、まして戦うことなど無理なことで御座います」

「いいのです、ネガイ。愛とは命を捧ぐもの。私もこの身の二つや二つ、何とでも致しましょう」

ネガイさんは本当にサキのことを大切にしているんだな、と思った。

彼女のいう通り、サキの身体のこととは心配だ。何とかならないものだろうか？

『その娘が女を捨てればよい』

卒然と、脇に置いていた天乃常立が提案した。

確かに、男になれば多少は身体も丈夫になるかもしれないが

「ツミさん、どうかしましたの？」

僕が考え込みだしたのを、サキが鋭く見抜いた。

咄嗟にサキではなくネガイさんを見ると、彼女は天乃常立の言葉を聞いていたらしく、その瞳に微かながら迷いを浮かべていた。

しかし、僕はその際だと思っただけだ。

「サキ……君、男になる気はない？」

一瞬、サキの顔から表情が無くなった。だが、次の時には

「良い案ですね。男性になってしまえば先視の力は弱まるでしょうけど、もうこの家を守らないのであれば必要のない能力でしょうから」

そして彼女は立ち上がった。

「では、アカが起きる前に済ませますか？ 私の閨<sup>ねや</sup>で」

これをやれば、僕はもう引き返せなくなる。

だが、僕はサキの手を取った。決めたから、宣言もしたから。僕は迷わない。

別れの刻がはじまった。

## 6・2「みことのり」（後書き）

何だか今回も話しの流れが変だった気がします。今少し文章の流れをきちゃんと創ってから書くことを努力したいです。

執筆者である私は、温度の低いツミに振り回されています。それに起伏を何とかつけてみようとしているからこんなことになるのかもしれない。

新藤・千尋の言葉を借りるのなら

「それは、神様が弄っているからです」  
みたいなものです。

6・3「see you again」

「うん、ちゃんと固くなるみたいだね」

「あ、あの、ツミさん？ 別にそこまでしていただかなくても」

「ふふ……サキが恥ずかしがるなんて珍しいね。ほら、ちょっとこすってみるよ」

「あ、ふっ 男の方でも、こんなに感じるものなんですの

……？」

「いいや……。元々が女の子だからかな？ そのうち慣れるかもね」

「あ、あ……！ わ、わたくし、もう ！」

「出したいの？ いいよ、僕の手にかけて」

「あの、でも……、っ！」

「力を抜いて、ちょっとだけ力を入れて解放する感じ」

く、と彼女 いや、彼の身体が震え、掴んだ生殖器の先から粘性の高い熱いものが迸る。変わらない高い声が、絶頂の叫びを放ち、やがて途絶えた。

気絶したサキを寝かせると、閨の薄い闇の中を、黒衣着物を着たネガイさんが歩いてきた。

「もしかして、これが欲しいのですか？」

「はい」

白い液体のついた手を差し出すと、ネガイさんはそれを熱心に舐め始める。

手のひらを舐める生暖かい感触を覚えつつ、頭の片隅で僕は思った。

この戯れももう終わりだ、と。



＊

夜が終わらなかった。

一眠りしても、夜闇は変わらず外にあった。満ちる手前だった月は、時間を早めて満月となって空の中心に坐していた。

星々も盛大に輝きを放ち、まるで昼間のような明るさだった。

僕を待つている。

しかし、僕は夜色の天球に命じる。

「この旅立ち是我のみのものに非ず。我を愛する者、赫き焰と太陽を従える者の旅立ちでもある。天よ、我に仕えるのならば我が意を汲め」

言つや、空が変わり出す。月は東に、日は西に、対極の方位に対極である二つの輝きが向かい合った。僕はこの様を当然のように見詰め、しかし心の中では微かに懼れた。

そんな誰そ彼の空の下、僕らは家の北にある 活杙いくぐいの霧処 に訪

れた。この夢まぼろしから扉を開き、ア力は現うつへ、僕は

「淡島あわしま へと向かう」

「心得た、我が主よ」

かつてキズオトから聞いた、純正の力が形を為したという伝説の地を目指す。

抜刀した天乃常立が強く輝き出す。それに応えて、八衢川を挟んだ対岸の霧の中で、何かが開く気配が伝わってきた。

大きな扉だ。

おそらく、活杙の霧処 全域が扉と化したのだろう。霧の中に足を踏み入れれば即、この夢から旅立つことになる。

だから僕らは、穏やかにたゆたう川の辺ほとりで別れを告げ合うことに

した。

まずはサキ。

いつもと変わらない鮮やかな巫女装束。性別を変えても、ゆつたりとした服の上からはその変化はわからない。かんばせもまた同じ。あどけない、愛らしい顔のままだ。

「サキ、少しの間寂しくなると思うけど、ネガイさんと二人で頑張つてね。現に来たら、まず一度だけは会いに行くから」

サキは慎ましかに頬笑んで応える。

「ええ、いずれまた。その時まで、あなたの征戦に武運がありますように祈っていきましょう」

失望に心を奪われてしまった僕と違い、彼女の微笑に何と希望が充ち満ちていることか。本当に、<sup>さき</sup>未来、という名は彼女にこそふさわしい。

次にネガイさんを見る。

喪服のような黒い着物に身を包み、静かな面持ちで僕を見ている彼女。揺らぎのない彼女の雰囲気は、頼もしいの一言に尽きる。

「言うまでもないことかもしれませんが、サキをお願いします。

ネガイさん。サキの剣となり盾となり、彼女と共に戦ってあげて下さい」

こくり、とネガイさんは肯いた。

「承知しております、ツミ殿。刻が来れば、この身を貴方を討つための矢へと変じる覚悟をしております。ですから、一切の憂いは捨て、戦いに赴き下さい」

僕のすぐ傍にアカが立っている。

僕はまだ今すぐに彼女に別れを告げる気はない。しかし、彼女はサキとネガイさんに別れを告げなければならぬはずである。

だが、彼女の口から言葉が出る兆しはない。

僕はそつと自分と同じ背丈の女性の手を取って、川を渡り始めた。

「アカ！」

呼び止める声。

アカは俯いたまま、振り向こうとしない。

「see you again」です、アカ。私達は、これからも友達ですわ」

顔を背けた、アカの瞳に何が浮かんでいるのかはわからない。

僕は誰にも何かを言うことはせず、ただサキに一度頷いてからアカの手を引いて霧の中へと向かった。

科学では知ることのできない神秘的な力。あらゆる世界と通じるための扉を開くために多量の神秘<sup>エナジー</sup>霊力が活性化された 活杣の霧処は、極彩色の光が舞う幻想的な美しさに満たされた場所となっていた。

今、左手はアカの右手を握っている。

この手を離せば、僕らはそれぞれの目指す場所へ、半ば流されるようにして運ばれるだろう。

別れを告げるために、手を離してしまわないように注意深く彼女の左手首を握り直して向かい合った。

目を合わせたとき、彼女の双眸は後悔の色に染まっていた。

「私……莫迦ね。あんたに劣らず」

彼女が零した。

「私、自分の気持ちしか、あんたのことしか見てなかった。私が‘私達’と言うとき、私は自分とあんたのことしか考えていなかった。でも、私以外の人は違った。サキもネガイも、あんたでさえも、自分以外の三人の家族のことを見ていた」

手を握り替えて、彼女は身体の横側を僕に見せて遠くを見やった。  
「もう、サキに別れを言うことはできない。うん、できるかもしれないけど、それは反則だから。……次に会うときは、きっとあの子とは敵同士になっている。だから、もう友達としてさよならすることはできない」

そして、彼女は僕に向き直った。

あたたかな熾火のような、慈愛に満ちた瞳。

ゆっくりと瞼を降ろして、僕は口づけをかわした。互いの唇を味わい、舌を絡め合うように。

唇を離すと、名残惜しむように唾が橋をつくって、壊れた。

再び見つめ合う。ファイアオパールの瞳には、毅然とした光が宿り、口元にはいつものような強気な頬笑みがあった。

「これであんたともお別れ。次に会うときは、本気であんたと殺し合う。この胸の愛を焚き代にして、憎しみの炎でその罪ごと焼き尽くしてあげる」

僕は笑って答える。

「今日の君は、とても素直だね」

「……最後だから、ね。ここで別れた後は、あんたを憎悪でもって想い続けることになるから」

彼女がそう言うと、赫い瞳が一瞬だけちらりと金色になった。笑みをかわし、横に並ぶ。

しばらく一緒に歩いてから、互いにそつと結んだ手をほどいた。わずかに歩く方向を左右にずらせば、相手の姿は瞬く間に見えなくなった。

「さようなら、私の月」

『御身はまだ引き返すことができるのだぞ』

ふいに、天乃常立が言った。

「トコ、気遣ってくれているのかい」

『主となった人間に宇宙を変えさせるのが吾の存在理由だが、これは責務ではない。御身が辞するのなら、吾はまた次の時を待つ。それだけのことだ』

「僕は君のために宇宙を変えるわけじゃない。僕は……みんなのために、宇宙を変えるんだ」

そう、‘みんな’のために。

何と漠然とした存在だろう、‘みんな’とは。僕は、エゴイスティック利己的な理由で犯すだろう大罪の呵責に早くも悩み出しているらしい。そして今、僕はその言い訳のために、‘みんな’という妖しい存在にこの行為を捧げることを決めたのだ。

罪を犯す者を悪党と呼ぶのなら、僕は小悪党だ。

それでも、僕は戦争を、侵略を、征服をするだろう。絶対的な力を手に、利己的な想いを胸に。いつか誰かに倒されることを望みながら。

迷わない。

行こう、力を得て、心を捨てに。倒されるべき化け物となって、失望を爪牙に宇宙を掻き乱そう。

これが、ツミという存在の終わりでありはじまりだった。

はじまりのおわり

## 6・3「see you again」(後書き)

いつの間にやらここまで来てしまいました。

結局私は、この小説において執筆者にはなれなかったです。ただ、ツミの言葉をつなぐ聴者、つまりこれを読んでいる皆様と大差なく終わってしまいます。

努力を、自らに命じます。続編もあることですし、なんとか発展していきたいものです。

では、終幕で会いましょう。



## 終幕「月二捧グ追走曲ト短調・導入部」

サキが物語りを終えた。

その夜、いつも灰色だった月が綺麗な青になっていた。

その夜、吹かないはずの風がごうごうと吹いていた。

その夜、星さえも明るく光っていた。

味のしない魚の干物を嚙りながら、ボクはサキに質問した。

「じゃあ……サキとネガイは、ご主人様　ツミを追いかけるの？」

サキは、ええ、とやんわり笑って答える。

「そして、あなたもです、チヨ。あなたも、‘ご主人様’にお会いしたいでしょう？」

まあ、サキの言うとおりかもしれない。

そもそも一体どういうわけで猫だったボクが人間になったのかな。そして、どうしてご主人様のいた夢<sup>まぼろし</sup>へ来ることになったのかな。

運命、という言葉がボクの頭をよぎった。

そうだ、ボクはもしかしたら運命みたいな何かの決まりで、ご主人様に関わる必要があるのかもしれない。

ボクはご主人様のことをどう思ってるのかな？

会いたい、と思う。側にいたいと感じる。ボクのご主人様だから、あのちよつと寂しそうな所が好きだから。

でも、ボクの中のさめた部分が、ご主人様は悪いことをやっていて、側にいてはいけないと思わせる。

誰かが止めてあげなくてはいいけないんだと感じる。

ボクはご主人様に同情しない。ご主人様に起こったことはかわいそうなことだったと思うけど、それから今のご主人様のあり方を選んだのは、彼自身の意志だ。ボクが同情する必要はないし、する権利だってないのかもしれない。

だけど、会いには行きたい。ご主人様のやっていること、本当は良いことかもしれないし、何でだったとしてもご主人様に関わりのあるボクは知るべきなのだろうから。

「行くよ、ご主人様に会いに」

「そうですか。では、早速出立することにいたしましょう」

早速つて、今すぐ出るつてこと？

「実を申しますと、この夢も今日でお終いなのです。あと二時間も経てば、星が落ちてきて大変なことになりますわ」

そう言うサキには、なんていうかせっぱつまった感じが全然なかった。

さらに、ボクがあっけにとられて何も言えないうちに、彼は呑気そうに言葉を続けた。

「現に降り立つ際、私達は同じ場所にはいないでしょう。しかしチヨ、あなたの身体には無数の呪印を仕込んでおきました。それは、現にいても人の姿を維持するためのものや、術力と体力を向上させるものがあるのですけど、半年以内に私が更新しないと消えてしまうのです。ですから、それまでに私を捜して合流してくださいまし」

「……サキつて、強引だよね」

ボクがやつと言えたのはそんなことだった。

サキは満面の笑みで答える。

「嬉しい褒め言葉ですわ。でも、私の強引さもツミさんには通用しませんでしたわ」

ちよつと寂しそうになつたサキ。

何となく、ボクはこんな質問をする。

「サキは、ボクのこと好き？」

とたんに彼は、あはは、と笑い始めた。

「そうですね、浅い意味では好きですわよ。あなたの身体も、もつと遊んでみたいと思いますわ」

彼の細い指先がボクの首筋に触れる。調教されたこの身体が、過敏に反応してしまう。

「ほら、かわいい。でも、もつと深い意味ではどうでしょう？ 私は、貴方がどういう人かほとんど知りませんわ。身体のことをいくら知っていても、心の中ではわからない。そうではありませんこと？」

サキの言うとおりだと思った。

ボクもサキのことを大して知らない。昔の話を聞いたけど、今のサキが何を考えているのかはわからない。

「サキはどうするの？ ツミに会いに行くんだよね」

彼はゆるゆると首を横に振った。

「いいえ、私はまずキズオトちゃんに会いに行きます。彼女の力を貸していただくために」

「キズオトは戦つてくれるのかな？」

彼女は現での生活に疑問を持ちながらも幸せと思つてみたいだった。その彼女の生活を乱しても良いのかな？

「現は既にどこであろうと戦火の燦<sup>つつ</sup>つている状況の**バリエーション**は**バリエーション**です。あの子は元より戦士。跋扈する異形に抗しようとしているはず。そして、戦いの起こりに自分が関わっていることを思い出せば、きっと何かをしようとするでしょう。」

その時、彼女が誰と共にいようと決めるにしても、誰かが導いてあげる必要があります。その役目は、きっと私の物ですわ」

サキは自分の立場を、しなくちゃいけないことを、良く考えているんだとボクは感じた。

ボクは

「貴方の行く先は、私<sup>サキ</sup>ではなく大地が示すでしょう。焦ることはありません。心の耳を澄ませておきなさいまし」

……大地。

サキとネガイが立ち上がり、部屋にある裏口の前に立った。

戸板をネガイが手のひらで撫でる。すると、撫でられた跡は漆で描いたように黒くなり、やがて跡が広がって扉は黒く塗りつぶされた。

さあ、とサキがボクは誘った。

「まずあなたからお行きなさい、地代<sup>チヨ</sup>。私の居場所は身体に刻まれた呪印が、あなたの行く先は母なる大地が教えるでしょう。怖れてはいけません。さあ、踏み出しなさい」

ボクは促されるままに、黒い深淵の扉の前に立った。

左には静かに頬笑むサキ、右には無表情なネガイ。サキはボクより少し背が高く、ネガイさんはボクと同じくらいだ。

ボクはサキに口づけした。

彼は少し驚いたみたいだったけど、すぐ齒を開いてボクの舌を招き入れたりした。

「ボク……何もわかんないよ。自分が何をしたらいいのかも、サ

キのことをどう思ってるかも」

サキは黙って聞いていた。

「サキにされたことは、嫌だったよ。でも、サキのことは悪い人だとは思えない。……それで……えっと………」

そつとボクの頬に唇が触れた。

「お行きなさい、すべての想いを知るために。      ここからはじまるのです」

闇の中に踏みいることは大して勇気が必要なわけじゃなかった。身体感覚がなくなり、ただ流されるような感じがしてくる。

流れの中で、ボクは月の神となったご主人様を追うことを考えた。

はじまりの、はじまり

想  
い  
を  
知  
る  
た  
め  
の  
旅

## 終幕「月二捧グ追走曲ト短調・導入部」（後書き）

旅立ち、と言うことでこの小説はお終いです。近いうちに次回作を書き始めますが。

本当に、私はこの小説について何も理解することができませんでした。そのために次回作を書く、チヨ達の旅についていく。読者の方々には迷惑な話でしょうけど。

しかし、小説を書くことは良いことです。小説以外の創作活動もすべてそうです。何かを創るということは人間にしかできないこと。私は何も知りませんが、だからこそ何かを知るために小説を書くのです。

皆様も、何かを為されていますか？ 失望せず、失望しても、歩き続けていますか？

感想・評価お待ちしております。もしありましたら、次回作に反映させていただきます。

ありがとうございます。また会いましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5019d/>

---

my moon

2010年10月8日13時50分発行